

---

# IS ~漆黒の守護者~

加那 翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS～漆黒の守護者～

### 【Zコード】

N6111U

### 【作者名】

加那 翔

### 【あらすじ】

通り魔に殺されそうになつた妹を庇つて死んでしまつた主人公、上条 優哉。

だが、それは神様のミスだつた。

それを償うために神様は上条 優哉をISの世界に転生させる。

――転生した優哉は、

前世では掴めなかつた幸せをこの世界で掴むことが出来るのか。

## プロローグ（前書き）

初めましてのかたは、初めまして  
一度田ましましてのかたは、一度田まして、ショウです

相変わらずの駄文ですが、  
楽しんでいただけると嬉しく思います。

では、どうぞ

## プロローグ

俺、なんか悪いことでもしたか？

目の前で起つている不思議な光景を見ながら、  
俺、上条 優哉は思つ。

不思議な光景というのは、スーパーで売つてゐるような包丁を腹を刺されて殺された

俺の死体が目の前に転がつてゐるんだよね。

……なんか、目の前に自分の死体があるつて氣味が悪いな。

それにして、なんで俺は腹を刺されたんだ？

何故こうなつたのか、俺は記憶を辿つてみることにした。

（～1時間前～）

「……はあ、今日も疲れた」

今日の授業をすべて終え、家に帰つて帰路を歩いてゐる。

「あつ」

家の前まで行くと、なぜか妹が不機嫌そうな顔をして誰かを待つていた。

「……まつ、俺ではないだろうな。俺とはかなり仲が悪いし。

「……はあ、やつと帰つてきましたね。どれだけ待たせるんですか

……と思つていたのだが、妹が待つていたのは俺だったらしい。

「何のようだ？俺と違つて何でもできる恵理さん」  
上条 恵理。俺の実妹。

ちなみに俺と違つて成績優秀だ。

「……その事で……話をしたいんですけど」

「別にいいけど。それじゃあ公園にでも行こうか」  
そういうて俺達は話をするために公園に向かつこととした。  
そしてベンチに座り、恵理が話し出すのを待つ。

「……あのせ、私の守るために兄貴が……その……」  
「あ、なるほどね。」

あいつらから聞いたのか、その話を。

「まあ、その話は本当だぜ」

両親は成績が悪いやつには、暴力でも何でもするからな。  
リアルな話、俺の体にはかなりの傷がついてるし。

「……そうなんだ」

「それで、もういいか？」

話が終わつたと思い、ベンチを立つ。

「あ、“兄さん”」  
「へつ？」  
あれ、今……兄さんつて。  
「あ、ありがとね／＼私を庇つてくれて」  
「いや、別に気にするな……つ……」  
恵理から顔を背け、公園から出ようとしたのだが、

ふと恵理の後ろから怪しい男が近づいていたのに気がついた。  
そしてその男は恵理を見てニヤニヤしていた。

……」いつ、確実に怪しい。

俺は男に警戒はしていたのだが、

予想を遥かに超えた行動をしやがった。

……カバンのなかから包丁を取り出し、恵理に向かって走り出した  
のだ。

「兄さん？」

まづい！ 恵理のやつ、男に気づいてない。

——くそつ、間に合え——

「いたつ……に、兄さん！？ いきなり何を……っ！？」

本気で恵理を突き飛ばし、助けることは出来たのだが、  
俺は包丁を避けれずに心臓辺りに喰らつてしまつた。

犯人は俺を刺したあと、すぐに逃げていつた。

……くそ、俺はあんなやつに刺されて死ぬのかよ。

そんなことを思いながら、地面に倒れる。

「……に、にい…さん？」

「え…り。わるいな……」

そんな俺の近くに座り込んで、泣きじゃくる恵理の頬に手を添え呴  
く。

……死ぬ前に言いたいことがあるからな。

「喋らないで。今、救急車呼ぶから」

「……もう、無駄だよ。目が靈んできたし。

自分でももう死ぬつてことぐらいわかってるんだ。  
だけど死ぬ前に言いたいことがある」

「……な、なに？」

「俺がいなくなつても幸せに暮らせよ」

そう言い終えた瞬間、目の前が真っ白になつた。

死ぬ瞬間つてこんな感じなのか。

そうだ、すべて思い出した。

「……俺、死んだのか」

「そうね。確かに死んだわね」

いきなり後ろから声をかけられ慌てて振り向くと  
白いドレスに身を包んだ天使と間違つてもおかしくないぐらい綺麗  
な人がいた。

「……あら、綺麗だなんて。褒めても何もでないわよ」

あれ、声にだして綺麗だなんて言つたつけ？

「言つてないわよ。心を読んだだけだからね。  
私は神だからね、こんなこともできるのよ」

「……なるほど。神様だからできたのか」

俺がそういうと神様はちょっとびっくりしたようだった。

「……どうしたんですか？」

「いや、今まで私が担当した人達は全員、

信じてない様子だったから。あなたみたいなタイプが珍しくて」

まあ、確かに自分のことを神様だつていう人は痛いもんな。

～～10分後～～

「『めんなさい』！」

「はいつ？」

あれから色々話していたのだが、神様に急に謝られた。

「えっと、どうして謝るんですか？」

「実は私のミスであなたを殺してしまったんです」

はつ？神様のミスのせいで俺が死んだ？

「……話を聞かせてくれ」

「はい……」

それから話を聞いてみると、俺が死んだ理由がわかつた。

なんでもこの人のミスで、本当は警察に捕まつて死ぬはずだった男が  
警察に捕まらなかつたらしい。で、男が生きていたせいで俺は死ん  
だと。

「……なるほどな。だいたいの事情はわかつた」

そういうと神様は少し泣きそうな顔をした。

「……そんな顔をされたら怒りたくても怒れないじゃんか。  
もとから怒るつもりはなかつたけど。

「で、俺は天国に行くことになるのか？それとも地獄か？」

俺の言葉にびっくりしたのか、神様はキヨトンとしていた。  
やつぱり怒られると思ったのか。

「……私のミスではあなたは死んでしまったので、もう一度生き返ります」

「もう一度、生き返るねえ。

「だけどさ、死んだ奴が生き返つたらおかしくないか？」

「そうですね。死んだ世界では、ね。なのであなたには転生してもらいます」

転生？

「そうです。あなたにはとあるライトノベルの世界に行つてもります」

ライトノベルの世界か。なんか面白そうだな。

「……まあ、話はわかつたけど。

どこの世界に行くことになるんだ？」

「そうですね。ISの世界にしましょうか。

理由は私が好きだからですけど」

ISか、俺はあんまり見てないんだよな。恵理は結構、この小説が好きらしいけど。

つてか……そんな個人的な理由で人を送つていいのか。

「……良いんだよ。じゃ行つぐよ」

「ちょ、ちょっと待て！！」

まだ聞きたいことが……

「……お断りします」

神様がそういうと、俺の足元に急に黒い穴があく。

そして……

「ふざけるなあああ――――――！」

俺は黒くて不気味な穴に落ちた。

「あつ、また間違えちゃった。どうしよ！」  
女神の焦つたような声を上から聞きながら。

## プロローグ（後書き）

……いかがでしたでしょうか。

といつてもまだプロローグなので、わからぬいですね。

まあ、これから頑張っていこうと思いまますので  
皆様、応援のほうをよろしくお願ひします。

最後に1つ。

できればこれと同時に書いている小説も  
見てくれたら嬉しいです

## 1話 状況確認（前書き）

おはいんばんちわ ショウです。

さつそくですが謝らせてもらいます。  
性転換ものを書くつもりでしたが、  
作者の力不足により書けなくなりました。

すみませんでした。

なので男主人公で行こうと思つてているのですが、  
それでもいいよ。という方は  
これからも応援、よろしくお願ひします。

## 1話 状況確認

「……アニメとか見て、結構デカいとは思つてたけど。こんなにデかいとは思わなかつたよ」

俺こと【黒月 優哉】は今、IS学園のゲート前にいる。

……何故、女性しか使えないISの使用方法を教育する機関。IS学園のゲート前に俺がいるのかを説明するには、少し時間を要る必要がある。……3日前まで。

あつ、でも具体的な理由を話すには1ヶ月ぐらい戻らないと駄目か。

――1ヶ月ぐらい前――――

俺がISを使えることがバレたのは、転生してから14年たつたある日のことだ。

「転生してから14年たつたし、ISでも作つてみるか」とそんな思いつきでISを作つて完成させたときに起つた出来事。

～～IS作成中～～

「……よし、出来た!」

3ヶ月ぐらいかけて、装甲がほぼ真っ黒のIS【黒影】が完成した。でも、見た目的にはあれだな。

若干、ラウラのHIS【シュヴァルツェア・レーゲン】に似てる気が

。

……うん、気のせいだね。こっちのほうが装甲の数がかなり少ないし。

「……おお、君はHISを作ること出来たのか」

「ふにゅー?」

いきなり真後ろから声をかけられたので、びっくりして変な声を出してしまった。

……ふにゅーってなんだよ。俺は猫か。

そんな皿皿シシミを心の中でしながら、振り返る。

「…………」

そこには、黒髪短髪の見た目好青年の男が立っていた。

「……はあ、びっくりさせないでくださいよ。冬弥さん」

「すまんすまん。まさか君一人でHISを作れるとは思ってなくてねまあ、そう思うよな普通は……。

「で、スペックはどうな感じになってるんだい?」「さつきと話を急にえてくるこの人は、【神崎 冬弥】

原作にはなかった【Black moon社】ってところの社長だ。……この会社名でわかると思うが、神崎家と俺はかなり親しい関係だ。

俺の苗字を英語に変えて使われるべらりの、な。

「そうですね。……まず注目すべき点は、こいつの圧倒的なスピードですかね」

「まつ」

使い手によつては、敵をノーダメージで圧倒することが出来ますか

うね。

……使い手によって、ね。

「……そして、エネルギー系と実弾系、両方の武器をつけていることも特徴の一つですね。後、接近戦もできるし、遠距離戦もできるオールラウンドタイプです」

「……なるほど。これは素晴らしい機体だな」「ありがとうございます。

そういうのいいただければこいつも俺も嬉しいですよ」

黒影に触りながら言つ俺。

そのときだった。

「へっ？」

「な、なんだと…！」

俺が触った瞬間、勝手にIIS……黒影が動いたのだ。  
嘘だろ。ってかなんで俺、触つしまったんだよ。俺のバカ。

つてな、ことがあつたんだよね。

1ヶ月前に……。

……まつ、これがIIS学園に来た1つ目の理由だったな。

で、2つ目が確か……

「すまない、待たせたな」

2つ目の理由を思い出そうとしていたら、ゲートの中から俺に近づいてくる影があつた。

その人物は、鋭い吊り耳に黒いスースを着た女性、  
た。

織斑

千冬だつ

「いえ、別にそんなに待つてませんよ」

「そうか、なら良かつた」

そう言い終えると、千冬さんは……

「……久しぶりだな。黒月」

「そうですね。……5年ぶりですか？」

「ああ、もうそれくらいになるな」

もう、それくらいになるのか。

ISの世界に来てから時間経過が早く感じるな。

「……詳しいことは歩きながら話さう」

時計を見て千冬さんが言つ。

そつか、急がないとまずいのか。

HRの時間は決まつてゐるからな。

## 1話 状況確認（後書き）

感想、待ってます（ ^\_^ ）

## 2話 7年振りの再開（前書き）

いつも、おはいよんちわ。

最近、ブログを友達と一緒に初めましたショウです。

…って、ことで

IS→黒き影の如く→第2話  
じゆうくじ→覗ください。

## 2話 7年振りの再開

「……私が読んだら入つて来い。いいな」

「了解です」

千冬さんにそう言われ、指示通り廊下の壁にもたれながら待つ俺。  
…… そういうえば一つ目の目的って、 “あいつ” 関係だつたよな。  
【Black moon社】の社長、 神崎冬弥の一人娘。  
そして、俺の幼馴染でもある【神崎香菜】。

『……今日は転校生を紹介する。黒月、入つてこい  
おつと、考え方をしていたうちにお呼びのようだ。』

「失礼します」

俺が教室に入ると、驚いた顔をしたやつが3人いた。

……まあ、わかると思うが、一夏と篠。後、護衛対象の香菜だ。  
ちなみに俺が小さいころに一夏と篠と香菜とはかなり遊んでいた。  
俺が8歳の時までは、ね。

「黒月 優哉です。趣味は料理。  
まあ、これからよろしく」

満面の笑みでそういうが、教室は無音になつた。

……あれつ？ 失敗した。

「……男？」

反応が返ってきたのはいいことだけど、  
その反応はちょっと嫌だな。

「残念。髪が長いから間違いややすいけど、俺は正真正銘、男だよ。

なんなら見せようか？勿論、ベッドの上で……」

「…………きやあああ――――――つ――――」

若干、下ネタになつたような気がするが、

そんなの関係ない。……受けければ良いんだよ。受けければ。

「男子……一人目の男子だよ……」

「しかもまたうちのクラス……」

「そしてかなりの美少年……！」

「私、黒月君になら抱かれたい／＼／＼」

おいおい、男が来たからってこんなに騒ぐことか？

……つて、男がISを動かせるのは珍しいことだから仕方ないか。そして敢えて、最後のやつには触れない。

自分から言つたような感じだけど、触れたらマズイ気がする。

「騒ぐな。今は休み時間ではないぞ」

パンッと手を叩いて、千冬さんの一聲かけるだけでうるさかつたクラスが一瞬で静かになる。

さすがですね。一言であれだけうるさかつたのを静めるなんて。

「黒月、お前の席は一番後ろの席だ。さつさと座れ」

「はい」

俺は千冬さんに言われた通りに空いていた席に座り、連絡事項を聞いてHRは終わった。

「よつ、久しぶりだな。一夏」

昼休み。

食堂に昼食を食べに来たら一夏と篠、それに香菜もいる席を見つけて、すぐに向かった。  
……つてか、本当にこの学校の女子は行動力があるな。  
まさかチームで行動して挟み撃ちとかしてくるなんて。

「おう、優哉か。本当に久しぶりだな。  
今まで何をしてたんだ？急にいなくなりやがって」

「それは本当にすまん。……篠に香菜も久しぶりだな  
一夏に謝つてから、一緒に座っていた篠と香菜にも話かける。

「……そうだな。お前がいなくなつてから7年ぶりか」  
なんか、微妙に言葉に刺があるような気がするんだけど気のせいかな。

「ですね。一体、私達に黙つて何をしてたんだか」  
……篠さん、香菜さん？やっぱり言葉に刺があるよつた気が……。

「そ、そういうえば、お前もISを操縦できるのか？」

「あ、ああ。つてか、ここについてるだり？」

そういうつて右耳を見せる。

「……専用機！？」

「ああ、【黒影】だ」

「黒影…黒影…」

ISの名前を言つと、たつた一人、

香菜だけが俺のISの名前を何度も呟いていた。  
……なんだ？ 黒影になんかあるのか。

## 2話 7年振りの再開（後書き）

はい、どうでしたでしょうか？  
楽しんでいただけたなら幸いです。

では、またあえる日を楽しみにしています。

See you again!—(\*、\*、\*)—

……決まったな（・・・・）

（主人公設定）（前書き）

7月24日

主人公の押絵追加

8月4日

主人公の補足 変更

## （主人公設定）

黒月 くろつき  
優哉 ゆうや

性別 男

容姿 背中ぐらいまで伸びしている黒髪。瞳は黒色。

普段は首の後ろくらいで髪を束ねている。

体型は一夏と同じくらい。

性格 困っている人がいると放つておけないお人好し。

料理や掃除みたいな家事全般が好き。

補足 神様によってISの世界に送られた転生者。

原作は1巻の知識と、IS関係の知識と原作キャラの知識だけ残ってる。

専用ISは【黒影】

【黒影】

黒月 くろつき 優哉 ゆうやが作った第4世代型IS。

人には第3世代型ISと言っている。

待機状態は右耳のアーリング。

外見はラウラのIS【シュヴァルツェア・レーゲン】に似ているが、

装甲の数は圧倒的に少ない。

## 特徴

全体的にバランスが良いが、一番飛び抜けているのはスピード。その代わり、シールドエネルギーは白式並みに低い。

## 使用武器

### ・月光

刀身、柄。全てが黒で出来ている刀。黒影の主力武器。

### ・黒星

一転集中型のビームライフル。威力はかなり高いが隙がありすぎるためあまりつかわない。

## ワンド・オフ・アビリティ 单一仕様能力

### 【電光石火】

自機のスピード・攻撃力を圧倒的にあげる能力。

——おまけ——

主人公の見た目

> i 2 7 9 5 3 — 3 5 3 3 <

こんな感じです。

……下手ですみません。

## ～主人公設定～（後書き）

という感じになっています。

### 3話　IS訓練（前書き）

色々、不幸なめにあつたため、改名して、心機一転、頑張ろうと思つた。  
加那翔かな しょうです。

いやあ、不幸つてかなり近くにあるもんですね。  
……上さんの気持ちが分かつた気がする。

「では、これよりIISの基本的な飛行操縦を実践してもらひ。織斑、オルコット。それから黒月、お前もだ。試しに飛んでみせろ」

千冬さんはそういった後、香菜を見た。

すると香菜はその視線に気づいたのか、首を縦に振った。

……なんだ？ 何かの合図か。

まあいい。今はまだ、考えないでおじへ。

「……了解です」

俺は右手でイヤリングを触り、意識を集中させる。

（翔るぞ、黒影）

心中でそう呟くと、体全体に装甲が展開される。  
……0・5秒。それが俺のIISの展開時間だった。

「早くしろ。熟練したIIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」  
千冬さんが急かしてくれる。

はいはい、だから展開しましたよ。

……つて、これは俺に言つたんじゃねえな。一夏にか。

「早くしろ」

また一夏は、千冬さんに急かされてるし。

そういうえば、さつき千冬さんが言つてたけど、熟練した操縦者は一秒とかからないんだつたな。

ちゅーことは、俺は熟練した操縦者つてことになんのか。

……操縦なんてあんまりしてないんだがな。

「よし、飛べ」

おっと、考え事をしている間に一夏は展開を終えたみたいだな。  
ならやつせと飛ぶか。セシリアもちやつちやつと飛んじやつてるし。  
ちなみにセシリアとは、転校してきたからだがかなり仲良くなつた。

「……じゃ、お先つ」

途中でセシリアを抜き、遙か空中で止まる。  
すると、ほんの少ししてからセシリアが来る。

「本当に早いですね」

「……このスピードの代わりに

シールドエネルギーはかなり少ないけどね」

そう、黒影のシールドエネルギーは【500】しかないのだ。  
……白<sup>びやく</sup>式とあまり変わらないんだよな。

「ですが、当たらなければ

シールドエネルギーの少なさなんて関係ありませんわ。  
現に私があなたと戦つても、勝てる気がしませんもの」

あれつ？セシリアって、こんなんだつけ？

一夏に負けたからつて、この反応はなんか違うような気がするんだ  
けど。

……もしかして俺<sup>イレギュラー</sup>が入ったから、物語<sup>ストーリー</sup>が変わった？

『何をやつていてる。スペック上の出力では白式の方が上だぞ』  
……まあ、俺の黒影の出力より白式のほうが上なんだよな。  
でも、俺のほうが早いと、どうこういってしようね。  
なんとなく予想はつくけど。

「一夏さん」、イメージは所詮イメージ。

自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的でしてよ

「そういうわれてもな。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。

なんで浮いてるんだ、これ

一夏は背中に付いている翼状の一対の突起を見ながら言つ。

……どう考へても、それはないよな。

「……説明しても構いませんが、長いですわよ？」

反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい

まあ、確かに断るわな。

そんなクソ長い話、聞いてられないし。

「俺もいらないぞ。一応わかってるし」

セシリ亞は一夏を見たあと、俺を見てきたので即座に断る。

「……そう、残念ですわ。ふふつ」

そんな俺達を見て、楽しそうに微笑むセシリ亞。

……でもな、楽しそうに微笑みながら、  
残念つていつても説得力ないよな。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。

そのときは一人きりで――――――

『一夏つ――いつまでそんなところにいる――

早く降りてこい！！』

筈の怒鳴り声が通信回路から聞こえてきた。  
ハイパー・センサーを使って下を見てみると、  
山田先生がインカムを筈に取られてあたふたしていた。

『織斑、オルゴット、黒月、急下降と完全停止をやつて見せん。

目標は地表から10センチだ』

10センチか。楽勝だな。

「了解です。……なら先に行かせてもらひや？

答えは聞いてないけど」

そう言つて俺は二人を差し置いて、  
かなりの勢いで急降下をする。

……自分でやつてなんだけど、かなり早すぎや。

…………『…………だ――！

そう思い、完全停止をする。

結果…………

「黒月、0・5センチだ」

『おお――――――』

すげえ、適当にやつたんだけど。

地表から0・5センチってかなりいいな。

俺の後、セシリアも急降下し危なげもなく完全停止をする。

「オルコット、1・1センチ」

「……ふう、まあまあですわね」

結果を千冬さんから聞いた後、  
こちりに歩いてきた。

「まあ、あなたには勝てないですけど」

「……ははは。まあ、俺は本当に感覚で動かしてるからな」

今の急降下と完全停止で言つと、  
じつ、『ヒコン』ときて、地面につきそうな時にブレーキをかける  
と。

……あれ、俺はわかつてははずなのに。

俺の説明聞いてると、わからなくなってきた。  
つてか、俺つて説明能力ねえな。

ズドオオオオオオオオオン！――！

「……はいつ！？」

考え方をしていて何も気付かなかつたんだが、  
目の前に大きな穴が空いていた。その中に白式を纏つた一夏。

……ああ、そうか。

セシリ亞が変わつたから無いと思つてたけど、これはあるんだな。  
さすが、期待を裏切らない男。一夏だ。

その後、一夏は一人でグラウンドの掃除などを押し付けられたとさ。

### 3話　HS訓練（後書き）

- ・ちなみに不幸な出来事とは、
  - ・財布、落とした。
  - ・事故にあいそつになり運転手に注意された。
  - ・足を怪我した。
- ……ホント、辛い。

## 4話 代表決定、記念パーティー

「おお、やつぱりからの景色は絶景かな」

俺は屋上から、HIS学園全体を見る。

……ホント、高いところって最高だよな。景色は綺麗で気持ちいいし。

そんな呑気なことを考えてたときのことだ。

『それがわからないって言つてーーおい、待つて、算…』

いきなり一夏の声が聞こえてきた。

見ればIS訓練施設から出でてくるところだった。

……おつ、算も一緒だな。

つーことは、どつかその辺りを見たら“あいつ”もいるのかな？  
周りを見渡してみるが、いなかつた。

……おっかしいな、絶対にいるはずなんだけど。

「まあ、いいや。後で会えるだろ」

手に持っていた缶ジュースをすべて飲み終え、屋上を後にする。

「というわけで、織斑くんクラス代表決定おめでとう…」

「おめでと～！」

「ぱん、ぱんぱーーーん。とクラッカーが乱射される。

その途中、わざとではないんだが、

『おめでとさん』

『いてつ、優哉。』

直接、クラッカーで顔を狙うのはやめてくれ……みたいなやり取りもあったが、気にしないで楽しむよ!とする。

「いやー、これでクラス対抗戦が盛り上がるね」

「ほんとほんと」

「あ、でも~、黒月君でも良かつたけどね」

「確かに、そうだよね。黒月君、しっかりしてるし」

悪い、それはお断りだ。

ってか、俺がここに転校してきたときには、決まってたしそっかりしてるって褒めてもらつのは、嬉しいんですけど。

ふと周りを見てみると、明らかにいつのクラスのやつだけじゃなかつた。

だつてさ、普通に30人越してるんだぜ?

さすがに、これは超鈍感な一夏でも気づくわな。

……ああ、でも一夏の鈍感つて恋愛関係だけか。

「一夏さん、人気者ですね」

「……いや、これは俺だけじゃなくて優哉も入つてると思ひついで」

俺も入つてんのか?いや、一夏だけだろ。

「まあ、そうね。……一夏に続いて、IOS使える男だから

ああ、確かにそうだな。

「はいはーい、2年生新聞部副部長の黛

薰子。まゆすみ かおり

今日は話題の新入生、織斑 一夏君と

話題の転校生、黒月 優哉君に特別インタビューしてもらいましたー！  
それを聞いた皆は、オーと声をあげる。

……ってか、インタビューって俺もなのかな？

「ではすばり織斑君ークラス代表になつた感想を、ビツボーー。」

「え、えーーと」

ボイスレコーダーを向けられ、戸惑つてゐ一夏。

「まあ、がんばります」

「えー。もつといいコメントちゅうだいよー。俺に触ぬとやねどするぜ、とか！」

確かに普通すぎるコメントだな。

……何か予想出来るんだけど、

俺にも来るよなこの質問。考えておけ！

「自分、不器用ですから」

まあ、不器用つちやあ不器用だな。女心に關してだけ。

「……じゃあまあ、適当に捏造しておくからいとして。

次は、黒月君もお願ひ

やつぱきたよ、俺にも。

でも、ノリの良いコメントのまつがいいよな。

……ならこれが良いかも。

自己紹介の時のコメントで

肉食男子的なレッテルを貼らひれてる気がするじ。

「くつ！？／＼／＼／＼」

俺は近くにいた女の子を抱きしめ、耳元で囁く。

「……俺に不用心に近づくと、喰い刃くすよ」と。

そういうと、周りの女の子達は『あやあああ』と叫ぶ。

抱きしめていた女の子は、顔を赤くして氣絶した。

……あらり、幸せそうな顔して氣絶しちゃったよ。

つてか俺の予想と違うんだけど。俺的には殴られたと思った。

「いいね。そのコメント、捏造なしでも良さそうだよ」

「ちょ……」

「セシリアちゃんもコメントちゅうだい

……そこは捏造してほしかったんだけどな。

「わたくし、こいつたものはあまり好きではありませんが、仕方  
ないですわね」

嘘だつ！！！

結構、近くで待機してただる。

「と思つたけど、長そつだしいいや。『真だけちゅうだい』

「あ、最後まで話を……」

「ここよ、適当に捏造しておくれ。もし、織斑君に惚れたからつ  
てことにじよう」

「なつ、な、ななつ……！？」

顔を真っ赤にするセシリア。

そんな反応してたら、一夏以外なら絶対に氣づくぜ。

#### 4話 代表決定、記念パーティー（後書き）

評価、よろしくお願ひします。

出来れば高評価でwww

最後に一つ、作者は  
オリジナル純愛小説も作っているので、  
そつちも見てくれると嬉しいです。

## 5話 代表決定、記念パーティー（前書き）

ストックしないで、後編も一気に投稿

## 5話 代表決定、記念パーティー

「……優哉、ここに好物のチョコレートケーキがあるけど」「うー？」

その言葉を聞いた俺は、

瞬時加速並みの速度で香菜のところへ走っていく。

この反応でわかると思うが、俺の大好物はデザートなのだ。  
……好物と髪型のせいで、どれだけ女みたいと言われたか。

「へえ、黒月君の好物って甘いものなんだ」

「そうなのよ。昔、店のケーキ全種類制覇とか普通にしたことあるもんね」

「黒月君にも意外と可愛い一面もあるんだね」

「……男が甘いもの好きで悪いかよ」

若干、ふてくされながら言い。

「……つーーー別にいいと思つよ」

「だよね、私もいいと思つし」

「ところで黒月君の好きなケーキって何?」

好きなケーキか。なんだろう?

「……やっぱりチョコレートケーキかな。生チョコだとなお良し」

「チョコレートケーキか~。確かに美味しいもんね」

「……なんだよな。

しかも生チョコになると味もかなり変わるし。

「……織斑君達、何してんだろう？」

ケーキをずっと食べていると、俺の周りにいる女の子が不意に呟つ。見てみると、一夏の周りにいたのクラスメイトのほとんどがいた。

……ああ、あれか。

セシリ亞との記念撮影で、女の子達が乱入してきたってやつね。

「……アンタらは参加しなくていいわけ？」

近くにずっといる女の子達に呟つ。

……せっかく一夏と一緒にいれるのに、なんでこっちにいるんだか。俺は一夏みたいにカツ「良くなんてないのに」。

「別に、織斑君に興味ないだけだし」

「まあ、そうよね。織斑君が駄目ってわけではないけど」「なるほどね。

やつぱり好きな人は、人によって変わるってことか。

「……さてと、そろそろ部屋に帰らつかな。

ケーキも食い終えたし」

あつ、ちなみに俺は部屋を一人で使っている。

……なんでも空いてる部屋がそこしかなかつたんだと。

「あつ、ちょっと待つて」

寮に帰ろうとしたら、後ろから新聞部副部長、黛さんに声をかけられ止まる。

「はいっ？なんですか」

「……帰る前に写真を撮らせてくれない？」

そこにいる神崎 香菜さんと一緒に

「俺は別に良いんですけど」

「なんで香菜と……？」

「私も良しよ。[写真]でしょ？」

「ええ、本当はインタビューのほうが良いけど。断るでしょ？」

「……良くわからましたね。」

「うしてやつ思つたんですか？」

「記者の勘つてやつかな」

つてか、記者でそんなに勘がいいのはアシタべらうだけだと想つ。

「……とにかく[写真]、撮るよ。

わあわあ、手を握つて並んで」

黛さんが俺の手を持ち、香菜の手を握らせて撮りやすい位置に行く。

……早つ……動きが読めなかつたよ。

「……そつこつて置きながら、  
何、勝手に握らせてんですか」

「じめんじめん。でも、うつむと済ますには  
これくらい無理矢理しないと駄目なんだよ」  
まあ、言つてることは合つてるけど。

……なんか納得いかないな。

そつ思い、顔をしかめていると……。

「……私じゃ駄目なの？」

「くつ？」

香菜の声がしたので、香菜のほうを見ると、

軽く涙田で上田遣いをしていた。

「……あつ、えつと。それは、その／＼／＼／＼

やばつ、可愛すぎる。

「ねえ、どうなの？」

「もひ、やめてくれ————！」

俺の理性が崩壊寸前なんだよ。

「フフフ……何、その反応。

あ～～、おもしろい」

願いが通じたのか、香菜は手を話してくれた。

……その代わり、笑いをこらえているけど。

つてか、人をからかうんじゃねえ。

「じゃ、写真も撮れたと思つから帰るね」

そういうつて香菜はさつさと食堂を出していく。

「……先輩？ 何時、写真を撮つたんですか」

「つじわつか。黒月君つてばいきなりのことには弱いんだね

……やっぱー。あんな写真を流されたら、

こいつの対処が大変なことになる。色々な意味で。

「…………返せや。ひらああああ！」

それから写真の奪い合いに発展したのは  
言わなくても予想できるだらう。

## 5話 代表決定、記念パーティー（後書き）

いかがでしたでしょうか？

オリジナルもほどよくいれて、  
作者的にはばっちりだと思つてます。

以上、作者からでした。

## 6話 試合の約束（前書き）

おはいんばんちわ。

一昨日、友だちとカラオケ行つて  
声が枯れてしまつた加那<sup>かな</sup>翔<sup>しょう</sup>です。

いやあ、高い声とか出しそぎましたね。ははっ。  
まあ、それは置いておいて本編へどうぞ

## 6話 試合の約束

「織斑君、黒月君、おはよー」

「おひ、おはよー」

朝、「夏と一緒に教室に入り、

席につくとさつそく声をかけられた。

「ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

……おい、お前が言つ今の時期に

転校してきたやつがお前の隣にいるんだけど。

「そう、中国の代表候補生なんだつてさ」

「ふーん」

まつ、十中八九、鈴……【鳳 鈴音】だらうな。

……それにしても代表候補生ねえ。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしり？」  
いつの前にか俺の隣にイギリス代表候補生。セシリ亞・オルコット  
が立っていた。

で、相変わらず腰に手を当てるポーズをしているな。

「Jのクラスに転入していく訳でもないのだろう?  
なら、騒ぐほどのことでもあるまい」

自分の席に鞄を置きに行つた筈が一夏の側にいた。

……やつぱ第も女子つてことだな。噂は気になるみたいだし。

「どんなやつなんだろうな？」

「お前より弱かつたらいいよな」

「冗談を笑いながら言いつ。

……まつ、絶対ないと思ひけど。

「それはないでしょ。一応、代表候補生よ」  
……ですよねー。

いつの間にか話に混ざってきた香菜に正論を言われる。  
でも、戦い方次第ではいけんじゃね?  
鈴の【甲龍】には接近戦の武器が……あつたな。

……悪い。やっぱりお前に勝ち目はない。

操作技術が高ければいけるかも知れないけど。

一夏がどうしてもって言つたら……俺が実践形式で特訓してやるか  
「一応つて、どうこうことですの! ? 香菜さん  
「だつて私はその代表候補生に勝つたんだし  
「うつ、それは……そうですけど  
へえ、香菜つてばセシリアに勝つたんだ。

「……あれは、わたくしの体調が悪かつたから  
「そんなこと言つんだつたら私も言うけど、  
あのときは私のISに不具合があつたのよ。  
そのせいで今、調整に出してるし

ああ、今の会話すべて把握出来た。

まずクラス代表を決める試合で、一夏が負ける。

その後、セシリアと香菜が戦つた時、セシリアが負けたと。で、そのときの香菜のISは不具合があつたわけね。

ここからは補足だけ

俺に冬弥さんからきたE-Sのデータは香菜のだつたつてわけか。

「なら、今度決着をつけましょつか。

セシリ亞と私、どっちが強いか」

「いいですわよ。今度こそ私が勝ちますから」

……あれ、なんか会話が脱線してるような気がするんだが。

「ふふん、勝てるもんなら勝つてみなさい。

まつ、セシリ亞の前に戦いたい人がいるけどね

へえ、香菜の戦いたい相手ね。誰だろう?

「あら、それは誰ですか?」

「……優哉、あなたよ」

そういうって俺を指さす香菜。……はあ、やっぱり俺なのか。

「別に良いけど、一夏じゃなくていいのか?」

「いいわよ。一夏君、弱いもん」

「うぐひ

香菜の言葉に沈む一夏。……哀れ、一夏。

そして香菜さん少し毒舌すぎやありませんか?

「……まあ、別にいいぜ」

「なら、明日に試合しない。」

今日の夕方に調整が終了するから

「……まつ、俺はいつでもいいぜ。」

勝つ自信はかなりあるからわ」

俺に護衛を頼むつてことは、ある程度は弱いつことだろ。つて考えると楽勝だな。

「へえ、なら賭けをしない」

「賭け?」

「……負けたほうが勝つたほうがいいことを一つ聞いて」と

いいね、そういうの。

「いいが。やってやるひじゅねえか

「……そう、言つたわね」

「おつ、男に一言はねえよ

その瞬間、香菜が若干黒い笑みをしたことに俺は気づいていなかつ  
た。

## 7話 凤 鈴音(ファン・リンイン)

「来月にはクラス対抗戦があるけど、  
一夏君、大丈夫なの？」

俺との勝負をすることが決まった香菜は、  
まだ凹んでいるままの一夏に言う。

「まあ、大丈夫だよね。だって専用機持ちは  
1組と4組だけなんだよ？優勝、間違いなしだよ

「……なら大丈夫なのかな」

クラスの誰かの言葉を聞いて、

少し安心した様子の一夏であつた。

……そろそろかな。

「――その情報、古いよ」

突然、教室の入口から声が聞こえる。

「2組も専用機持ちがクラス代表になつたの。  
そう簡単には優勝できないから」

見てみると、腕を組みドアにもたれていた女の子がいた。  
まあ、ぶっちゃけ……

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。  
ファン・リンイン

今日は戦線布告に来たつてわけ」

一夏の方を見て、ふと笑みを見せた鈴。

「何、格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

……アホか、お前は。

余計なことを言つたよな、面倒なことになるだろ。

「んなつ…………!? 何でこいつがいのよ、アンタは…。」

ほら、やつぱり面倒なことよ。

……あつ…!

「おい」

「なによ…?」

あらら、やつちやつた。

バシンツ!

鬼教官……もとい織斑先生の鋭い一撃。

……先生にタメ口で言つたんだから、叩かれても仕方ないよな。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「う、千冬さん…」

「織斑先生と呼べ。わざと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません…」

うわあ、織斑先生に鈴もタジタジだね。

……確かに昔から鈴は織斑先生のことが苦手だったんだつけ。  
なぜかは知らないけど。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

そんな捨て台詞みたいな言葉を言つて教室に戻る鈴。

「…………つていうかあいつ、IS操縦者だつたのか…。初めて知つた

……」

「一夏、それは…」

ああ、言つちやつた。どうなつても知らねえぜ。

まあ、被害を受けるのは周りの女子だと思つけど……。

「…………一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？ あの子とはどうこう関係で……」

バシンツ、バシンツ、バシンツ、バシンツ！

「席に着け馬鹿ども」

あらり、織斑先生……もとい鬼教官の出席簿を喰らつた女子が多数。

……本当に可哀想に。

バシンツ

「いてつ！！

織斑先生、なんで俺まで

「なんとなくだ」

……ですか。

なんとなくで叩くつて本当にあなたは鬼教官ですね。

そう思った瞬間、頭にもう一発衝撃がきたのは余談である。

授業中、第とセシリ亞が出席簿を喰らつていた。

第は、鈴と一夏のことを考えていて、

授業を受けるのを途中から放棄してた。

……「めんなさい。

寒かったし、これはネタにしてはいけないことだったね。  
で、セシリ亞は一夏と鈴のことを……以下省略。

「おいおい、一夏。そんなもんか……？」

「そんなだつたら凰ファンに勝てねえぜ」

俺は今、第2アリーナで一夏と試合をしている。

と言つてもかなり一方的ワンサイドな試合だけだね。

「……あ、はあ。これはお前が強すぎるだけだろ」

「そうか？普通だろ。

つてか、これくらい強くないと誰も守れないぜ」

そう言つた瞬間、一夏の表情が変わった。

……そつか、こいつは仲間を守るために力が欲しいんだったな。

「……誰も守れない」

「お前は守りたいんだろ？みんなを」

「ああ」

「なら、頑張つて強くなんないとな。

そのためなら俺はお前に全力で協力するぜ」

「……ああ、よろしく」

そつ言つといてなんだけど……。

「まつ、今回は疲れたからそろそろ終わるけどな」

「へつ？」

呆然としていた一夏に向かつて、

全力全壊のフルパワーでレーザー・ライフル……黒星くろぼしを撃つ。

「……優哉。あれはないだろ」

ISを待機状態に戻した俺の近くに来て文句を言つ一夏。

……でも、仕方ねえじやん。

「悪い、先客がきたみたいでな」

そついつて俺はアリーナの入口を見る。

……そこにはISスースを身にまとつた香菜がいた。

「ああ、もうそんな時間か。

ありがとな、修行に手伝つてくれて」

「気<sup>イレギュラー</sup>にすんな。……お前には強くなつてもらわないとな

……俺がいるから、何が起こるかわからないしな。

原作通りにはいかないと思つし。何かしらがあるはずなんだよ。

そんなときのために一夏には強くなつてもらつておかないと。

「……さてと、始めますか

「そうだね。さつそく始めよっか」

(翔るぞ、黒影)

そう心の中で呟き、黒影を起動させる。

そして起動し終わった後、

香菜を見てみると既に起動し終わつたみたいだつた。早いな。

『——戦闘待機状態のISを確認。操縦者 神崎香菜。

ISネーム【不死鳥】フェニックス。戦闘タイプ中距離射撃型、特殊装備あり』

……『……』といつても俺が手をつけたせいで、

近距離にある程度、特化してると考えて良いだろうな。

ホント、なんでこんなにチートなISを作っちゃったんだろうな。

調整しただけだけど。

「本当に賭け試合でいいんだな？」

「うん、いいよ。

まあ、私が負けることはないしね」

勝利宣言されて若干、ムカついてきた。

……ふざけんなよ、何が負けることないだ。絶対に勝つてやる。

「……油断してると」

(「うなつたら、一瞬で決めてやる）

イグニッション・ブースト  
瞬時加速を何回も使って、香菜の後ろに回り込む。

「怪我すんぜ！――

そして一閃するが、

「甘い甘い、そんなんだつたら……」

簡単に避けられる。

……まあ、それを狙つたんだけどな。

「避けられるんだろ？」

そんなのわかつてゐよ――

「しまつた！？」

俺は右側に避けた不死鳥の真後ろに移動し、

そのまま切りかかる。……良し、確實に当たつたな。当たた感触があつたし。

俺の攻撃を喰らつた不死鳥。……香菜はよろめきながら体制を変える。

「……やつぱり一夏より強いね」

そりやそうだろ？ 俺は若干、チート的な存在だし。  
心の中でそんなことを思いながらも警戒は解かない。

……一瞬でも気を抜いたら負けだからな。

「でも、私のほうが強いね」

「つー？」

いきなり真後ろから声が聞こえ、急いで回避するが間に合わなかつた。

「うう……」

やばい、黒影からすると超痛い。

一撃でほとんどのシールドエネルギーがなくなつたしよ。

うつそ、不死鳥の攻撃、どんなに重いんだよ。

……次、喰らうとマズイな。

「ねえ、本気でやつてよ。

あなたの力はそんなものじゃないでしょ？」

「当たり前だつての。

お前がそういうなら手加減無しで行くぞ

「ええ」

もうアレを使うしかねえよな。

黒影の单一仕様能力。【電光石火】を。

「……行くぞ、黒影」

呴いた瞬間、目の前にモニターが出現し、『電光石火、使用可能』と表示される。

それと同時に俺の体を纏うように金色のエネルギーが出現する。

「へえ、なるほどね。……なんか、白式みたいね」

「……全然、違うぜ。」

まことにこのワンオフ・アビリティには、デメリットが無いんだよ。

それに対して【零落白夜】にはデメリットがあるだろ?「

シールドエネルギーを攻撃に使うつていうデメリットが……。

まあ、当たればバリアを無効化して攻撃できるからメリットもあるけどね。

「まつ、そのほかに根本的な違いがあるけどな」

「根本的な違い……?」

色とか性能とか、そんな問題じゃなくてもっと根本的な違いが。

「……黒影は“欠陥機”じゃない」

「つー? な、なんでそれを……」

俺の言葉を聞いてから、動搖する香菜。

……本当なら狙うべきだけど、今はそんな気分じゃないしな。  
しかもめんどくさくなつたし、もういいや。

「香菜」

「つ、何?」

「もう、終わるうぜ。」

お互い、一人で考えたいことぐらいあるだろ?」

地表から100mぐらいで降りてから、HSを解除しプライベート・チャンネルで言ひ。

……意外にも香菜が強かつたから疲れた。

「…………わかった。じゃあ終わろう」

俺がIRSを解除するのを見てから、香菜もIRSを解除する。

…………そして香菜はアリーナを出ていく。

「あいつは何を考え込んでいたんだ？」

勝負の途中、何故か知らないけど

俺はあいつが何かを考え込んでいたのに気づいた。

だから勝負をやめたわけだけど、なんかスッキリしないな。

「一夏ーーっ！－！もう一回、俺と全力で勝負しin」

『ああ、いいぜ。

俺もお前らの勝負を見て、もう一回戦いたくなつたからな  
プライベート・チャンネルで一夏に話しかける。

…………多少のイライラを一夏にぶつけることにしてよ。

「…………」

さつき戦った時、浮かび上がった疑問。

「何故、このとき一夏しか知らないはずの事実を優哉は知ってるの？」

一夏が教えた？……違う、そんな感じはしなかつた。

「もしかして、優哉は私と同じ転生者？」

つてことは、

「まさか、ね」

神様が言った言葉を思い出しながら呟く。

『君のほかの転生者は、君の知ってるひとだから』

## 9話 クラス対抗戦

——クラス対抗戦リーグマッチ当日——

クラス対抗戦の試合場所の第二アリーナに行くと、もちろん言つまでもないと思うが満席になっていた。

そして会場に入ることが出来なかつた生徒や関係者は、別室や廊下に付けられてゐるリアルタイムモニターで鑑賞するほどだ。

……いやあ、これは本当にすごいな。

各国の大統領辺りの偉い人達まで来てるんだから。

つていうか、ぶつちやけここまで注目する気持ちがわからないんだが。

「……まあ、俺はここで見るけどな

会場に入つて壁際にもたれる俺。

ここなら何かあつたとき、対処できるし。

一夏達がやばかつたら俺が倒してもいいしな。“アレ”を。

「それまでは普通に一夏の戦いを見ますか」

一人で喰いていたら、まず【甲龍】を開いた鈴がピットからフィールドに出現し、

それから少し遅れて【白式】びゃくしきを開いた一夏が出てくる。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

「…………」

空中で一夏と鈴が5メートルほどの距離を取り向かい合つた。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけのレベルを下げるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

ISの機能を開拓しているため、

一夏と鈴のオープン・チャンネルでの会話が聞こえてくる。

……確かに雀の涙くらいだけど、

今のお前からするともうひとつといったほうが良いこと思つけどな。俺なら貰わないけど。

「一応言つておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。

“シールドエネルギーを突破する攻撃力”があれば、本体にダメージを貫通させられる

まあ、これは本当の話だね。

噂では、その直接ダメージを『える“ただけ”の武装も存在するらしい。

……使つたら違反だけどね。

簡単に言つと、つまりは……

『殺さない程度にいたぶることは可能である』

と言つことだ。しかも鈴など代表候補生レベルなら造作もないことだ。

『それでは両者、試合を開始してください』  
ビーツと鳴り響くブザー、それが切れた瞬間、二人は動き出した。

ガギインツー！

瞬時に展開した白式唯一の武装『雪片式型』が物理的衝撃波に弾かれる。

まあ、普通に考えて鈴の衝撃砲だらうな。  
そして一夏は三次元躍動旋回を使い、鈴を正面に捕らえることに成功する。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

鈴が手にしている双天牙月（こうてんがちやく）という両端に刃の付いた、  
というより刃に持ち手が付いているという表現の方が正しいような  
それを、

鈴はバトンのように回し縦、横、斜めと角度を変えながら一夏に斬り込む。

「甘いっ……」

一夏が隙を突いて距離を取つとした瞬間、肩アーマーがスライドして開き、

中心の球体が光った瞬間に一夏は吹き飛ばされていた。

「今のはジャブだからね」

にやりと不適な笑みを浮かべた鈴の肩アーマーの球体がまた光る。

そして……

ドンッ!!

「ぐあつ！」

一夏は吹き飛ばされ地面に叩きつけられた。

さすがたな あの衝撃は

いのが特徴なのに」

ああ、前砲だ。しかし、この前砲は、何う事か。

つて、普通は見えない砲弾が見えるつてどんだけチートなんだ

よ  
俺

一  
銓

「本筋で」

卷之三

くつ、格の違いつてのを見せてあげるわよ

鈴は双天牙月を一回転させて構えなおし、  
一夏は加速体制に入つた『瞬時加速』を使うつもりだろうな。

『所属不明機の反応がアリーナ上空に出現』

不意に黒影から警告が出る。……来たか。

ズドオオオオオンツ ! ! !

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

その音源からはもくもくと煙が上がっている。

今**の衝撃は『所属不明機』**がアリーナの遮断シールドを貫通して入つてきた衝撃だった。

……その衝撃を受けた瞬間、観客席のシャッターが締まる。やばつ、飛び降りたりしておけば良かった。これじゃあ一夏達を助けにいけないじゃねえか。

「くそ、遠回りになるけど、一回観客席から出るか」

独り言のように呟いてから、観客席から急いで出る。

俺がこんなに急いでる理由は、一つ。

もしかしたら原作と違う展開があるかも知れないからだ。

……俺がたどり着くまで死ぬなよ、一夏。

## 9話 クラス対抗戦（後書き）

一応、次の更新予定日は7月31日を  
予定してますので、お楽しみに（^ ^）／

## ～オフィロイン設定～（前書き）

主人公設定の後書きに少しだけ書いていた、  
【神崎香菜】ちゃんの設定を  
まとめましたのでご覧ください。

ちなみに本編の続きは、  
予告してた通り、31日に更新します。

## ～オフィロイン設定～

神崎香菜  
かんざきかな

性別 女

容姿 黒髪セミロング。七三分けにしてヘアピンで止めている。体つきは良いとは言えない。良くいってスレンダー。

悪くいうと貧弱…………。

性格 優哉とは正反対で、家事全般がダメダメなズボラ。

補足 神様に送られた転生者。

原作情報は6巻ぐらいまで知ってる設定。

専用ISは【不死鳥】

【不死鳥】  
フエニッシュクス

神崎香奈が作った第3世代型IS。

待機状態は

外見は【不死鳥】の名の通り、ほとんど真っ赤に染まっている。装甲の数は多くもなく少なくもなく標準的。

そして背中に翼みたいなものが、2枚ずつ対になっている。

背中の翼は少し橙だいだいがかってる。

### 特徴

黒月 優哉が手をつけるまでは遠距離特化型だったのだが、手をつけてからは近距離もいけるようになった。つまりは万能型。

### 使用武器

#### ・紅くれない

な刀剣。  
・緋龍ひりゅう

ロングレンジのビームライフル。

外見は、『G E B』<sup>ゴッドイーター・バースト</sup>のステラスウォームを赤くした感じ。

#### ・流星群りゅうせいくん

実弾式のマシンガン。

色は赤で、黒のラインが入ってる。

### 单一使用能力

……後ほど公開。予定では原作3巻辺りかな。

## ～オコヒロイン設定～（後書き）

はい、とこ「う」とで香菜さんの設定は以上になります。

「う」は「う」でしたほうがいいよ？」

「……これ、別の小説であつたよ」  
などありましたら書いてください。  
無理矢理、設定を変えます。

最後に、記念企画につきましては、  
作者の活動報告をご覧ください。  
……大半の方は理由がわかると思いますけどね。

1-0話 ＶＳアンノウン Part? (前書き)

今のことから後2話くらいはストックしてるんだけど、  
連続で投稿したほうがいいのかな?

誰か教えてくださいな( へへ )

## 10話 VSアンノウンPart?

香菜 side

いつものメンバー（一夏と優哉を除いた）は、ピットで一夏君と鈴ちゃんの試合を見ていた。

そして一夏君が瞬時加速イグニッショントーストを使おうとした時、

大きな衝撃がアリーナ全体に走る。……来たね。

「何、何が起きましたの！」

「い、一夏……」

それにセシリ亞は混乱し、筹は一夏君の身を心配する。

「今のビーム兵器？しかも遮断シールドを破るほど威力のアリーナに広がる爆炎フル・スキンが収まるべ

得体の知れない【全身装甲】のHSの姿が確認出来た。

「織斑君！鳳さん！」

今すぐアリーナから脱出してすぐHSに先生たちがHSで制圧に行きます！」

いきなりの襲撃者に、呆然としていた山田先生だったが、直ぐに切り替え、安全に終わらせる作戦をいつもより威厳のある声で言つ。

『——いや、先生達が来るまで俺たちで食い止めます。いいな、鈴君、誰に言つてんのよ。』

そ、それよりも離しなさいってばー動けないじゃない……』

『ああ、悪い』

「織斑君！？だ、ダメですよ……」

生徒さんにもしものことがあつたら———」

山田先生が必死で一夏達を止めようとすると、

「もしもし！？織斑君聞いていますーへ鳳さんも！聞いてますー！？」

一夏達は無視をする。……つてか、山田先生。

プライベート・チャンネルなんだから声に出す必要は無いんじや。

「本人たちがやると言つて居るのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！なにのんきなことを言つてるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからライライフするんだ」

「うん、まあいい案だけどね。

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

それを飲んだら、糖分じゃなくて塩分が取れると思つ。

「…………」

ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、織斑先生は白い粒子を容器に戻す。

「なぜ塩があるんだ」

「え、まあ……？ あつー やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？ だからそんなミスを」

「…………」

イヤな沈黙。山田先生は話を逸らそうと試みた。なんだか無駄な抵

抗な氣もするけど。

「あ、あのですね」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといい」

「悪魔だ！！」

「先生！ わたくしにHS使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」  
一夏君のピンチにいても経つてもいられなかつたのか、セシリアが  
大声で言ひ。

「そつしたいところだが、遮断シールドがレベル4に設定。扉がす  
べてロックされている」

「そ、それって あのHSの仕業ですかー？」

「そのようだ。しかし、三年の精銳がシステムクラッシュにを実行中  
だ。

遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる

『それよりもてつとりばやい作戦があるぜ』

不意に届いた男の声、それと同時にモニターにある少年が映し出さ  
れる。

「優哉……？」

「そう、何故かここにいなかつた優哉だった。

「……あなた、今、どこに」

とセシリアが問う。まあ、気になるよね。  
いつも一緒にいる人がいなかつたら。

『ん？ああ、観客席から全速力でアリーナ外壁に向かっていく』

『ひ

良く見れば後ろの景色がかなり早いスピードで、動いているのがわかる。

「……で、黒月。良い作戦とはなんだ？」

『良い作戦とは言つてないんだけどな。……まあ、いいや。織斑先生、俺にHSの使用許可をください。それで万事OKです』

「なに……」

いきなり言つてきた言葉は、HS使用許可だった。

『……実はですね。俺の黒影にはある細工やじくがしてあるんですよ』

「細工だと？」

『ええ、それこそ天災てんさい“篠ノ之しののたばね” 束つかと同等の、ね』

優哉の言葉に驚く一同。

……なんで優哉は束さんと同等の技術を持つているの？皆が驚いていた間、私はそんなことを思つていた。

I I I side out

優哉 side

『それは信じていいのか？』

目的地のアリーナ外壁についたと同時に、千冬さんからそんなことを聞かれる。

「はい、どこの天災よりはマトモですよ  
まあ、使うかどうかは知らないけどな。

……ってか俺的には、使いたくはない。

『…………わかった。ならEVA使用を許可しよう』

「ありがとうございます」

返事をするだけして、直ぐにオープン・チャンネルを切る。

「良し、ならこいつちよやんか」

——翔るぞ、黒影。

心の中でそう呟くと、

右耳から近いところから黒影が展開される。

「よし、感度良好。さっそくやりますか

アリーナの真上まで飛び、黒星を呼び出す。

「…………今回の俺は全力全壊でいくぜ」

ほとんどすべてのシールドエネルギーを黒星に集中させ、  
狙いを遮断シールドの中にいる『所属不明機』<sup>アンノウン</sup>に定める。

— side out

一夏 side

「くつ……！」

一撃当たれば確実に決められる間合い。

だけど、俺の斬撃はするりとかわされる。

……」これで合計四度田のチャンスを逃したことになる。

「一夏つ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよーー！」

「狙ってるつづーのーー！」

（参ったな……）

シールドエネルギー残量が残り60%をきっていた。バリアー無効化攻撃を出せるのは、よくて後1回だ。

「一夏つ、離脱！」

「お、おつっ！」

敵は攻撃を避けた後、いつも反撃に転じてくる。

だが、その方法が無茶苦茶だ。『テタラメに長い腕を振り回して接近していく。

しかも、その高速回転状態からビーム砲撃まで行われるから手に負えない。

……だけど、なんだらかこの違和感。何か重要なことを逃しているような気が。

「ああもうつ、めんぢうくさいわねコイツつー

敵の無茶苦茶な動きにムカついてきたのだろう、

鈴は衝撃砲を開け、砲撃を行う。

一が、しかし敵の腕はその見えない衝撃を叩き落とす。

ともあれ、俺は鈴の支援のおかげで敵の射程距離から抜け出すことに成功した。

「……鈴、あとエネルギーはどうぐらご残ってる？」

「 180 つてところね」

180か。……俺に比べたらまだマシとこえるなび、このままだとジリ貧だな。どうするか……。

『警笛、シールド外から高エネルギー反応あり……』

「 つー? 」

どうするべきか次の手を考えていたら、いきなり白式が警笛をしてく。

「 一夏つ! ! 」

「 わかつてる! ! .. .

俺たちが敵からできる限り離れる。

……爆風に巻き込まれる可能性が無いともいえないからだ。

ドオオオオー——ン! !

とこうう音と同時に、敵を中心として爆発する。

「 なに……今の

「 ……苦戦してるな、助けが必要か」

いきなりの展開に鈴が驚いた瞬間、聞いたことのある男の声が聞こえた。

(この声は、まさか……)

声がしたまづを見ると、見たことのある漆黒のエリがゆつぐつと降りてきた。

「 一夏、鳳」

それは黒影を展開させ、黒星を構えた状態の優哉だった。

「 優哉か! !

「 おう。一人とも、無事か? 」

「ああ、なんとかな」

そつこいつと優哉は安心したように、ほつ、つと一息つく。

「鳳、お前も無事か?」

「ええ、大丈夫だけど……。あんた、誰?」

鈴の問いに優哉は……。

「黒月優哉。『世界で2番目にE-Sを使えた男』ってところかな」

— side out

## 10話 VSアンノウン Part? (後書き)

次の更新予定日は、8月3日です。

## 1-1話 ＶＳマンノウンアート？（前書き）

次の更新予定日は、8月3日です。

後書きに書いてもよかつたのですが、  
こっちの方が良いかなと思ったので、  
今回からこっちに更新予定日を書きます。

## 11話 ＶＳアンノウンPart?

優哉 side

「黒月優哉……？」

「まつ、2番目つっても、一夏より俺のほうが強いがな」

「…………悔しいけど、その通りだから言こ返せねえ」

俺の言葉に凹みながら言つ一夏。

…………これから強くなれば大丈夫、だからそんなに気にすんな。  
そう言つてもよかつたが、

これ以上、無駄話は避けたいといひだからやめておべ。

「一夏、凰、お前ら、エネルギーはどうへりある?」

敵を警戒しながら2人に聞く。

「…………俺は60ぐらい」

「私は180つてとこね」

一夏が60で鈴が180か、原作通りつけやあ、原作通りだけど、  
できる限り安全策でいきたいな。

「一夏」

「なんだ」

「…………俺が時間を稼ぐ、その間に作戦を考えて俺に伝える。

お前が描く作戦通りに動いてやる」

と言いながら、黒星を直し月光を展開する。

……別に、俺が考へてもいいんだけど、

一夏が考へたほうがいいしな。経験は力なりつてな。

「ああ、大マジだ。頼むぞ」

そういうつて俺は月光を構えながら、敵I-Sに突っ込み一閃する。「つ！！」

が、バカなげえ腕を振り回して反撃してくる。

それを余裕をもつてよける。

「これならいけるかな」

今、いけるかなと言つたのはかなりの接近戦を仕掛けのことだ。

かなり賭けだけど、やつてみる価値はあるかな。

時間稼ぎもかなり出来るし、接近戦に持ち込めば一夏達に流れ弾もいかねえし。

「…………一か八か、やつてやる！！」

月光を深く強く握り直し、瞬時加速イグニシジョン・ブーストを使って敵近くまで移動する。

そして……

「おらひ、喰らうやがれ」

深く切りつけるが、何事もなかつたかのように

反撃してくるのに驚きながらも回避する。

「…………おーおい、反応ぐらいしやがれよ」

『優哉つ！！』

敵I-Sの反応に呆れていると、一夏からオープン・チャンネルで声をかけられる。

「どうだ？作戦が決まつたか」

言いながらも敵に攻撃するのはやめない。

『ああ、俺らの予想では敵は無人機だ』

そいつ

……だよな。つてか原作知らなかつてもそつ思つてたぜ。  
反応が呆れるほどなさすぎるし。

「無人機だつて？……ああ、なるほどね。

だから反応がなさすぎるのか」

『で、俺が考フルチャージえた作戦の内容は優哉が敵を翻弄する。  
その間に鈴が全力、俺のバリアー無効化攻撃で決めるつていう作戦  
だ』

まあ、妥当な作戦だな。

「了解。なら……」

さつとやひばり。と言おうとしたが、出来なかつた。  
なぜなり……

『一夏つ！－！』

アリーナに設置されているスピーカーから大音量で鶴の声が響いた  
からだ。

俺達はそれぞれISのハイパーセンサーで中継室の方を見た。見ればそこには鶴の姿があつた。

……しまつた。これを忘れてた－！

（くそつ、間に合えよ！－）

そう思いながら全力で、鶴のもとまでイグニッショングーストで  
向かう。

『男なら……男なら、それくらいの敵に勝てなくてなんとする－』  
息を切らしながらも、一夏に向けて喝を入れる。

『…………』

それを敵ISは無言で見ながら、あの長い腕を鶴に向けて構えてい  
た。

そして腕に着いている砲身にエネルギーを溜め始める。

「マズイ！！鈴、やれ！！」

「わ、わかったわよ！」

状況がマズイことに一夏は気づき、鈴に命令する。

……会話だけ聞きながらも、俺は全力で簞に向かおう。

何が起こるかわからないからな。

『ちよつ、ちよつと馬鹿！　何してんのよ！？　じゃなさいよ！』

『いいから撃て！！』

『ああもうつー。どうなつても知らないわよー。』

命令されるままに鈴は、一夏田がけて撃つだらうな。

『——おおおおつ！！』

この瞬間、俺は簞の傍までくることが出来る。

そして衝撃に耐える体制を取るが、無駄だらうな。

一夏の必殺の一撃は、敵EISが簞に向けて突き出していた右腕を切断した。

だが、その反撃で左拳をモロに受けた。

それと同時に光が観客席のほうで反射した。

それが気になつてハイパー・センサーを使って、観客席を見る。

俺の目には蒼い機体が写つた。

「……なるほどな」

それが誰なのかは聞かずともわかつた。

「『……狙いは（じうだ）？』」

『完璧ですわ！！』

蒼い機体からの通信と同時に複数のビームが無人機を撃ち抜く。  
そしてボンツー！！という爆発音とともに、無人機の行動が止まる。  
まあ、口調と機体からしてわかると思うが、

観客席からセシリアがブルー・ティアーズで狙撃したつていう」とだ。

『ギリギリのタイミングでしたわ』

『セシリアならやれると思っていたさ』

『そ、そうですの…。とつ当然ですわね！

なにせわたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですから…』

『ふう。何にしてもこれで終わ』

そこで一夏の言葉が途切れる。

……理由は、敵ISが残った左腕を一夏に向けてエネルギーをチャージし始めたからだ。

『しまつた！！』

『『一夏つ（さんつ）！』』

「……バーカ、油断すんなつつーーの」

俺は単一使用能力【電光石火】を使って

無人機の真後ろまで向かい、一度と動かなくなるぐらいまで深く一閃する。

「優哉……」

「……大丈夫か、一夏」

一夏の近くまで移動し、話す。

「ああ、だいじょうぶ——」

刹那、白式を解除した一夏が俺のほうへ倒れかける。

……それを俺は黒影を解除してから、受け止める。

「……お疲れさん、一夏」

その会話を最後に、『無人機事件』は終わった。

「ふうう、疲れた」

一夏を保健室に連れていった後、  
俺は自分の部屋でコーヒーを飲みながら休んでいる。  
ちなみに一夏が倒れた理由は、疲れだそうだ。  
……まあ、男が原作と違つて増えたとはいえ、たつた一人だからな。  
そつちでも疲れて今日の試合 + 無人機事件だからな、そりゃあ疲れ  
るだろ？。

ふと、扉のところに気配を感じた。

「……で、お前は何をしにきたんだ」「  
そう言うと扉から誰かが入ってきた。  
……見てみると護衛対象であつた女だった。  
ちなみに頼んできた人は、こいつの父親ね。  
「どうしたんだ？ 香菜」

「……あの方、突然だと思つんだけど。

なんで今日の試合、行動が早かつたの？」  
やばつ、やつぱりあの対応の速さは怪しかったか。  
「……そりやあ俺はお前の護衛してんだぜ？  
それくらい順応性を高めておかないと……」

「じゃあなんで一夏君のEVAが“欠陥機”ってことを知つてたの？」  
「つー？」

あつ、そういうこと言つちゃつたな。

……！  
……それはさすがに誤魔化せないかな。

「……もしかして優哉つて“私と同じ”転生者？」  
「は？」

私と同じ……つてどういふこと？

「違うかつたら、『なにいつてんの、いいつつ？』  
つて思うかも知れないけど、静かに聞いてね。  
私の前の名前は“上条惠理”つてこうのよ」  
……嘘だろ。

前世の名前が上条恵理つて、びっくりことだよ。

「……一つ質問に答えてくれ。

答えてくれたら俺もすべて話してやる」

「わかった」

この答えによつて、すべてがわかる。

……こいつが本当に上条恵理なのか、が。

「お前に兄がいたか？」

「……いたよ。

でも、通り魔に殺されそうになつた私を庇つて死んだよ

……マジかよ。ここまで完璧に答えられたら信じるしかねえじゃん。

「……そつか、教えてくれてありがとう。

そして約束は守らないとな。俺の前の名前は“上条優哉”

「嘘でしょ。だって、兄さんは……」

半泣き状態になりながら、話す惠理。

「……残念、あれこそが神様のミスなんだとさ。

だからここにいるのは、正真正銘、お前の兄の上条優よ……」  
最後まで言おうとしたのだが、急に恵理が抱きついてきたので言えなかつた。

「うう……『めん、私。

……兄さんが、いないと……生きていけなかつた」

「恵理……」

泣きじやくしながら話す恵理を、抱き止める。

「だから……私、死ぬんだ、って思つた瞬間……喜んだんだ」「バカだろ。お前……『俺が死んでも幸せに暮らせよ』って言つたのによ」

半泣きになりながら怒鳴る。

「『めん、でもやつと分かちあえたのに……一生、会えないなんて、考えられなかつたの』『でも、ありがとう。……こんなにも俺のことを思つてくれて』そういうつて深く強く、抱きしめる。

……今まで護衛対象だったし、幼馴染だから仕事ひとつ思つてたけど、

これからはそんなの関係無しで、絶対に守つてやる。

—— side out

もつ余えないと思つて、いた兄さんとの再開で、

10分間ぐらい泣き続けた後、私は兄さんの部屋で話していた。

その会話の途中に思つたことだったのだけど、

この世界では、兄さんと結婚してもいいんだよね。と思つていた。

……だつて、この世界では血は繋がつてないしね。

「うと決まれば、さつやく行動しないこと。

この世界では、工事を動かせる男の子つてだけで、絶対にモテるのは確かなんだから。

「……兄さん」

「どうしたんだ？ 恵理」

兄さんを呼ぶと、兄さんは前の私の名前を言つてくる。  
そう呼ばれると前の兄妹のときみたいで、なんか嫌なんだよね。

「……香菜」

「えつ？」

「香菜つて呼んでよ。

今私は“香菜”で、今の私達は兄妹じゃないんだから

「ああ、わかつた。だけど、お前も兄さんつて言つのはやめりよ」  
人差し指で私を指さしながら言つ兄さん……じゃなくて優哉。

「……わかつた。じゃ、これからは兄妹じゃなくて、

普通に幼馴染として扱つこと。オッケー？」

「了解」

優哉から心良い返事が貰えたので、さつやく自分の部屋に戻ることにする。

「じゃあね、優哉」

「……ああ、また明日な  
私はそいつてから優哉の部屋から出る。

## 11話 ＶＳアンノウン Part?（後書き）

加那 翔です。

今回は、ネタバラシ回でしたね。

……神崎香菜が実は優哉の前世の妹だった。  
まあ、これは初めから考えていた設定でした。

## 1-2話 遠い日の記憶（前書き）

最近、梅茶漬けがつまいと感じる加那

翔です。

いやあ、お茶漬け美味しいよね。

- ・次回の更新日は、8月5日です。

## 12話 遠い日の記憶

現在、6月の頭。曜日は日曜日。俺はある場所に来ていた。

……じつちの世界での俺の家族の墓だ。

何でも両親の知り合いが言うには、外国で事故にあつたらしい。

……それで当時、親戚に預けられていた俺だけが生き残ったと。

そして、その事故から何年か過ぎたころ、俺と親戚の人でその国に行き、

何年も探したが、見つからなかつた。

これが一夏達と離れてた7年間の真実だ。

で、帰つてきてすぐに冬弥さんに頼み込んで、お墓を作つてもうつたというわけだ。

まあ、そのかわりに香菜の護衛を頼まれたのだが。

「……ホント、なんで死んだんだよ。

つてか、俺が引き止めたらこんなことにならなかつたのかな

……関係ないか。どつちにしろ仕事関係もあつたしな。

そう、俺の両親は外国にE.Sを作りに行つたのだ。

なんでもうちの両親はかなりの技術があつたんだとさ。

で、適正がない男の俺だけ連れていかないとして、  
適正があると思われる美夏だけ連れしていくことにしたと。

「なあ、ドジじゃない神様……。

教えてくれよ。そんなに俺のことが嫌いか?」

頬を伝つて落ちてくる涙に気づかないで、首を横にふる。

……もう、考えるのはやめよう。

墓の前に美夏が好きだった百合の花を花瓶に入れて供える。

「……それじゃあな、また来るよ」  
涙を拭いながら言い、その場を去る。

「ねえ、聞いた？」  
「聞いた聞いた！」  
「え？ 何の話？」  
「だから、あの織斑君と黒月君の話よ」  
「いい話？ 悪い話？」  
「最上級にいい話」  
「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？ 絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？」

女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別のトーナメントで

食堂に着くとスクラムを組んでいる一団を見つけたが、  
関わってはいけないと直感で思い、見なかつたことにする。  
つてか、毎回思うけど、思春期女子で埋めつくされた食堂はひどいな。  
……前世ではこんなのがかつたけどな。

「はい、お待たせいたりません。チヨコレートパフェですよ」「ありがとうございます」

そんなことを思い出しながら、

食堂のおばちゃんから頼んだ品物を受け取る。

「でも、本当にこれだけでいいのかい？」

もう一人の男の子はかなり頼んでたけど

もう一人の男の子つていうのは、一夏のことだらうな。

「……ええ、いいんですよ。

今日は何故か、食欲がないんで」

「そうかい。でも、健康には気をつけなよ」

おばちゃんの言葉にはい、と返事をして一夏を探す。

さつき、おばちゃんが言つたからにほじると思つんだけど……ついて、  
いた。

……鈴と一緒になんだな。

「よし、一夏に鈴」

「優哉か。まあ、座れよ」

言いながら隣の席を指さす。

あつ、ちなみに鈴つて呼んでるのは、勝手に呼んでるわけじゃなく。

あの無人機の事件が終わつたあと、鈴本人が、  
私のことは鈴つて呼んで、つと言つたからだ。

「……サンキュー」

軽く返事をしてから座る。

そしてパフェを机に置いたとき、一人の表情が変わる。

「……アンタ、これだけでいいの？」

「んん？……まあな、今日はちょっと食欲がなくてな」  
やつぱ墓なんて行くんじゃなかつたな。

「……優哉、何かあつたのか？」

そんな俺の様子を見て、一夏がそんなことを言つてくる。  
……お前は鈍感じやなかつたのか。つてそれは恋愛感情に関してだけか。

「いや、別に大したことはなかつたぜ」と、微笑みながら言ひ。

「お前だけで解決しない問題だつたら、

協力してやるから、絶対に相談しろよ。いいな」

「……おひ。そうなつたら頼らせてもらひうな」

俺がそここうと一夏は納得したのか、よし、と言つて自分の夕食を食べる。

「……なあ、わつあからあそ」の会話の中に俺と優哉の名前が出てる気がするんだが」「トランプでもやつてんじやないの？それか占いとかや」「それにしてもいつもより騒がしくないか……」  
後、いつもより熱氣も増している気がするし。  
「え～！？ そ、それマジで…？」  
「マジで…」

「マジなのー? キャー、ビーバーがいるよー。」

つてか、本当にそんなに騒がれると、かなり気になるんだけど。

「...」  
「...」  
「...」  
「...」  
「...」

俺と一緒に夏が一緒に飯を食つてゐるところを見つけた、女の子達が一

卷之二

「ねえねえあの噂つてほんもがつ!?」

二十一

「こんな感じの話は忘れてるんだよね。」

「噂つて？」

一夏が噂について聞かせようとする。

皆一緒に笑い出したけど、逆に怪しいぞ。

附錄  
卷之二

卷之二

奄が採りつゝ

俺が探さうとしたら、女の子達が全力で言ってきた  
……なんかそんなの聞いてたら、いじめたくなつてくるじゃんか。

「ふーん、まあいいけど」

そういうと、女の子達は「はははは」と笑いながら、退散していく。まつ、噂ならいつかは聞くことになるだろう。

「じゃ、俺はこれで。また明日な、鈴、一夏」

それから食器を返して、俺も部屋に戻ることにした。

「え～っと。それではSHRを始めます。<sup>ショートホームルーム</sup>

その前に転校生を紹介します！ しかも一人です！」

翌日の朝、SHRの時間のときのことだ。

教室に来てすぐに山田先生が言った言葉に、教室ないの全員が驚く。そして女子達が騒ぎ出す前に扉が開き、転校生と思われる一人が教室に入ってきた。

「失礼します」

「……」

二人のうちの一人。

先に入ってきた人を見た瞬間、全員の動きが止まった。

その理由は……。

「え？」

「なつ！？」

「そんなん！？」

上から順に一夏、篠、セシリ亞だ。

ちなみに俺と香菜は知っていたため、驚きはない。

まあ、皆が驚く理由は……

転校生の一人が男子だからだろ? うな。

## 1-2話 遠い日の恋記憶（後書き）

つこに次回、あのキャラ達が出てきますよ。  
まあ、わかると思いますけど。

この小説、ヒロインである、

金髪美少年？と銀髪眼帯美少女が。

## 13話 転校生は金髪美少年！？（前書き）

やばい、タイトルの付け方がハンパなく雑だ  
つてか、これにするぐらいなら普通に  
『ボーイ・ミーツ・ボーイ』で良かったかも。

o r z

# 13話 転校生は金髪美少年！？

「フランスから来たシャルル・デュノアです。この国では不慣れが  
ことが多い、

「お送りをお掛けするかも知れませんが、喜んでお受け下さい」

転入生の片方 金髪の美男子 シルバー 云々 行ははこやかは笑  
いながら一礼する。

嘆息とともに、彼の心はすこぶる重く、嘆然としている。何時も通りなのは事情を知っている俺と、葵くら

よね。

「お、男……？」

「よい。二ちうこ業と以た竟遇の人が2人いると聞ひて本国から」  
クラスの誰かがそう呴いた。

一一

「……じゃなくて美女つていつ  
たほうがいいかな？」

「那樣……」

「はい？」

あ、このパターンは……。

女子たちの黄色い歓声が教室を覆う。

「……どうか、少しば声を抑えてくれ。……耳を抑えていても耳が痛い。  
……あつ、一夏と篠が机に突つ伏した。

「男子！3人目の男子！」

「しかもこのクラス！」

「2人と違つて守つてあげたくなる！」

「……ああ、やつぱり俺と一夏は守つてあげたくなる男じやないんだ  
な。

まあ、俺は守りたい派だから別にいいけど。

「あー、騒ぐな。まだ自己紹介は終わっていないだろ？」「  
心底面倒そうに千冬さんがぼやく。

山田先生ではなく千冬さんからのお詫葉なので、皆はぴたりと騒ぐ  
のを止める。

そして、もう一人の転入生、女子を見た。

「…………」

左眼に黒の眼帯を付けた、銀髪の美少女は腕を組んだまま黙つてい  
る。

さつきまで下へんなさうに女子を見ていた視線は今や千冬さんに向  
いていた。

「……ボーテヴィイッヒ、あこせつをしろ」

それを見てか、千冬さんが囁く。

「はつ、教官」

いきなり居住まいを正して千冬さんに敬礼する銀髪の女。

敬礼をされた千冬さんはまた面倒そうな表情でため息を吐く。

「ここで教官は止めや。ここでは私は教師、そしてお前は生徒だ」「了解しました。

ラウラ・ボーデヴィッヒだ

それだけ言つて、後はさつきと同じようつに終始無言だ。

「あ、あの～、それだけですか？」

「これ以外に言うべきことなど無い」

ラウラの冷淡な即答に山田先生は涙目。

即刻、教室を抜け出したいぐらこいたくない空氣の中、不意に一夏とラウラの視線が交差する。

……「れは、止めたほうがいいか。

「つー……貴様が

「？」

そして一夏の方へ歩いていき、手を振り上げる。

パシッ！

「……やめといたまうがいいぜ。ラウラ・ボーデヴィッヒ。

お前の敬愛する、織斑千冬教官に嫌われたくないだろ？」

一夏を叩こうとした腕を掴み、殺氣を出しながらラウラに言つ。ハリ

そしておまけにエスでいつでも攻撃できるように待機をさせておく。  
……これにより、ずっとラウラのエスは警笛をだしてゐるはずだ。

「つー……チツ

舌打ちすると勢い良く腕を振り、俺の腕を振りほどく。

その瞬間に戦闘態勢にしていたのを解除する。

そして俺に向けていた視線を一夏に戻して。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そういう残して、一夏の前から立ち去るリウカ。

空いている席に座ると腕を組み目を閉じる。

「あー……これでHRを終了する！各人、急いで着替えて第一グラウンドに集合！」

今日は2組との合同INS模擬戦闘だ、遅れるなよ！」

この号令により凍り付いてた空気が崩れ、はつ、として皆動き始める。

「黒月、織斑。お前等が『テュノアの面倒を見てやれ』

「あ、はい……」

「了解です」

まだ、こいつは切り替えてないのかよ。

そう思い、俺は一夏の頭を叩いてから、シャルルのところに向かう。

「君が黒月君と織斑君？初めまして、僕は——」

「あーー、それは後、後。一夏」

「おう」

挨拶をしようとするシャルルを俺が引っ張り、その後に一夏がついてくる。

「教室では女子が着替えることになつてゐるから、

俺たち男はさつさとアリーナの更衣室に向かわないといけないんだ。これから世話になるんだから、早めになれるよ

「うん……」

と言つたが、シャルルは落ち着きが無い。

視線はちらちらと自分の手を握った俺の手を見ている。

……あつ、そうだった。

見た目が美形だったから忘れかけるけど、こいつは女なんだつたな。ああ、でもここで離すと逆に怪しまれるし、このまま行くしかないか。

「ああつ！ 転入生発見！」

「しかも黒月君達と一緒に！」

教室から5分ぐらい歩いた時、女子達が群がっていた場所に来てしまった。

……マズイ。HRが終わってしまったので、他のクラスの女子が来たのだ。

しかも今回は、シャルルの噂を聞いてるはずだから、かなり多いはずだ。

「一夏つ！…」

「おう！」

俺が呼んだと同時に、一夏は女子達のほうに走り出す。

「え！？ いきなりな……」

一夏のいきなりの行動に驚くシャルルだが、

俺はそんなの関係ない！！ってな感じで一番近くの窓を開ける。

……後は、別にアレをしたらいいと思つんだけど、シャルルに悲鳴をあげられたら困るな。

「……シャルル。ちょっとじめん

「えつ、なに……ふぐつ！－！」

シャルルに一言、謝つてから口に手をあてる。

後、もう一言、言つておないと。

「シャルル、出来るだけ目をつむつめておけ  
？」

俺の言つたことに惑いを覚えながら、言つたことを実行する。

……これで準備OK。行きますか！！

勢い良く窓際に立ち

「……I can fly！！」

そういうつて窓から、俺はシャルルをお姫様抱っこしながら飛ぶ。  
そして地面に当たる瞬間、一瞬だけISを起動させる。  
……勿論、足の部分だけだ。

「はい、着地成功」

「……はあ、何をするかぐらいいつてよ。びっくりした  
黒影を解除してから、抱っこしてるシャルルを降ろす。

「ああ、悪い悪い」

「おい、そつちは大丈夫だつたか」

そんなことをしていたら、一夏が来た。

「おう、バツチリだぜ。

……マジで急ごうか。後、20分で授業始まんぞ

俺がそういうと一人も走り出す。

「つと、俺は織斑一夏。一夏つて呼んでくれ  
で、俺が黒月優哉。優哉でいいぜ」

「よろしく2人とも、僕もシャルルでいいよ

「まあ、俺はもうそう呼んでたけどな」

走ってる最中に軽く自己紹介をしていた。

そんな感じに自己紹介をしていたから、時間には間にあつた予定だつたんだけど。

「遅い！」

バシンシッ！バシンシッ！

……結果はこれだよ。

「ぐだらん」ことを考へていて暇があつたらとつとと列に並べ…」「いや、ぐだらないことは考へてないけど、と心の中で愚痴りながら並ぶ。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

と俺と一夏に話しかけたのはセシリ亞だつた。

「スースを着るだけでどうしてこんなに時間が掛かるのかしり？」

そりや……男子ですからね。

と言ひのでは、わからない人がいるかも知れないので説明します。

IISスースは、当前だが女性物が普通なので、見た目はワンピース水着やレオタードに近く、部分的に動きやすいようにと肌が露出している。

だが男が着るIISスースは違う。

具体的に言えばスキュー・バダイビングの水着みたいで露出しているのは頭、手、足だけ。

そのせいで女子より着替えるのが遅くなるのは必然だ。

……まあ、俺はヘソ辺りも露出してるけどな。これは黒影の装甲的

な問題だからです。

「道が混んでいたんだよ」

「嘘おつしゃい。いつも間に合ひつくせに」

なんかセシリアの一夏に対する言葉に棘があるな……ああ、なるほどね。

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方と縁が多いようですから?」

そうでないと2月続けて女性からはたかれたりしませんよね

「なに? アンタまたなんかやつたの?」

さらに何故か、一夏の後ろから話しかけたのは鈴まで話に入ってくれる。

そして話を続けるが……俺は無視する。

――何故なら

「安心しろ。バカは私の目の前に一人も居る」

今は千冬さんの授業だからな。

バシーン!

青空に出席簿アタックの音がいつもより響く。

ああ、空が青いな~。

### 13話 転校生は金髪美少年！？（後書き）

「……で、一つ気になつたんですけど、『シャルル・テュノア』って言ひたくあつません？」  
舌足らずの僕が言つてみると、色んなところで囁んでしまうんですね。  
「……まあ、それだけですけど。

## 14話 教師の実力（前書き）

自分で前話を読んでみて思ったことなのですが、長すぎると読みにくいと思ったので、2話に分割しました。

なので、この話は前話の途中からですでの、見たことのある方は戻ることをオススメします。

## 14話 教師の実力

「では、本日から格闘および射撃を含む実戦訓練を開始する」

「「はーーー」」

1、2組合団どころ」ともあるが、担当が千冬さんといふこともあって、みんないつも以上に気合が入っている。

「くうつ……なにかとこうとすぐにポンポンと人の頭を……」

「一夏のせい、一夏のせい、一夏のせい……」

ちなみにさつき頭を叩かれた2人は、頭を抑えながら涙目でブツブツ言っている。

……まあ、千冬さんの前で無駄話をしたからだ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。

ちょうど活力が溢れんばかりの10代女子も居ることだしな。

凰一オルゴットー！」

「な、なぜわたくしまで！？」

セシリ亞からすると残念だな。完全に、じばつちりだけど。千冬さんの言つことに逆らつたらどうなるか知らねえぞ。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る

「めんどいなあ、なんで私が」

「こいつのは見世物のようで氣に入りませんわね」

ぼやきながら、前に歩いていく2人。

たしか山田先生と戦うんだよな。ってか、ぼやくぐうなら俺と代わってくれ。

……試験でも戦つてないから、戦いたいんだよ。

「 千冬さんが、やる気のない2人に何か話している。

すると2人は……

「 やはりここは、イギリス代表候補生、わたくしの出番ですわねー…  
「 私の実力を見せるいい機会よね！専用気持ちの『いきなりやる気』になる。……さすがですね千冬さん。  
授業のためなら自分の弟も使うと。

「 それで、相手はどうだ？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「 ふふん。それはこっちのセリフ。あんたを倒して実力を示してやるわ」

「 慌てるなバカども。対戦相手は

『キイイン……』

あれつ、この音ってなんだつたつけ？  
えつと、確か……

「 あああーっ…ど、どいでくださいーーー！」

遙か上空から聞こえるある人の声で、思い出す。

あつ、そうだ。……山田先生が落ちてくるんだよな。

……助けるべきだよな。黒影！！

一瞬でEISを展開し、瞬時加速で近くまで行く。

そしてキャッチする。……つもりだったのだが、

「 ……なつ、しまった」

うまくキャッチしきれず、ただ少し速度が落ちただけで

そのまま山田先生は落ちていく。……一夏の方向に。

あつ、やつちつた。

ドガ　ン！！！

山田先生の突進を受け、一夏は数メートルぐらい吹っ飛ばされた。

「おーい、一夏。大丈夫か」

そんな一夏にオープン・チャンネルで話しかける。

「おう、大丈夫だ。白式の展開がギリギリ間に合つたからな。しかし一体何事——う？」

その瞬間、一気に静かになる。

……あつ、やつちやつたな。

俺は地面スレスレの位置まで降りてきて、黒影を戻す。

「あ、あのう、織村くん……ひやんつ！」

おそるおそる一夏は手の先に視線をやる。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。

いえ！場所だけじゃなくてですね！私

と織村君は仮にも教師と生徒ですね！……ああでも、このまま行けば織村先生がお義姉さんつてことで、それはそれで魅力的な——」

……おいおい、暴走してないか？

あまりの衝撃的な発言に俺はビックリする。

「——ハツ！？」

やつと状況が理解出来たのか、即座に山田先生から体を離す。

刹那、一夏の目の前をレーザー光が貫いた。

レーザーが飛んできた方向を見ると、

セシリアがブルー・ティアーズを起動させており、一夏めがけてライフルを構えていた。

「ホホホホホ……残念です。外してしましたわ……」

ドス黒いオーラを見に纏いながら言うセシリア。

……怖いよ！ 言つてることが。当たらなくて残念ついでひつこつこと。

「…………」

さらには、鈴が何も言わず 双天牙月 を含わせて、一夏めがけて何の躊躇い（ためらい）も無く、投げた。

「うおおおつ！？」

それを間一髪で避けるが 双天牙月 の形状はブーメランに似てい  
て、ブーメランと同じく投げたら手元に返ってくる。しかも、生身で今  
の体勢じや絶対に避けれない。

……間違いなく死んだな、ご愁傷様。

「はつ！」

ドンッ！ ドンッ！

不意に2発の銃声音が響く。

放された弾丸は 双天牙月 の両端を叩き、軌道を大きくずらした。  
すぐに銃聲音をしたほうを見ると、そこには倒れた体勢のまま上体  
だけを起こして、

射撃体勢になつている山田先生がいた。……さすが教師つてことですね。

「…………」

俺と香菜以外の全員が驚いている。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらこの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし…………」

雰囲気をいつもと同じように戻した山田先生は、

くるんと体を回して起き上ると肩部武装コンテナに銃を預ける。

「さて小娘どもいつまで惚けている。さつあと始めるぞ」

「え？あの、2対1ですか…………？」

「いや、さすがにそれは…………」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

負ける、と言われたのが気にさわったのか、

2人の瞳には闘志をたえさせた。特にセシリ亞が、だな。

こいつの場合、1回勝つてるからな。……手加減された山田先生に。

「では、はじめ！」

号令と同時にまず2人が飛翔、それを確認し山田先生が後を追う。

「手加減しませんわ！」

「さつきのは本気じゃなかつたしね」

「い、行きます！」

いつもと同じ言葉とは裏腹に山田先生の目は鋭く冷静なものに変わ  
る。

まず最初にセシリ亞と鈴が先制攻撃を仕掛けるが、山田先生はそれを簡単に回避した。

「さて、今之間に……そつだな、ちょうどいい。

『デュノア、山田先生が使っているIHSの解説をしてみせろ』

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしつかりとした声で説明を始める。

「山田先生の使用されているIHSは『デュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。」

第2世代開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期第3世代型のも劣らないもので、

安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。

現在配備されている量産型IHSの中では最後発でありながら世界第3位のシェアを持ち、

7カ国でライセンス生産、12カ国で制式採用されています。

特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選らばないことと、

多様性役割切り替え（マルチロール・チエンジ）を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、

参加サードパーティが多いことでしられています

「ああ、そこまででいい……終わるぞ」

ある程度、説明し終えたところで、千冬さんがシャルルの説明を止

め  
る。

模擬戦では、山田先生がセシリヤと鈴を誘導し、ぶつかつたところでグレネードを投擲。

爆発が起きて、煙の中から2人が地面に落下する。

「へへ、へへ……まさか」のわたくしが……

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわー。」

卷之三

「アーチー、アーチー、アーチー」

まつ、この中の悪さは一夏関係だから仕方ないかな。

「さすが、元代表候補生つてことですか？」

「そういう」とだ。これで諸君にもI.S学園教員の実力は理解でき

以後は敬意を持つて接するように。

手を叩きながら言つので、皆の意識が切り替わる。

「専用機持ちは織斑、黒月、オルゴット、デュノア、ボーテヴィツ  
、鳳、伸崎ジム。

6人グループになつて実習を行う。

各グループリーダーは専用機持ちがやれ。いいな？では分かれろ！」

## 14話 教師の実力（後書き）

明日、続きを投稿します。

具体的に時間をいふと、6時です。

## 15話 グループ実習（前書き）

おはーんばんちわ。

最近、新しい小説を書こうとしてる加那 翔です。

えつ？ まともに更新できるようにしてからやれ？

——無理です。だってこれが俺だもの。

## 15話 グループ実習

「専用機持ちは織斑、黒月、オルコット、デュノア、ボーテヴィッシュ、凰、神崎だな。

6人グループになつて実習を行つ。

各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれろ」

千冬さんのこの号令で1、2組全員が動くが……。

「織斑君、一緒にがんばろう!」

「わからない」という教えて~

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいれて！」

「黒月君ー！ISの操縦を手とり足取り教えてー！」

「私はベッドの上でもつくりと教えて欲しいかな…………／＼／＼

一気に一夏、シャルル、俺まあ、簡単に言えば男に押し寄せてきた。

一夏、シャルルは完全にどうしていいのかわからずただ立ちつくすだけだった。

……つてか、最後のやつ。「めんなさい。

謝るからこれからそういうことをこつのはやめて。

後ろから、人を殺せそなぐらいの殺氣を浴びてるから。

「IJの馬鹿者どもめ……出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はわざと言った通り。次にもたつくようなら今日はHSを背負つてグランド百周させるからな！」

千冬さんの一聲によつて群がつていた女子たちはすぐに整列しなおした。

……HS背負つてグランド百周つか。かなりキツイつてか出来る人いるの？

「最初からそうしろ馬鹿者どもが……」

ため息を漏らしながら千冬さんは愚痴る。

実習の時間が始まるとな、俺の班になつた女子達が集まつてきた。

「ええと、いいですかー皆さん。これから訓練機を一班一体取りにきてください。

数は『打鉄』が3機、『リヴァイヴ』が4機。

好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよ~」

そつぎの模擬戦で自信を取り戻したのか山田先生は堂々としていた。

「せじと、ビのヒラが良い?」

俺がそう聞くと、苦笑して惱み出す。

「うへん、私は打鉄がいいかな」

「……でも、リヴァイヴも捨てがたいよ

「こつその」と、黒月君に任せよう。私達、どちらでもいいし

「ナイスアイデア。じゃあ黒月君にすべて任せた

おこおこ、そんなので良いのか?

……まあいいや。早く決まったから。

「山田先生、打鉄でお願いします

「あつ、黒月君。はー、どうぞ」

「ありがとうございます」

黒影の腕を部分展開して、打鉄を乗せていく専用カートを押す。

「さて、とつあえず起動、装着、歩行までするだ。

順番は出席番号順、だよな。一番最初は……」

「はいはーい、出席番号2番、相沢優子ー・ようしづー

そつこつて握手待ちの手を出してきた。

「ああ、抜け駆け！」

「私も、私も！」

「初めて見たときから決めました！」

班の女子全員が横一列になつて同じじゆうに手を並べた。

「「「お願いしますっ！－！」「「

ふと後ろからそんな声が聞こえ、

見てみると一夏やシャルルの班も俺と同じじゆうになつていた。

「あのなあ、そんなことじつると……」

「「「いつたああつっ！－！」「

軽く説教じみたことをじつとしたとき、悲鳴？が聞こえた。

見なくてもわかるけど、鬼教官の仕業だらうな。

「……あんな」とになるぞ」

俺が指さしたシャルル班の惨状を見て、俺の班と織斑班女子達は流れるように列を解散する。

「……気を取りなおして始めますか。相沢さんは何回かエスに乗つたことがある?」

「あ、うん。授業で何回か、だけぞ」

まあ、それだけできてたら大丈夫だな。

「じゃあ大丈夫だな。とりあえず装着して起動しよう」

「オッケー、わかった」

そして装着、起動、歩行が問題なく進んでいった。

のだが、ここで問題発生する。

訓練機を立つたまま装着解除をしてしまったのだ。

専用機持ちだつたら「こんな」とにならないので、

忘れてしまっていたのだがこれでは立ったままの状態になり、装着することができない。

「どうしました？」

おお、つこやつを皿信を取り戻した山田先生の登場だ。

「実はこうなってしまったんですね」

訓練機を見上げながら囁く。

「あー、「ラックピットが高い位置で固定されてしまった状態ですね。」

それじゃ あ仕方がないので黒月君が乗せてあげてください」

「はいっ！？」

「ええ～っ、超ラックキー～！」

上から俺、一番田の女子の順番だ。

……ってか、これって俺がしないといけないのかよ。

「はあ、仕方ねえな。じゃあしつかり掴まつてみよ」

「うめつ！？」

てつとり早くこんな恥ずかしいイベントは終わらしたかつたので、  
かなり強引に右腕で女子の胴体、左腕で頭を支える。……簡単にい  
うとお姫様抱っこです。

..... / / / / / / /

そして打鉄のコツ クピット近くまでむかう。

なんか顔が赤い気がするけど、気のせいかな。

うん、後ろからもの凄い殺氣があるけど氣のせいだ。そう信じたい。

「……いつから届くか？」

限界ギリギリまでコツクペシトに近づいて言ひ。

「だいつじゅうぶ。いけぬ」

「ホントに大丈夫か？気をつけろよ」

黒影の腕に立つてこい!」とするが、それは無理だらうと思つ。

「うふ、つて……ひめわい！」

「おひと

ほり、言つたそばから落ちたりになつやがつて。

「「めん、足が「ああ、別に謝りなくていいから。わざわざ渡れ」

……「ふん、わかつた」

俺に返事だけすると、せつせと打鉄のコックピットに移る。

……もう大丈夫そつかな。

「よつと」

空中で黒影を収納し、地面に着地する。

うん、空中で収納してカツ「跳べ着地するつこのいな。

そして装着、起動、歩行とテンポ良く言つたのだが……

「じゃあ、HISから降りてくれ」

「……はーはーこ

またしても立つて降りてしまったのだ。

「あー、お前な……」

「あはは、『めんなれ』（他の女子達の視線が……）」「

一つ言わせてもらひうど、女子全員をコシックピットまで運びだしてしまった。

……せひ、 이런実習はしたくない。

しかないので、

俺や一夏の班は無論、男メインで運んでいた。

まあ、シャルルの班は例外な。

あいつがやる前に「デュノア君にそんな」とさせられない!」

と言つて数人の運動部女子が訓練機を持つていつたから。  
ちなみに俺はISを起動して……って。

「つーか、ISを使つていう発想はなかつたのな」

「……あ。た、たしかにそうだな……」

「はあ、少しせひこを使えよ」

頭を指先でつつきながら言つ。

「あ、ああ。……優哉、シャルル着替えに行こうぜ!」

俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけねえし」  
無理やり話を変えて、俺とシャルルに振るとシャルルは少し困った  
顔をしていた。

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしてからいくから、先に行つて着替えてよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

おお、やつこさん

「 そ う な の か ? な り 調 整 が 終 わ る ま で 待 つ る け ど …… つ て 、 痛 い 」

シャルルが渋る理由がわかつてしまつたので、どうしても待つといふ一夏の首付近を掴む。

「了解。一夏、シャルルがこう言つてるんだから、俺らは先に行くぞ」

それから俺はずつと一夏を更衣室まで引きずつていった。

「それで優哉。お前も一緒に来るか？屋上で食べるんだけど」

まあ、急いでる理由は簞と昼食の約束をじつうからだ。

一夏は慌てて着替えている。

「あー…やうだった。ヤベホ、急がないと…」

「だろ。……ってか、さつさと着替えな。時間がなくなるぜ」

「うひ……それはいやだな」

……確実に変態のレッテルが貼られるけども。

「あの状況だと、お前が人の着替えを覗くために待とうとしていた、  
としか思えなかつたんだよ。それとも何か？そんな噂を俺に流して  
欲しかつたか？」

「げほつ、げほげほつ……優哉、テメエ、俺を殺す氣か！？」

「俺は良い。シャルルと食堂で昼食を食べた後に

学園を案内しようと思っていたからな」

「ちなみにこの話は適切だ。……後で話にいかねえとな。

「やうが、分かった。それじゃ俺は先に行くから。それじゃ

それだけ言って、わざと更衣室を出て行った。

「このままこでも意味がないし、俺も出でこきまつか」

「……ホント、なんですか」

## 15話 グループ実習（後書き）

書き方を変えてみたのですが、  
この辺のほうが見やすいですかね？

出来れば書き方の感想を貰うと嬉しく思います。  
あつ、後…誤字脱字の報告も受け付けていますので、  
ドシドシ送ってください。

「……ホント、なんですか」

「んんっ？ 優哉。どうしたの？」

急に眩した俺に向かって言つた香菜。

いつなつた理由を言つと、まずシャルルを探す、で、見つける。

そして要件を話さうとした時、何故か来た一夏。

……で、昼食を一緒に食べることになったと。

「いつことなんだけど、納得できない。

なんで一夏はシャルルを誘うんだよ……学園を案内するつて言つた  
だろ。

「いや、別になんでもないけど

内心、かなり怒りながらも顔には出さないでおく。

「……どうしてんだ？」

それは俺が聞きたい、って算か。

「天気が良いから屋上で食べるって話だつただろ？」

「そりではなくてだな……！」

うん、確かにそうではないな。

算からすると、一夏と2人、屋上で食べたかったんだから。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食つたほうがうまいだろ？」

それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし

「そ、それはそうだが……」

口ではそりこつてるが、納得できていられないらしい。

……手を強く握り締めてる。

その幕の手にはお弁当が握られていた。

IIS学園はお弁当を持参したい生徒のために、

早朝にキッチンが使えるようになつてゐる。まあ、そのキッチンがかなり凄いんだよね。

今日も弁当を作ってきたけど。……つーか、俺もおかしかったよな。

弁当作つてきてるのに、食堂行くな。

「はい一夏。アンタの分」

と、言いながらタッパーを開ける鈴。

「ああ、酢豚だ！」

「今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言つてたでしょ」

見てみると、かなり血走つた。普通に店で売つてゐるような見た田の良さだった。

……だけど、この飯も用意するとかあつたら良かつたんじゃないかな？

「コホンコホン。一夏さん、

私も今朝はたまたま偶然何かの因果が早く目が覚めまして、

「ひこうのも用意してみました。よければお一ひとつどうぞ。」

鈴の隣でバスケットを開けるセシリ亞。

そこにはサンディッシュがきれいに並んでいた。

見た目は皿うだな。……味はヤバイと黙つねび。

でもそんなことを言つたら、俺と香菜も良かつたのか？

「いやいや、同じ男子同士仲良くしようぜ。」

色々不便もあるだろ？が、まあ協力していこう。

わからないことがあつたらなんでも聞いてくれ——IS以外で。

IS関係なら優哉に聞いてくれ

ISは無理なのかよ……と嘗ておつと黙つたが、言つのをやめた。

一夏は入学がいきなりだつたしな。——仕方ないか。

といつが、IS関係は俺に任せるとかよ。

「アンタはもうちょっと勉強しなさいよ」

「してるって。多すぎるんだよ。覚える」」

お前らは入学前から勉強してるから予習してるからわかるだけだろ」

「いや、俺は一切、勉強してないけどわかるぞ」

まあ、これは神様の加護だと思つけどな。<sup>チート</sup>

「それは優哉が天才なだけだと思つよ」

いやあ、別にそんなの褒めても何も出ませんよ。香菜さん。

「ありがとう。二人とも優しいね」

ドキッ。

いきなり無防備な笑顔と一緒に言われたので、つい照れてしまった。

——そうだ、今のシャルル（こじつ）は男だ。

照れてしまつてたらダメだ。そっち系だと思われる。

「い、いや、まあ、これからルームメイトになるだら……ついでだよ、ついで」

「一夏さん、部屋割りがもう決まつたのかしら？」

「いや、普通に考えたら俺の部屋だろ。男だし。優哉の部屋は一人部屋だしな」

「なんでも部屋が少し狭いらしいぜ」

一人部屋なら広いほうだけど、相部屋だとせまく感じるからね。

「やつか。まあ、普通に考えてそういうね」

「こんな話をしながらも毎食は進む。

一夏と鈴は酢豚、シャルルは購買のパン、

セシリ亞も自分の分は購買で買ってきていたようだ、

サンディッチは一夏が全部食べる」とになりやうだな。

そして俺と香菜は俺が作った弁当を食べていた。

「…………」

「どうした？ 腹でも痛いのか？」

鈴から貰つた酢豚を食べ終えた一夏は、

隣で箸を動かしていないどころか、

弁当の包みすら開けていない箸を心配して言ひつ。

……のは良いけど、女子に腹が痛いのか？

つて聞くのめじつかと黙つただけで、それは俺だけか？

「違う……」

「やうか。ヒーハーデ幕、

そういう俺の分の弁当をくれるとあらがたいんだが——

「…………」

無言で弁当を差し出され、返事に困る一夏。

「じゅあ、わいわい……わおーー」

弁当の中身は鮭の塩焼きに鶏の唐揚げ、じゅわじゅわゴボウの唐辛子炒め、

ほつれん草のゴマ和えというバランスの取れた献立だった。

「これはずいぶんな……どれも手が込んでやうだ

「ついでだつこで。あくまで私が自分で食べるために時間をかけただけだ」

そんなこと言つても、

照れ隠しだと俺こはわかるやうね。唐変木の一夏と違つて。

「やつだとしても嬉しいぜ。ありがと、箒

「ふ、ふん……」

そのへんとフラグだけは建てるんだからな、羨ましいよな。

「でも、この弁当量が多くねえか?」

「……それはだな。一応、優哉の分もあつたのだが……」

「くつ?俺の分?」

驚いたな。一夏の分しか作つてないかと思つたよ。

「ああ、でもいらないみたいだな」

「いや、貰うよ。

せっかく箒が作ってくれたんだ。全部、食べるわ」

「や、そつか……。なら良かつた」

微笑みながら箒に向かってそういうと、箒は少し照れたような感じで言つた。

「箒、なんでそつちに唐揚げがないんだ?」

「！」「これは、だな。ええと……」

「……うまくできたのがそれだけなのだから仕方ないだろ？」「

「え？」

なるほど。失敗したやつを一夏に見せたくないっていう奴心ね。

だから、一夏と俺の弁当のところしか無いこと。

「わ、私はダイエット中なのだ！だから、一品減らしたのだ。文句があるか？」

「文句はないが……別に太つてないだろ」

ああ、言っちゃった。

「あー、男って何でダイエット＝太っているのが構図なのかしらね」

「まったくですわ。デリカシーに欠けますわ」

一夏の言葉に鈴とセシリ亞の猛攻撃が始まった。のはいいんだけど。

「ちょっと待て。俺は別にダイエット＝太つてこむとは思わないんだけど」  
んだが

少なくとも俺はダイエット＝太つているとは思わないんだけど。

「コホン。飯食に呑みつつ。こつまで談笑していらっしゃるほど飯休み  
は長くない」

もう少しこれ関係の話をされたくないのかわからないが、話を終わらせる  
よりとする筆。

「それは同感だな」

「じゃあまあ、 いただきまーす……おお、 つまこー！」

唐揚げを食べた一夏が声をあげる。

「マジでーなら、 俺もいただきます」

そうこうして俺も口に唐揚げを頬張る。……うん、これはかなりつま  
いな。

「ひまつー。これはかなり手間がかかつてるな」

「これって結構仕込みに時間かかってないか？」

ええと、混ぜてるのはショウガと醤油と……んぐんぐ。

なんだかうつむ。絶対食べたい」とある味なんだナビ

……これは多分。

「二ノ二クか?」

あまり自信はなかったから独り言のようになってしまった。

「おひ、やうだ。良くわかつたな。

おひ二ノ二クを、ロシコウを少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おひしが適量だな

「へえ! それはいいな。今度やつてみよう

まあ、一夏はもともと一人暮らしだったからな。

料理は環境ができるよつこじしてくれたんだうつむ。……俺も似たようなものだけど。

そのため美味しい物のレシピは覚えていく必要があるしな。

「いやでも、本当にうまくな。箸、食べなくていいのか?」

「……失敗した分は全部自分で食べたからな……」

「ん?」

「あ、ああ、いや、大丈夫だ。まあ、その、なんだ……。おいしかったのなら、いい」

「本当にうまいから箸も食べてみりょ。『めり』

そう言つて一夏は唐揚げを一口サイズに切つて、箸で持ち上げる。  
そして空いた手で唐揚げが落ちないように添えながら。

「な、なに?」

「『めり』。食つてみろつて」

「い、いや、その、だな……」

これが一級フラグ建築士の実力だよな。意識せずにこんなことが出来るなんて。

「『めり』。箸、食べてみろつて」

「い、いや、その……だな。『めり』。『ほん』『ほん』

「あ、これつてもしかして日本ではカップルがするつていつ

『はー、あーん』つてこうやつなのかな?仲睦まじいね」

そんな金髪貴公子の言葉で一変、虎仙人と戦ひ女のようになじみ容する  
鈴とセシリア。

「だ、誰がっ！ なんでここにわらが仲いいのよーー？」

「そつ、そうですわ！ やり直しを要求します！」

シャルルに食つてかかる一人。だが、貴公子さんはすつと笑顔だつた。

「それなら」うしょう。みんな、一つずつおかずを交換しうつよ。

食べさせあこつこならいこでしょ」

「ん？ まあ、俺はいいぞ」

「ま、まあ、一夏がいいつて言つんならね。付き合つてあげてもいいけど」

「わたくしは本来なれば

そのようなテーブルマナーを摸ねるよつた行為は良しとはいたしませんが、

今日は平日で『今は日本、『郷に入つては郷に従え』ですわね』ホント、なんで『学園には素直じゃないばっかりいるんだろうな。

二人の言葉を聞きながら思つ俺。

「じゃ、早速もーらいつー」

鈴がそう言つて、一夏の箸から唐揚げを奪つ。

「あ、こりー」

「もぐもぐ……。うー、な、なかなかやるわね。なかなか

「ふつ。和の伝統を重んじればこそだ」

「あー……わりい箸。今ので唐揚げ、俺が口つけたのしかなくなつたわ」

「そ、そうなのか?」

「ああ。いくらなんでも男が口をつけた食べ物つていやだろ?」

つて、でもそつなると他出せるおかずないんだよな。唐揚げ以外は

「緒だし」

「べ、別に、口がついていてもいいぞ。私は気にしない」

「うふ？ そうなのか。じゃ、はい、あーん」

「あ、あーん」

よく『はー、あーん』なんて普通に言えるよな。

俺だったら絶対、言えないわ。

「い、いいものだな……」

「だろ？ うまいよな。この唐揚げ」

「唐揚げではないが……つむ。いいものだ」

笄が頬を赤くしてつむぐ。

一夏、お前は本当に…………。

「一夏！ はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」

「一夏さん サンドイッチもビーフも 一つと皿わざビーフ全部

！」

「「やあー。」

「ま、待て。待ってくれ。

まず酢豚はもう自分の分食べたし、

サンデイッチは食べ合わせの関係で最後にいただき 「

「「…………」」

「い、いただきます……」

そんな光景を見ながらシャルルは購買で買ったパン。

俺と香菜は俺が作った弁当を食べていたのだが……。

「優哉」

「ん?なんだ」

「はい、あーん」

俺を呼ぶ声が聞こえたので、

見てみると香菜が卵焼きを俺の口付近まで持ってきていた。

……えっと、これは俺に食えと？

「……早く食べてよ」

「あ、あーん／＼／＼／＼」

恥ずかしがりながらも俺は口を開ける。

そして次の瞬間、口の中に卵焼きを入れられる。

……ああ、恥ずかしい。

「おいしい？」

「……ああ、そうだな」

俺が作つた卵焼きだしな。美味しいに決まつてゐる。

「仲いいんだね、みんな」

そんな光景を見ていたシャルルがそんなことを呟く。

「まあ、やうだな。一夏に關しては、尻に敷かれてるだけだけだな

「やうかな？ 僕には仲よさやうに見えるけど」

「まあ、一夏が女子に対する優しさの事実だな。あれだからモテるんだよ」

本当に羨ましいよな。かなりモテるといひがた。

「……君も女子に対する優しさと思ひけどね」

「ん？ 何か言つたか？」

「いや、なんでもないよ」

……なんか言つたと思つただけどな、気のせいかな。

「一夏つてもしかして実習で毎回スース脱いでんの？」

俺とシャルルが話していた短い時間の間に何があつた？

なんでIS-Sースの話になつてんの。……ああ、午後の実習か。

「え？ 脱がないとダメだら？」

「女子は半分くらいの子が着たままよ？ だつて面倒じゃん」

「ていうことは」

そう言つて一夏が三人をじつと見る。

……お前は変態か。一夏。

「じょ、女子の体をジロジロ見ないでよー。」

「紳士的ではないですわよー。」

「女の体を凝視するとは、不埒だぞ！」

「…………」

「どうしたの、一夏？」

女子三人に散々言われ、一夏が俺たちの方を見る。

わかると思つが、最後に一夏を心配したのはシャルルだぞ。

俺は「いつの心配なんかしないからな。

「男同士つていいなと改めて思つてな」

「や、やつ。よくわからないけど、一夏がいいなら良かつたよ」

「……アホか、お前ら」

いきなり爆弾発言をする一夏と、

訳がわかつていないので返事をするシャルルに呆れる。

「……男同士がいって何よ……」

「……不健全ですか……」

「……灯台下暗しに気づかぬ愚か者め……」

女子三人に小さな声が言われる一夏だが、それに気づかないのが一夏だ。

ちなみに最後まで一夏達は白い目で見られた。

……俺も嚙き添えを喰らつたがな……

## 17話 猶し事

あれから午後の実習を普通に終え、自室でゆっくりしていたのだが、急に一夏が部屋に来て、いきなり一夏達の部屋に連れてこられたのだ。

なので、髪の毛を纏める」ともどきなかつた。

「で、俺はなんで連れてこられたんだ?」

「いや、こりこりとあって男子三人だけでゆっくり集まれてなかつたろ?」

「まあ、そりやそうだけじゃ」

ふと氣になり、シャルルのほうを見てみると、苦笑いが返ってきた。

「で?髪の毛を纏める時間もくれないで、いきなり連れてきた理由はなに?」

「……いや、まあ、じつくじ血口紹介とかしてないから、今から改めてしようかなと思つたんだけじゃ」

「……それはいいアイデアだけさ。

もつ少し時間をくれても良かつたんじゃないの?」

「うん、僕はいいよ

「まあ、別にいいけどさ」

「じゃあ俺から…俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ。改めてようしきな」

「うん、よひしき。一夏」

そういうて握手をする一夏とシャルル。

「俺は黒月優哉、優哉でいいから。よろしく」

「優哉、よろしくね」

「ああ、よろしくな」

そういうつてシャルルと握手する。が、やっぱり手が柔らかすぎる。  
男装するなら、こいつはもう少しも気をつかうべきじゃねえの？

「じゃあ、最後は僕だね。…シャルル・デュノアです、シャルルって呼んでね」

「おう、よろしくな。シャルル」

「シャルル、よろしく」

「よろしく」

改めて俺と一夏は、シャルルと握手をする。  
……どうじょうかな。今、仕掛けるか。

まあ、それから色々、話して決まったことがある。  
まず明日から一夏の特訓にシャルルが参加してくれる。

そして次に、俺とシャルルが明日、試合をすること。  
いやあ、久しぶりに試合だな。本当に楽しみだ。

「……そういうえば、優哉って髪の毛を降ろしたら女みたいだな」  
「つるひい。だから髪の毛を纏める時間が欲しかったんじゃねえか

よ

試合の約束とかしたあと、何故か知らないが俺の髪型になつた。

「でも、なんでそんなに伸ばすんだ？邪魔じゃないのか」

「……邪魔だけどさ、切れないんだよ」

髪の毛の一部を指で弄りながら言つ俺。

「なんでだ？」

「……今は亡くなつた妹がさ、好きだつたんだよ。俺のこの真っ黒の髪の毛がさ」

俺がそういうと、一人の表情が曇る。

「……ああ、悪い」

「『めん、僕達が聞いていい話じやなかつたね』

「なんでお前らが謝つてるんだよ。もつ過ぎたことだ。気にしてないよ。

でも、妹が好きだつたこの髪だけは伸ばしたいんだ」「  
つと、こんな暗い話はこの辺で終わつて、そろそろ本題にいきます  
か。

「そういうえば、一夏。

俺の今の髪型、女みたいだつて言つたよな」

「……ああ、言つたな」

「お前に連れ去られた時、クラスの女子が

『織斑君が知らない女の子を連れ込もうとしてる。  
織斑先生に言わないと』とか言つてたけど  
そういうと一夏の顔色がドンドン悪くなつていぐ。

「悪い、急用ができた！！」

かなり慌てながら走り出す一夏。……よし、作戦成功。

「あはは、やっぱり大変みたいだね一夏は」

「そうか？……俺は一夏よりお前のほうが大変だと思つんだけどな」「それって、どういう意味？」

「いや、ただ男の振りはキツイんじゃないかな？と思つてさ」

「あ、あはは。何言つてるのかな優哉。僕は歴とした男の子だよ？」

なるほどね。恍けることにしたか。

「……どこがだ。まず女子達が追つてきた時、自分が男の振りをしてることを忘れてたし、その次に、俺達が着替えだしたときも動搖してた。自分が男なら動搖することもないのに」

「……っ！？」

言い切つたと同時にシャルルは目を見開く。  
まあ、一夏は騙せてたしな、びっくりはしだらうな。

「とまあ、俺はお前が女だつてわかつたけど。何もするつもりはねえぜ」

「へっ？」

「だつて、お前が男装したのにも理由があるかもしねないだろ？だから何も言わないよ。クラスに広める気もない。勿論、一夏に言つたりもしない」

俺がそういうと、シャルルは安心したのかホッつと息を吐ぐ。

「最後に一つ……俺は、どんなことがあってもお前の味方だぜ。ああ、それを言つたら一夏もだな。それをお忘れなく」「それだけ言つて、俺は部屋を出る。

さあ～て、これでどうなるかな。

シャルルが相談してくれたらいいんだけどな。……一夏か俺に。  
俺的には、一夏にしてほしいけどな。

「ええとね、一夏がオルコットさんや  
鳳さんに勝てないのは射撃武器の特性を把握してないからだよ」  
それは同感だな。一夏はそんなの考えないで敵に突っ込んでるから  
な。

「そ、そうなのか？一応、理解してるつもりではいるんだが」  
土曜の午後、俺達は第四アリーナで訓練をしていた。  
土曜の午後は完全に自由時間になるため、他の生徒の姿もチラホラ、  
と言うよりも三人の男子目当てでかなりの人数が見られる。  
ちなみに俺とシャルルの試合はすでに終わっている。俺の勝ちでね。  
……そのとき、プライベート・チャンネルで色々と話した結果、  
今晚、何故俺がシャルルの正体がわかったのか、話し合いをすること  
になった。

「うーん、知識として知ってるだけって感じかな。

さつき僕と戦つたときもほとんど間合いを詰められなかつたよね？」

「うう……、確かに。イグニッション・ブースト瞬時加速も読まれてたしな……」

「一夏のEISは近接格闘オンリーだから。

より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速は直線的だから反応できなくとも、軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か……うーん」

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。

空気抵抗とか圧力とかの関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね」

「……なるほど。——でもさ、優哉は途中で軌道をえてなかつたつけ？」

「ううん、あれだけは僕にもわからないんだよね。優哉、アレはどうやってやつたの？」

それで俺に振りますか、シャルルさん。

まあ、あんな芸当できるのは確かに俺ぐらいだらうけれども。

「そうだな……、一言で説明すると黒影の能力だ」

「優哉のEISの？」

「ああ、あいつはスピードに特化してるだろ？」

そなあいつだからこそ出来る芸当なんだよ」

だから間違つても他の人がやると骨折とかするな。

「そつか……。サンキュー、一人の教え方は分かり易いな。他の皆はちょっと……」

「安心しろよ一夏。俺もあんな説明では理解できないわ」

簞の場合。

『「じへすばーつ、とやつてからがきんつ、どかんつ、と言つた感じだ』

鈴の場合。

『何となく分かるでしょ？ 感覚よ感覚……何で分かんないのよ、バカ！！』

セシリ亞の場合。

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

うん、これはわからないよな。

簞は擬音しかないし、鈴は鈴で感覚とか言われてもわからないし。セシリ亞は超絶実践主義のためある意味三人よりも分かり易い、ある意味三人よりも難しい、と一拍子揃つて尚更質が悪い。

「それは一夏が私の説明をちゃんと聞いていないのが悪いんだ！」  
いや、それは関係無い。あれはちゃんと聞いてもわからない。  
「そうよ！こつちは丁寧に説明してやつてんのにその馬鹿は！」  
お前の台詞のどこに丁寧さがあるんだよ！？丁寧差で言つたらセシリ亞のほうがあるわ。

「私の理路整然とした説明のどこがいけないと言つんですか！」  
だからといって、あんな難しい説明をされて一夏がわかると思つか！？俺はわかつたけどな。

「お前等、それ本氣で言つてんのか？」

額に青筋を浮かべながら言つ俺。

あんなんでわかつたら逆にすげえよ。俺でもわかんないんだから。

「まあまあ、落ち着いて。

……それじゃあ一夏の特訓はシャルル君と優哉に任せて、私達は向こうで特訓してようか」

香菜の提案に乗ったセシリ亞達はアリーナの端っこ辺りで特訓しにいった。

「一夏の白式つて後付武装がないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらつたんだけど、

拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だつて言われた」

今まで勉強していたからか、一夏はスラスラ答える。

まあ、拡張領域が空いてないのは白式だけでなく、黒影もだけどな。

「たぶんだけど、それって单一仕様能力の方に容量を使つてているからだよ」

「ワンオフ・アビリティーつていうと……えーと、なんだっけ？」

一夏が首をかしげる。まあ、馴染みのない単語かもしねりないな。

「单一仕様能力。漢字の通り、唯一仕様の特殊才能だよ。

各ISが操縦者と最高状態の相性になつたときに自然発生する能力のことだ。

普通は第一形態から発現するんだよ。

まあ、それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いから、

それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代型IS。

セシリ亞のビット

《ブルー・ティアーズ》や鈴の《龍砲》がそ

うだな

「なるほど。それで、白式の唯一仕様つてやつぱり『零落白夜』なのか？」

零落白夜……自身のシールドエネルギーを犠牲にして敵のエネルギー性質の物なら全て消せる技。これが唯一仕様じゃなかつたら、かなりチートだよな。……デメリットもあるが。

「白式は第一形態なのにアビリティー

があるつていうだけでものす」に異常事態だよ。前例がまったくないからね。

しかも、その能力つて織斑先生の

初代『ブリュンヒルデ』が使つていたISと同じだよね？

「まあ、姉弟だからとか、そんなもんじやないのか？」

「つうん。姉弟だからつてだけじや理由にならないと思ひ。さつきも言つたけど、ISと操縦者の相性が重要だから、いくら再現しようとしても意図的にできるものじやないんだよ」

「そうだな。……意図的に出来るものじやねえよな。

……作つた本人なら出来るかも知れないけどね。それも超天才なら。

「そつか。でもまあ、

今は考へても仕方ないだろ？」「そのことは置いておけ」

「あ、うん。それもそうだね。

じゃあ、次は射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ  
そつ言つてシャルルは一夏に銃を手渡す、  
そつきの模擬戦で使つていた五五口径アサルトライフル《ヴェント  
》だ。

「え？ 他のやつの装備つて使えないんじゃないのか？」  
「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、  
登録してある人全員が使えるんだよ。」

今、一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに使ってみて  
「お、おう」

シャルルから銃を受け取り、撃つ姿勢を作る一夏。  
しかし、射撃武器を使つたことがない一夏の様子はぎこちない。  
「か、構えはこうでいいのか？」  
「脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

超初心者の一夏のサポートにシャルルが入る。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、  
ほとんどはE-Sが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。セン  
サー・リンクは出来る？」  
「銃器を使うときのやつだよな？ そつきから探してるんだけど見当  
たらない」  
「うーん、格闘専用の機体でも普通は入つているんだけど……」  
「欠陥機らしいからな。これ」  
「百パーセント格闘オソリーなんだね。  
じゃあ、しょうがないから目測でやるしかないね」  
「大丈夫か、一夏？」

「大丈夫だ。問題ない」

(リアルに心配したのにネタで返していくな)

射撃練習用のターゲットに狙いを定めて引き金を引く。

小さな爆発音が響いた直後、ターゲットの端に弾丸が命中する。

「うおっ！？」

「どう？」「

「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』という感想だ」

「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も早いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。

だから、軌道予測さえあっていれば簡単に命中せられるし、

外れても牽制になる。一夏は特攻するときに集中しているけど、

それでも心のどこかではブレーキがかかるんだよ」

「だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」

「うん」

「だから、セシリアや鈴と戦うと一方的な展開になることがあるのもそのせいだな」

……俺はそんなことないけどな。

「そういうことか。あの三人の説明はわかりづらすぎてな」

それはあの三人の説明が独特すぎるだけだから気にするな。

急にアリーナ内がざわめき始める。——ドイツの第三世代型IISについて言つたら。

IIS線を向けると、そこには漆黒のIISをまとつ転校生

ラウラ・ボーデヴィッヒがいた。

「『シュヴァルツェア・レーゲン』……」

俺のIISと色だけはおんなじだけど、入ってる武器とかは完璧に違うんだよな。

「おい」

「……なんだよ」

ボーデヴィッヒの呼びかけに一夏が応える。

それと同時にいつでも黒影を展開できるようにしておく。

「貴様も専用機持ちだそつだな。ならば話は早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくとも私にはある」

「また今度な」

「ふん。ならば 戰わざるを得ないよつにしてやるー」

シュヴァルツェア・レーゲンを戦闘状態にシフト。

左肩に装備された大型の対空弾砲が火を噴いた。

「…………」

その銃弾を俺は無言で切り裂く。ちなみにIISは起動済みだ。ついさっき撃たれる直前に起動させた。

「……なんなんですかあ？  
いきなりぶっぱなしてくるなんて、ドイツの候補生はバカなんです  
かねえ」

「ふん、そんな挑発に乗ると思つのか……」

「別に挑発のつもりじゃなかつたんだけどな。

まあ、お前が確實に乗つてくる挑発ならあるけどね。

「で、なんでお前は一夏と戦いたいんだよ?……いや、理由は一つしかないな」

よかつたよ。

前に香菜と会つたときにラウラが一夏に殺意を持つてゐる理由を聞いておいて。

「……ラウラ・ボーデヴィッヒ、一つお前に良いくことを教えどいてやる。

千冬さんがモンド・グロツソ2連覇できなかつた理由に、一夏よりも俺のほうが深く関わつてんだ

「!」

刹那、シュヴァルツォア・レーゲン両腕の手刀で切りかかつてくる。難なく、俺は月光でそれを受け止める。

「貴様が、教官の……」

『そこの生徒、何をしていい……学年とクラス、出席番号を言え!』

「……ふん、今日は引こう」

担当の先生が来たからか、ラウラはそういうていなくなつた。で、ラウラが言おうとした続きは、大会一連覇という偉業を邪魔したのか。だらうな。  
まあ、ぶつちやけアレは嘘なんだけどね。

## 18話 アクションパート（前書き）

累計PV100000を超えました。 加那 翔です。  
これも皆様のおかげです。  
本当にありがとうございました。

そしてこれを書くのも何度目かわからませんが、  
「これからもよろしくお願ひします」

## 1-8話 アクシテント

「それでも風呂に入りてえな」

「俺は別にそんなに思わないんだが……、一夏つて風呂が好きだつたっけ」

「まあな。なんか風呂に浸かつてると一田の疲れが全てとれた気がするだろ」

実習を終えた後、俺達は更衣室で着替えを済まし、雑談をしていた。

「一夏つてか一夏、お前はどういわんかお爺ちゃんか……そりそり『三』たくなるような言葉だつた。

のだが、ほとんど女子の中でいたらそういう言葉も出てくるな。□には出してないけど俺もかなり疲れてるし。

「あのー、織斑君とデュノア君はいますかー？」

「一山田先生の声だな。なんか用事でもあつたんだろうか。

「はい?えーと、織斑は居ます」

「入つても大丈夫ですかー?まだ着替え中だつたりしますー?」

念入りに言う山田先生。

これは俺達が男だから聞くだけで、女子の場合は確認したりしないのかな?

まあ、それはさておき、俺ら男子になんのよつかな。ってか、一夏とシャルルにか。

「大丈夫です、終わつてますよ」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

バシュウツといつ音と同時に扉が開き、山田先生が入ってくる。

「あ、黒月君も一緒にいたんですね……」

「ええと、俺がいたらマズイ話ですか?」

「いえ、そうではなくてですね。」

男子全員に言つておかないといけないことがあってですね。

黒月君もこらなら、ちょっとどこになと思いまして」

「ああ、やうこひとか。一括で話せるからかよ」

と。

「でも、トコノア君は一緒にやないんですか? 織斑君達と実習中だつて聞きましたけど」

「まだアリーナに届ますよ。」

もうペッシュまで来ると思いますが、用があるなら呼んできまくけれど。」

「ああ、いえ、伝えておいてもらえば十分です。」

ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。

結局時間帯別にするところと問題が起きやすつなので、男子は週一回の使用日を設けることになりました」

「本当ですか!」

一夏がそれに大声で反応する。

そういうえばさつきも風呂に入りたいって言つたしな。

仕方なこいつやあ仕方ないけど、ひるむこと。

「嬉しいです。助かります。ありがとひざれこます、山田先生!」

「い、いえ、仕事ですから……」

と、山田先生も困りながら言つていた。

何故なら、一夏が山田先生の手を強く握りながら言つていたからだ。  
まあ、嬉しいのはわかるけど。——やりすぎだと想つ。

幕達にバレるとお前、へたしたら死ぬぞ。

「……優哉、一夏? 何してるので?」

あつ、シャルルが戻ってきたみたいだな。

……つて、俺は何もしないのになんで俺も言われないといけない  
んだ。

「二人とも、先に戻つててつて言つたよね」

「悪い、山田先生から連絡事項があつたから聞いてたんだ」

「喜べシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ!」

と、現在テンションがおかしなことになつてゐる一夏の言葉。

「そう」

シャルルはその一夏を横目で見ながら、タオルで頭を拭き始める……  
なんかいつもと違うな。

「ああ、そういうば識斑君と黒月君の一人には別件で用事があるので、職員室まで来ていただいていいですか?」

俺に用事……? なんだろうか。

「わかりました。——じゃあシャルル、なんか長くなりしどだから  
今日は先にシャワー使つてくれよ」

「うん。わかつた」

「それじゃあ山田先生、行きましょうか」

「…………。はあつ……」

ドアを閉め、寮の自室に自分一人になつたところでシャルルははき出すようにため息を漏らした。

それまで我慢していたせいだらうか、無意識に出たそれは思つたより深く、シャルル自身も驚くぐらいだ。

(何をイライラしているんだか……)

さつきの更衣室での自分の態度が今になつて恥ずかしい。  
さつきと優哉や一夏も面食らつていたに違うと考へると、ますます落ち込んでくる。

(……。シャワーでもして気分を変えよう)

シャルルはクローゼットから自分の着替えを一式取り出して、シャワールームに入つていく。

「ありがとうございました」

……予想通りだつたけど呼ばれた理由が黒影に関することとはね。  
まあ仕方ないか。自分で作ったんだし。

「優哉ーーっ！ー！」

お礼を言つて職員室から出よつとしたとき、一夏に呼び止められる。

「なんだ？一夏」

「悪いけど、自分の部屋に戻る前にシャルルにボディーソープを渡してくれないか？」

「それぐらい別にいいけど……」

「そ、うか、な、ら頼ん、だ」

それだけ言つと、一夏は職員室の中に戻つていく。

……つてか、それぐらいシャルルが勝手に取るだろ？  
ああ、でも一夏しか場所しらないつてこともあるよな。

「仕方ない、渡しに行くか」

このとき、自分で言つてたことなのに、俺は完璧に忘れていた。  
シャルルが実は女だつてことを……。

「シャルル。一夏に頼まれてボディーソープを持ってきたんだけど  
……つていなかつた」

一夏とシャルルの部屋に来たのだが、誰もいなかつた。

「ど、じにいつたんだろ？　うか……？」

そう思つていたのもつかの間、シャワールームから響く水音が聞こ  
える。

「ああ、シャワー中なのか……」

まあ、別に中まで入らなくとも近くに置いておけばいいよな。  
そう思い、洗面所に入る。

ガチャ。

——ガチャ？

今さつき、ドアを開けて入つてきたんだからその音が聞こえるのは  
おかしいよな。

一夏が帰つてきたにしても、早すぎるしな。ああ、確かシャワール

ームにもドアはあるよな。

で、現在、シャワールームに入ってるのはシャルルだよな。

「えつ、優哉！？」

「へつ……？」

それなのにシャワールームから出てきたのは金髪碧眼の女子だった。

あれ、今、シャワールームに入ってるのってシャルルだつたんじゃ。——って、シャルルが女だつたじやん……！

なんでそんな大切なことを忘れてしまつてんだよ……！

「あ、え、えーと……」

「きやあつー！」

ガチャ！

ハツと我に返つたシャルルが慌ててシャワールームに逃げ込む。その大きな音で俺も我に返る。

「……………」「……………」「……………」

ドアの向こうから返事はないけれど、聞こえないと信じて謝る。

「俺、お前のこと女だつて知つてたのに……」

ホント、なんで俺つてばこんなことしてたんだよ。

もつとちやつちやつとボディーソープだけ置いて戻れば良かつたじやんか。

「……………ボディーソープ、ここに置いとくな

「う、うん……」

その場にボディーソープのボトルを置き、俺は脱衣所を出る。

## 1-8話 アクシテント（後書き）

### 作者の一言

累計PV100000突破企画、やつたほうが良いのかな……。

シャルルがシャワールームから出てきたとき、一夏も同時に帰ってきてしまったので、今までのあらすじを話した。

「……ってことは、簡単に言つたらシャルルが実は女だったってことだよな？」

「まあ、ザックリ言つたらそういうことだな」「でも、なんで男のフリなんかしてたんだ？」

「それは、その……実家のほうからそうしろと言われて実家のほうからうつていうと、デュノア社か。

「うん？？実家っていうと、デュノア社の——」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

……やっぱりなんか事情があるな。

シャルルの表情が実家の話をしだしてから曇つてゐる。

「命令つて……親だらう？なん도そんな——」

「僕はね、愛人の子なんだよ」

——これはかなり暗い話だよな。いいのかな、俺達が聞いてても。

「引き取られたのが一年前。ちよつとお母さんが亡くなつたときには

ね、父の部下がやつてきたの。

それで色々と検査をする過程で IJS 適応が高いことがわかつて、  
非公式ではあつたけれど『デュノア社のテストパイロットをやる』こと  
になつてね』

シャルルは、おそらく言いたくないだろう話をそれでも健気に喋つ  
てくれた。

その思いに答えるためにも、俺達は黙つて聞くぐらうしか出来なか  
つた。

「父にあつたのは一回くらい。会話は数回くらいかな。

普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。  
あのときはひどかったなあ。

本妻の人には殴られたよ。『泥棒猫の娘が!』ってね。参るよね。  
母さんもちょっとくらい教えてくれてたら、あんなに戸惑わなかつ  
たのにね』

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルだが、その声は乾いてい  
てちつとも笑つてはいなかつた。

でも、俺達には愛想笑いもできなかつた。何故なら、かなりムカつ  
いてるからだ。

——シャルルのお母さんにじやなくて、『デュノア社にだけ』  
ふと一夏を見てみると、シャルルにはバレないよう手を強く握り  
締めていた。

「それから少し経つて、『デュノア社は経営危機に陥つたの』

「え? だつて『デュノア社つて量産機 IJS のシェアが世界三位だろ  
?』

「やうだけど、結局リヴィアイヴは第一世代型なんだよ。ISの開発つていうのはものすごくお金がかかるんだ。

ほとんどの企業は国からの支援があつてやつと成り立つていいところばかりだよ。

それで、フランスは歐州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。

第三世代型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

イグニッション・プラン……確か、

現在、第三次イグニッション・プランの次期主戦力機の選定中で、トライアルに参加しているのはイギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、

イタリアのテンペ스타？型。全てが第三世代型ISだ。

なので、第一世代までしか開発できていないデュノア社はトライアルに参加すらできない。

——で、補足だけど実用化では今はイギリスがリードしてゐるんだつたかな。

でも、まだ難しい問題だからセシリ亞がHS学園に送られたと。

……つてことは、ラウラもコレ関係かな。

「話を戻すね。それでデュノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、

元々遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。

圧倒的にデータも時間も不足していく、なかなか形にならなかつたんだよ。

それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかつた場合は援助を全面カット、その上でEIS開発許可も剥奪するつて流れになつたの

「なんとなく話はわかつたが、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに」

シャルルは俺達から目線を逸らす。

……やっぱり、そういう目的もあるんだな。デュノア社には。

「男なら俺達、日本で生まれた特異ケースと接触しやすい。で、可能であれば、俺の黒影と一夏の白式のデータを取ることかな？」

シャルルの言葉を遮つて俺の考えを言つ。

「それは、つまり——」

「そう、優哉が言った通り、

黒影と白式のデータを盗んでこいつて言われてるんだよ。僕は、あの人にな

——ああ、もう限界かも。なんか、ぶちギレしそうだ。

というか、いつのこと東さんに頼んで、デュノア社、潰してもらおうかな？

いや、潰すときは俺が潰すか……。

「とまあ、だいたいそんなところかな。でも一人にバレちゃったしきつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。

デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようないかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな

「…………」「

「ああ、なんだか話したら楽になつたよ。聞いてくれてありがとうございます。それと、今までウソをついてゴメン」

——なんで、こいつが謝らないといけないんだよ……悪いのは全てデュノア社あいつらじゃねえか。

深々と頭を下げるシャルルを、俺が動く前に一夏が肩を掴んで顔を上げさせた。

「いいのか、それで

「え……？」

「それでいいのか？いいはずないだろ。親が何だっていうんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪つ権利がある。おかしいだろう、そんなものは！」

「い、一夏……？」

「……今回も、になるけど一夏の言つ通りだとおもう

「ゆ、優哉……？」

シャルルが困惑してるけど、俺も話に入る。もう我慢なんてできるか！！

「親がいなけりや子供は生まれない。そりやそりだろうね。だからってな、親が子供に何をしても許されるなんて、そんな馬鹿

なことがあるか！

生き方を選ぶ権利は誰にでもあるはずだ。親なんかに邪魔をされる理由なんて無いだろ！！」

いつもと違つて俺とは、印象がかなり違うであらう大声で言つ。

——ああ、そつか。

なんで急に俺がキレたのか、ようやくわかつた気がする。

前世で道具のように使われるのも、

俺なりの生き方を邪魔されたのも、一足先に俺が経験したからだな。

「ど、どうしたの？一夏、優哉、なんか変だよ？」  
「あ、ああ……悪い。つい熱くなつてしまつて  
「まあ、俺も熱くなりすぎたな……」  
「いいけど……本当にどうしたの？」  
「俺は　俺と千冬姉は両親に捨てられたから  
「あ……」

おそらく資料か何かで知つていたであろう一夏の『両親不在』の意味を理解したらしく、

シャルルは申し訳なさそうに顔を伏せる。

「その……ゴメン」

「気になくていい。俺の家族は千冬姉だから、別に親になんて今さら会いたいとも思わない。それより、シャルル

はこれからどうするんだよ?」

「どうつて……時間の問題じゃないかな。

フランス政府もことの真相を知つたら黙つていらないだろうし、僕は代表候補生をあらされて、よくて牢屋とかじやないかな」「それでいいのか?」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ

「……だったら、ここにいろよ

「え?」

俺がそういうと、シャルルはびっくりしたような声をだした。

「なあ、一夏?」

「ああ、そうだな。特記事項第一一、

本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。

本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする

話を振ると一夏はスラスラとテキストの文章を言つていく。

おお、さすが勉強してた甲斐があつたな。

「つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だろ?  
それだけ時間があれば、なんとかなる方法だつて見つけられる。別

に急ぐ必要だつてないだろ」  
いざとなつたら俺が直接、デュノア社を潰してもいいしな。

「一夏」

「ん？ なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項つて五十五個もあるのに」

「……勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね。ふふつ」

一夏のギャグ？で笑うシャルル。

その表情には屈託が無くて、他のクラスメイトたちと回じ、十五歳の女子そのものだった。

「まあ、とにかく決めるのはシャルルなんだから考えてみてくれ

「うん。 そうするよ」

これならもうシャルルの心配はしなくていいかな。  
シャルルもこれから一夏を頼ることにするだろう。

## 19話 真相（後書き）

活動報告のほうに書いたのですが、

PV10万突破記念のほうはもうしばらくお待ちください。

ちなみにこの話のメイン人物は、シャルロットです。  
シャルロッタの方々、お楽しみに～

……自分の文章能力だと、  
楽しめないかも知れませんけどね。

PV100000突破記念（前書き）

予告していた通り、  
ヒロインはシャルでお送りします。

時間軸がかなり狂っていますので、  
見るときはご注意下さいますよ。お願い申し上げます。  
そしてキャラ崩壊もしてるかもしませんが…………、

それでも良いんですか？

見て後悔はしないですね？

では、どうかい。

「ああああああああ!!」

「よつと、あつぶねえな。シャルロット」

「だから、シャルって呼んでりていつてゐるでしょ」

とある日の朝、俺は第3アリーナでシャルと試合をしていた。

満面の笑みをシャルにしながら言ひつ。

卷之三

——ん、シャルはなんて言つたんだ？

「まあ、いいや。そもそも終わらねえ。かなり時間もたつたしや」

「うう、つづけよ。ミサジ、無理つけないで」

無理したつていいことなんてないんだから」

俺はEISを解除しようとしたけど、シャルの熱意に負けて解除する  
のはやめた。

「うん、わかつたよ。

「哉優」  
「あへ行く」  
「あぢき」

二三

シャルが近接ブレード ブレッド・スライサーを呼び出したので、それにあわせて俺も近接ブレード 月光 を呼び出す。

「……まつ、ひまつ」

「くつ……えうした？ こんなんじや俺は倒せねえぞ」

シャルが振ってきた近接ブレードを受け止めながら言つ。

「うん、やつぱつ接近格闘はまだまだだな。シャルは。

「なら、これはどう……」

今まで使つていた近接ブレードから、ショットガンとマシンガンを呼び出す。

「ちょ……」の距離でそれは……」

やばすがるだろ……、と言こながらも難なく、銃弾を避ける。

「あつぶねえ。

ホント、お前の高速切替リピート・スイッチはシャレになんねえな

一瞬でも気を抜いたら、即墮とされるな。

「……そりかな？」

僕としては、あの距離で銃弾を避けることの出来る優哉のまうが凄いと思つけど」

「いや、俺は凄くねえさ。こいつの性能が凄いだけだ」

手に持つている月光を見ながら咳く俺。

「うつと、違うよ。優哉」

「えつ？」

「黒影のスペックが高いのはわかつてゐけど、

その力を最大限に引き出せる優哉が凄いんじゃないのかな」

「シャル……」

そういうてもううるとありがたいな。

そんなことを思いながら、月光を強く握りしめる。

「……それじゃ、もうそろ終わろうぜ  
見物客も増えてきりやつてるし

「あ、あはは……」

俺の言葉にシャルが周りを見ると、軽く苦笑いをしていた。  
まあ、それもそうだろうな。

かなりの生徒が見物に来てるしな、しかも一夏達も一緒に見てるし。

空中でE�を解除し、カツコ良く着地してみる。

『『『きやあああーーーー黒丹君、カツコイイーーー』』』

「——ふう。シャル、訓練終わったし、

そろそろ着替えに行こうぜ……って、シャルさん? なんでそんな怖い顔をしてるんでしょうか?」

ふとシャルの顔を見てみると、『私、かなり不機嫌ですよ』って言つて言つてるような顔だった。

……あつ、でもシャルは私なんて言わないよな。言つたら可愛いと思つの!』。

「……別に、何でもないけど

「あつ、そう。なら着替えに行こうぜ!」

それだけ言って、俺はシャルの腕を引っ張る。

「あ、ちょっと……、優哉／＼」

腕を引っ張つてアリーナを出ようとすると、シャルが顔を真っ赤にそめていた。

あれ、怒らしちゃったかな?

でも、そりやあ怒るよね。いきなり腕を引っ張られたら。

「ああ、わるい……」

シャルに謝るうとしたとき、田の前をレーザー光2本が通る。

「えつ?」

レーザー光の発射地点を見てみると、なぜか笑顔な香菜さんがいた。

でも、なぜかその笑顔が俺には一一番、怖かった。

「あはは、香菜サン？」

「なんでIRSを起動してライフルをこちらに向けてるんでしょうか？」

「…………優哉、ちょっとO・H A・N A・S H Iしようつか？」

「お話じやなくてO・H A・N A・S H Iなんですか…………」

そんなことを思いながら、俺はIRSを起動させる。

そして……、

「全力で逃げる！！」

「待ちなさい、優哉——————つ——！」

遙か上空に逃げると、修羅の如く殺氣を放ちながら香菜が追いかけ

てきた。

……冬弥さんが面白がって追加したミサイルポット計10個を展開しながら。

「ちょっとー？それは無理…………」

俺はそういって訴えよつとするが、時既に遅し。

香菜はミサイルを発射させていた。

——あつ、これ終わつたな。

ミサイルを喰らつて墜ちるかも知れないのに、俺はそんなことを思つていた。

「——ああ、死ぬかと思った」

香菜の特訓……もとい拷問を請け負えた後、

俺はまるでゾンビのようにヨロヨロしながら更衣室まで戻ってきており、

現在は、着替えを済まし椅子の上に寝転がっていた。

「つてか、アレはリアルに死んだと思ったな」

「……あはは、あれは本当にびっくりするよね」

独り言のように呟いていたと思っていたが、いつの間にか隣にシャルがいた。

「おお、シャルか。さつきぶりだな」

友達が隣にいるのだから、みつともない姿を見せ続けるのはやめておいたほうがいいと思つたので、俺は上体を起して普通に座る。

「うん、そうだね。あ、はい……これ」

シャルの手には、スポーツドリンクとタオルが握られていて、差し出されている。

といつ点から、俺のために用意してもうつたと思つていいだらう。

「サンキュー、助かつたよ。

喉が乾きすぎて死にそうだつたぜ」

俺はそいつてスポーツドリンクを飲む。

……「うん、うまい。

やつぱり運動後のスポーツドリンクは格別だな。

「あのせ、ちょっとお願いがあるんだけど」

「お願い？」

シャルのお願い……？なんか珍しいな。

でも、本当に珍しいからこそ、叶えてやりたいよな。

「うん、実はわ……」

PV100000突破記念（後書き）

続きを読むWebで……！！

ところは、冗談でまだ続きを読むといません。

なので、続きを読むは出来しだい更新したいと思います。  
皆様の感想が多いほど早くなるかも…… WWW

「や、それは本当ですのー!？」

「う、ウソついてないでしようねー!?」

月曜の朝。いつもの時間に教室に向かっていた

俺達は廊下にまで聞こえる声に目をじょじょとさせた。

「なんだ?」

「ああ?」

「わっぽり、わかんねえ

隣にいるのは一夏と一緒にルームメイトのシャルル(男装ver.)だ。

「本当にだつてばー!」の噂、学園中で持ちきりなのよ?.

月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か黒田君と

「……なあ、俺達がどうしたんだ?」

「「「きゃあああああ!?!?」」

ただ単に声をかけただけなのに、この反応は酷くねえ?

——いきなり声をかけたのも間違つてゐるけど。

「で、なんの話だつたんだ?俺と優哉の名前が出てたみたいだけど

「う、うん? そうだつけ?」

「あ、ああ、どうだつたかしら?」

鈴とセシリアはあはは、うふふと笑いながら話を逸らす。

なんか、見た感じ何か隠してます雰囲気をマックスなんだけど……  
まあ、いいや。

本人達が隠したいんだつたら知らない振りをしておこう。

「じ、じゃあ私はクラスに戻るから」

「わ、わたくしも自分の席につきませんと」

そんな言葉を言いながら行動に移す一人。

それに乗つかつて周りの女の子達も自分のクラスや席に戻っていく。

「……なんなんだ?」

「「ああ……?」」

一夏の質問に俺とシャルルはそつ答えるしかなかつた。

「.....」

放課後、俺は屋上で冬弥さんからきた手紙を見ていた。

冬弥さんからの手紙の内容はVTシステムのことだった。

VTシステム……Walkyrie Trace System、  
ヴァルキリー・トレース・システム

このシステムだけど、かなりやばいシステムだという説明が書かれ

ていた。

そしてこのシステムに生前、ウチの両親が関係していたらしい。

(……ウチの親がVTシステムをねえ)

そのVTシステムが危ないシステムだとするなら。——俺のやるこ  
とは一つだな。

(そのシステムを見つけたら、全て壊してやる!—)

そう決心した直後——

ドカーンンッ!!

「つー?」

突然、爆発音が聞こえた。

(……場所はどこからだ)

そう思い、探してみるとアリーナのほうからだつた。

それを聞いた瞬間、何故か嫌な予感がしたのでかなり急いでアリー  
ナに向かう。

アリーナに到着すると、俺は直ぐに観客席に行く。

理由を簡単に説明すると、こっちの方が状況を見るだけなら圧倒的  
に早いからだ。

「……なんだよ、この状況」

一言でいうと、何がおこったのかわからない状況だった。

シャルルと香菜の後ろに、ボロボロになつている鈴とセシリ亞がいて、

そして全員を護るように一夏がラウラに向かつてしているのだが、さつきから少しも動いていない。

（もしかしてアレがIRSの動きを止めることができるAIICか……）

「な、なんだ！？くそつ、体がつ……！」

そして、零落白夜のエネルギー刃が次第に小さくなつていく。

（……マズイ！…黒影）

咄嗟に俺はIRSを起動し以前、

シールドに穴を開けることができた黒星をラウラに向かつて構える。「やはり敵ではないな。この私とショヴァルツェア・レーゲンの前では、

貴様も有象無象の一つでしかない 消えろ」

「……喰らえ！」

そして引き金トリガを引く。

「な、なにつ！？」

すると、月光から放たれたレーザーは引き寄せられるかのようにラウラに直撃した。

「……チツ、掠つたか」

……よう見えたのだが、実際は掠つただけのようだった。

「残念だつたな。ラウラ・ボーテヴィッヒ。  
一夏を倒すことが出来なくて」

「……やつと出でてきたか。黒月優哉！！」

あれ、この言葉を聞くだけだと俺が出てくれのを待つてたつぽい？  
つてことは、原作と比べると一夏への復讐心は薄いのかな。

まあ、俺の『千冬さんのモンド・グロッソ連覇を潰したのは俺だ』  
つて発言の効果だと思つがな。

「お前の狙いは俺か。……なら一夏、お前は引いてあいつらを護れ  
「そう言つけど、お前一人じゃ……」

「頼む、ここは俺に任せてくれ

「優哉……。ああ、わかつたぜ

真剣な表情で言つと一夏は、少し渋つたが俺の言つとおり引いてくれた。

その様子を見届けてから俺は黒星を手放し、月光を展開する。

「行くぜ。覚悟しなよ、ラウラ・ボーテヴィッチ

俺がラウラに飛び出さうとした瞬間、俺達の間に影が割り混んでき  
た。

ガギンッ！

金属同士が激しくぶつかり合つ音が響いて、  
俺は瞬時加速を中断させられた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる

「千冬さん！？」

その俺とラウラの間に入ってきた人物は、  
普段と同じスース姿でエスビニウムスースすら着用していない  
織斑千冬だった。  
だけど手に持つてるのはIS用近接ブレードで、  
170センチはある長大なブレードをISの補佐なしで軽々と扱つ  
ている。

その上、自慢じゃないけど

俺のイグニッショントーストも止められるんだから、  
常人離れしているとかのレベルじゃないな。

「模擬戦をやるのは構わん。

が、アーナのバリアまで

破壊する事態にならっては教師として黙認しかねる。  
この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」「教官がそう仰るなら」

素直に頷いて、ラウラはISの装着状態を解除する。

「織斑、デュノア、黒月もそれでいいな？」

「あ、ああ……」

「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

「は、はい！」

「僕もそれで構いません」

「俺も良いですよ」

返事をし直す一夏に続き、俺とシャルルも返事をする。

俺達のその言葉を聞いて、

千冬さんは改めてアーナ内すべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまでの私闘の一切を禁止する。解散！」  
パンツーと千冬さんが強く手を叩く。

あ～あ、良こって返事はしちゃったけど、

これのせいで試合が出来なくなつたな。……最悪。

## 20話 親の遺産（後書き）

最初の目標、PV10万突破の時はシャルをヒロインにしたので、次の目標、PV20～30万突破の時は誰をヒロインにしようかな？と、作者が迷いに迷つてしまつたのでアンケートを取ります！！

? ..... セシリリア・オルコット  
? ..... 凰・鈴音  
? ..... 篠ノ之 篓  
? ..... ラウラ・ボーデヴィッヒ  
? ..... 神崎 香菜  
? ..... 一夏（TS）

さあーー若干、冗談で書いたものもあつますが、あなたは誰を推しますか？

と、いうわけでドシドシ送りてきてください。お待ちしてこま。

21話 仕様変更（前書き）

加那 翔です。

アンケートはまだまだ続行中ですので、ドシドシ送つてくださいね。

## 21話 仕様変更

「…………」「…………」「…………」

場所は保健室、時間は第三アリーナの一件から一時間が経過していた。

ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯を巻かれた鈴とセシリアがむつすーとした顔で視線をあらぬ方向に向けていた。

「別に助けてくれなくてよかつたのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

素直に感謝すると思ったのに、これだからな。

まったく……一夏もバカだが、こいつらも色々な意味でバカだよな。素直に感謝してたら一夏の気を少しごらい引くことは出来るのに。まつ、感謝されたくて助けたわけではないけどね。

「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我は大したことなくて安心したぜ」

いや、全身打撲は酷い怪我だと思つのは俺だけなのだろうか？

「こんなの怪我のうちに入ら いたたたつ！」

「そもそもいつやつて横になつてこる」と自体が無意味 つひつ

つ！

「お前らバカだろ……」

そう呆れながら俺が言つと……、

「バカつて何よバカつて！ バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

なぜか一夏にバカと言い出す鈴とセシリ亞。

なんでお前らは一夏にバカつて言ってんだよ。 言ったのは俺だろ？  
まあ、俺はバカじやないから良いけどさ。

「好きな人に格好悪い」ところを見られたから、恥ずかしいんだよ」「ん？」

「やっぱシャルルはわかってんのか。 さすがだな」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。

部屋に入つたときの言葉は俺には聞こえたが、一夏には聞こえていなかつたみたいだ。

鈴とセシリ亞もしっかりと聞いていたらしく、かああつと顔を真つ赤にして怒り始める。

「なななな何を言つてるのか、全つ然わかんないわね！」

こここここれだから歐洲人ヨーロッパ人つて困るのよねえっ！」

「べべつ、別にわたくしはつ！ そ、そういう邪推をされるとこをとか氣分を害しますわねっ！」

二人ともまくしたてながらさらに顔を赤くしていく。

なんでこんなわかりやすい態度をとつてゐるのに一夏はわからないのかな。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ひんつ！」

「不本意ですが、いただきましょうっ！」

鈴とセシリアは渡された飲み物をひつたるようすに受け取って、ペットボトルの口を開けるなりごくごくと飲み干す。

卷之三

「な、なんだ？何の音だ？」

地鳴りのよつに響く、その音は廊下から聞こえていた。

しかもジンジン返りこむやうな氣がするの正直のせいだらうか?

ドカーーンッ！！

一夏が呟いた瞬間、保健室のドアが吹き飛ぶ。

でも、ドアってリアルに吹き飛ぶ」とつてあるんだな。初めて知ったよ。

「織斑君！」

「黑月君！」

# 「デュノア君！」

入ってきたーーというか、雪崩れ込んできたのは、数十名の女子だった。

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どひしたの、みんな……ちよ、ちよつと落ち着いて」

「「「「これ！」」「」」

バンッ！…という効果音がつき「うなぐり」の勢いで女子一同が出してきたのは、

学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「な、なになに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかつた者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』」

「ああ、そこまでいいからー。とにかくつー。」

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んでくれませんか、黒月君ー。」

「私と組んで、デュノア君ー。」

どうやら緊急告知文によると、学年別トーナメントの仕様変更があつたようだ。

そしてペア同士になるとこになつたので、

学園内に3人しかいない男に先手必勝とばかりに頼みにきた。

「え、えつと……」

だが、これはまずいな。

シャルルは女子だから、いつぞいで正体がばれるとも限らない。

——そうだ、一夏と組ませればいいか。

そいつ思つて行動しようとしたときには時、既に遅かった。

「やういえば優哉はシャルルと組むんだつたよな？」

一夏がそんなことを言い出したのだ。

おまえ、自分がこれ以上、疲れたくないからつて俺になすりつけるなよ。

そつ思つて反論しようと思つたが、他の人と組んでもしもラウラと当たつたときのことを考へる。

——やう考へるとやっぱこよな。他の女子じやあ。

つて、ひとはシャルルのほうが良いかな。やう思ひ、一夏の提案を受けることにする。

「ああ、やういえばそうだつたな。シャルル」

「あ、うん。そうだつたね」

「まあ、そつこつことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士つていうのも絵になるしね……『ほん』『ほん』

俺とシャルルが組むということを知つた女子達は、俺達のことは諦めたみたいだつた。

「なり、織斑君は空いてるわよね……。」

「あ、えつと……」

ある一人の女子がそつ言つてきて一夏は焦る。  
お前、自分のことを考えてなかつたのかよ。

「…………」めんなさい。一夏君とは私が組むことになつてゐるのよ。——

応、幼馴染だし」

そんな一夏を救つたのは香菜だった。

「あ、ああ。そうだったな。すっかり忘れてたぜ」

あはは、と苦笑いをする一夏。

普通にその反応じやバレるだろ。

まあ、結果を簡単に話すと、嘘とバレはしなかった。

そして俺達に組もうと言つてきた数十人の女子は去つていった。

はい、めでたしめでたし。

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

女子達が去つていった後、すぐに鈴とセシリアがベットから飛び出してくる。

「あ、あたしと組みなさいよー。幼なじみでしうがー！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしとー！」

いや、お前らの台詞の意味はわかんねえから。

幼馴染つていう点ならさつきペアになることが決定した香菜でも、  
筈でもいい訳だし。

クラスメイトとしてなら誰でもいいしな。クラスの人なら。

「ダメですよ」

いきなり登場した山田先生の言葉にその場にいた全員がびっくりする。

「お一人のISの状態をさつき確認しましたけど、ダメージレベルがCを超えてます。」

当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。

ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません

「うつ、ぐつ……！ わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！ 不本意ですが！ トーナメント参加は辞退します……」

鈴とセシリアは先生の言つてゐる言葉で納得したようだが、一夏はなぜ一人がトーナメントに参加できないのか理解できていないうちだった。

「一夏、IS基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三だよ」「え、えーと……」

これぐらいは基本なんだから覚えておこうぜ。一夏。

「『ISは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積すること』で、より進化した状態へと自らを移行させる。

その蓄積経験には損傷時の稼動も含まれ、

ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、

その不完全な状態での特殊工ネルギーバイパスを構築してしまっため、

それらは逆に平常時の稼動に悪影響を及ぼすことがある』

「シャルルの言う通りだ。一人のダメージレベルはCを超えている

つて山田先生がさつき言つてただろう?」

「おお、それだ! 思い出した!」

ひとまず話がまとまつたといひで、一夏が疑問を口にする。

「しかし、なんだつてラウラとバトルすることになつたんだ?」

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、何と言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「ふうん?」

まあ、一夏はわかつてないと思つけど、おそらく一夏のことを侮辱等でもされたのだろう。

ボーデヴィイッヒは一夏のこと嫌つてゐるからな。それ以上に嫌つてるのは俺らしいけどね。

「ああ。もしかして一夏のことを」

「あああっ! デュノアは一言多いわねえ!」

「そ、そうですわ! まったくです! おほほほほ!」

感づいたシャルルを一人が取り押さえた。

二人から口を覆われて、シャルルが苦ししそうにもがく。いやいや、あんな言い方されたら誰でもわかるつづーの。

「いらっしゃ、やめろつて。シャルルが困つてるだろ? が。それにさつきからケガ人のくせに体動かしちだぞ。ホレ、一夏が一人の肩を指でつつく。

そしてそれをまともに喰らつた一人は凍りつく。

「あ……すまん。そんなに痛いとは思わなかつた。悪い」

「い、い、いちかあ……あんたねえ……」

「あ、あと、で……おぼえてらっしゃい……」

これでシャルルは助かつたが、あとで一夏が大変なことになりそうだな。

俺には関係ないけど。

## 21話 仕様変更（後書き）

皆様に嬉しい？お知らせがあります。

リアル友達と一緒にやっているブログのほうに、PV10万突破記念企画の続きを載せました。

まあ、それでも未完成なんんですけどねwww

ブログはこちラです

<http://nyan-n160.blog.fc2.com/>

## 22話 新年別テーマメント、開始…（前書き）

まだまだアンケートは募集集中なので、  
ご応募、よろしくお願ひします。（詳しく述べ一話く）

並びに自分の活動報告のところ

【加那 翔】ところがタイルで記事をつくれりかと思こまか。  
そこでは、作者への質問「オーナーと題しまして、  
色々な質問に答えて貰つたりやめつかなど思つてこます。

なので加那 翔に聞きたい」とがあつましたから、  
活動報告にて質問コメントしてください。

小説のことからプライベートのことまで  
どんな質問にも答えますよ。

まあ、さすがに下みたいな質問には答えられないませんけどね。

例 ×（住所・番号・アドレス）

## 22話 学年別トーナメント、開始！！

六月の最終週に入り、IS学園は月曜日から学年別トーナメント一色に変わる。

そのため、俺のテンションはかなり上がっている。

だって強いやつと戦えるかも知れないんだぜ？超あがりまくりだよ。

と、話がそれたな……まあ、学年別トーナメントで忙しいため、

今、こうして一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓らいひんの方の誘導などで大忙しつてわけだ。

そしてそれからやつと開放された生徒達は急いで各アリーナの更衣室へと走る。

なので現在、各アリーナの女子更衣室はかなり大詰めだろうな。  
男子更衣室はかなりガラツガラだけどな。

「しかし、すごいな」つや……

観客席の状況を更衣室のモニターで見ながら呟く一夏。

(でも、確かにこれはすごいな)

そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、

その他諸々の顔ぶれが一同に集結していた。

「三年にはスカウト、一年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来てるからね。

一年には今のところ何も関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさつそくチェックが入ると思うよ」

「ふーん、『苦労なことだ』

まあ、俺はそんな大人の事情に興味ないんだよな。

それよりも今は、強いやつと戦いたい。

「一夏はボーデヴィッシュさんとの戦いだけが気になるみたいだね」「まあ、な」

そうか、一夏もラウラと戦つてみたいのか。

そりゃそうだろうな。

いくら協力性の欠片もないセシリアと鈴とはいって、専用機持ち一人を同時に戦えるんだから一年の中でも最強の部類だろ？

だからこそ俺も戦つてみたい。

「……一夏、正直に言つて俺もボーデヴィッシュと戦つてみたい。だからどっちが先にあいつと当たつても怨みっこなしだぜ」

「ああ、わかるわ」

俺達、全員着替えは既に済んでいる。

そして現在は、IS装着前の最終チェック。

そんな俺の隣では、シャルルは相変わらず男装用ISスーツを着て

いた。

「さて、いじの準備はできたぞ」

「僕も大丈夫だよ」

「俺もOKだぜ」

「そろそろ対戦表が決まる頃だな  
どういう理由なんだか知らないが、突然のペア対戦への変更がなされてから

従来まで使っていたシステムが正しく機能しなかつたらしい。  
本当なら前日にはできるはずの対戦表も、今朝から生徒たちが手作りの抽選クジで作っていた。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな

「え? どうして?」

「シャルル、一夏の性格を考えてみる。待つのなんて苦手そうだろ  
俺がそういうとシャルルは納得したかのように……ああ、という言葉を出す。

「……別に良いだろ」

不貞腐れたかのように言つ一夏。  
でも、まつ、自覚はしてんだな。

「待ち時間に色々考えなくて済むしさ」いうのは勢いが肝心だ。  
出たとこ勝負、思い切りの良さでいきたいだろ

「ふふっ、そうだね。

僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、

ちょっと考えがマイナスに入つてたかも

まあ、なんともシャルルらしい意見だな。

一夏とは正反対だな。……そう考へると俺つてビッチ派なんだろうな？

早めに戦いたいっていつはあるんだけど、手の内を晒したくないしな。

……やべえ、俺つてビッチにも入らないかも。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表に切り替わる。

それと同時に俺の顔つきも真剣になるのがわかつた。

俺はそんな顔をしながら、モニターを食い入るように見る。

「——え？」

「……へえ」

出てきた文字を見て、シャルルと一夏はポカンとするが俺は冷静だった。

といつのも、この結果を期待していたからだ。

俺とシャルルの一回戦の相手はラウラ、そして籌のペアだった。

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというのだ」

「いひちも同じ気持ちだぜ。お前とは戦いたかったからな」

試合開始まで5秒。4、3、2、1——開始——！

「「叩きのめす！——」

俺とラウラの言葉が奇しくも同じだった。

試合開始と同時に俺は月光を呼び出し、瞬時加速イグニッシュション・ブーストを行った。

「おおおっ——！」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す。——来る——！

こいつの慣性停止能力（A.I.C）を破る方法は、俺にはわからなかつた。

だからこそ、俺は————。

「…………」

俺の特攻を読んでいたのだろう。

腕を始めとし、胴、足とA.I.Cの網に捕まえられる。

何をしてもまったく動かない。見えない腕に掴まれたように身動き一つ取れない。

——ホント、これはチートだろ。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりやあどうも。以心伝心で何よりだよ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろ」

ああ、スゲエ分かるな。

ガキンッ！と巨大なリボルバーの回転音が轟き、  
『敵IISの大型レール砲<sup>カノン</sup>の安全装置解除を確認、  
初弾装填——警告！ ロックオンを確認——警告！……』  
と、黒影のハイパー・センサーが警告を出す。

「させないよ……」

俺の遙か後ろから聞こえる声。

それと同時に爆破弾<sup>バスト</sup>の射撃をラウラに浴びせる。

「なつ……！」

その銃弾が肩のカノンに直撃したせいか、焦るラウラ。  
俺に向かつて放った砲弾は、俺に向かつて放った砲弾は空を切  
る。

「喰らえっ！！」

動搖したためか、俺を拘束していたAICの効果が切れる。  
その隙をつき、俺は月光で切りかかる。

「くつ……」

月光を体をくねらせながら避けるラウラ。

——スゲエな。これを避けれるとは思わなかつたぜ。

「さすがだな。……ボーデヴィッシュ

「……貴様もな、黒月優哉。

私に突つ込んでくる直前、デュノアに武器を渡しておくとはな  
シャルルの持つているビームライフル……黒星を一目見てからラウ  
ラは言づ。

やっぱり俺の機体情報を知っていたか、まさかあれが俺の武器だと

バレるとはね。

「シャルル（ああ、やべえ。）」二つとタイマンで戦いてる

「わかつたよ」

名前を呼んだだけでわかつたのか、シャルルは簫の方へ向かう。

——サンキュー、シャルル。

おかげでこいつとの戦闘を楽しめそうだ。

「さて、これで一対一の戦いだ。

戦いを楽しもうぜ。ラウラ・ボーテヴィッヒ

23話 Valkyrie Trace System(前書き)

……サブタイ、ネタバレですね。

まあ、仕方ないか。これしかないし。

「さて、あつちはあつちで戦い始めたことだし。」ヒットも始めますか

シャルルの方を見ると、一人はもう既に戦い始めていた。

「先に片方を潰す作戦か……」

その光景を見て眩くラウラ。やつぱり籌は負けると思つてゐるんだな。まあ、訓練機だから仕方ないけどね。

とにかく、それは一先ず置いておいて、わたくしの推理は少し惜しいな。

「いや、違うぜ」

一息ついてから、月光を強く握り締める。

「これはお前が倒したがつてゐる俺と、一騎打ちをさせるための作戦だ。

ほら、嬉しいだろ？お前のいう教官様の夢を潰した本人がここにいるんだぜ？

殺せるものなら殺して見ろよ。哀れな黒うしをもん」

「貴様っ！」

軽く挑発すると、簡単に乗つてくる。

(こいつ、千冬さん関係のネタで挑発するとチョロいな。

面白いぐらい、簡単に乗つてきやがる。ああ、超おもしれえ）

内心、ほくそ笑みながら、突っ込んできたラウラのプラズマ手刀を月光で受け止める。

「喰らいなつ……」

そして空いているほうの腕に黒星を展開し、超至近距離銃撃をする。

「ぐはっ」

超至近距離のため、

避ける」ともできず直撃し、ラウラは壁まで吹っ飛ぶ。

（あ、力加減すんの忘れてたな。

まあ、いつか。あいつなら大丈夫だろ）

「おーい、大丈夫ですか？」

ラウラ・ボーデヴィッヒさん。こんなんで墮ちてませんよね？」

未だに止まない土煙に向かつて大声で言う。

まさか、こんなんで倒れたりしないでくれよ？

そんなことを考えていたそのとき——

「つー？」

いきなり土煙の中から、一本のワイヤーが俺に向かつてきた。

（これはあいつの武器——ワイヤーブレードだよな。  
つてことは、まだ気絶していないな）

「はああああつー！」

「くつ……」

まだ敵に向かつて切りかかる俺。

それをラウラは少ない動きで避けていく。

だが、連撃の前に疲れがで初め、とこくびに掠つたりしていく。

「これで終わりだ。ラウラ・ボーデヴィッヒー！」

一息に勝負を決めるため、俺は【疾風迅雷】を使いラウラに突撃する。  
月光はラウラに直撃し、シユバルツェア・レーゲンのエネルギーを全てなくした。

俺はそう思っていた。

――だが、それをきっかけに異変が起こった。

(こんな……こんなところで負けるのか、私は………)

確かに相手の力量を見誤った。それは間違えようのないミスだ。

しかし、それでも――

(私は負けられない、負けるわけにはいかない……！)

ラウラ・ボーデヴィッヒ。それが私の名前。識別上の記号。

一番最初につけられた記号は――遺伝子強化試験体C-0037。

人口合成された遺伝子から作られ、鉄の子宫から生まれた。

――暗い。暗い闇の中に私はいた。

ただ戦いのために作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。  
知っているのはいかにして人体を攻撃するかという知識。  
わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を『えられるか』という戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。  
私は優秀であった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。

それがある時、世界最強の兵器——I-Sが現れたことで世界は一変した。

その適合性向上のために行われた処置、  
『ヴォーダン・オージュ』によつて異変が生まれたのだ。

『ヴォーダン・オージュ』——擬似ハイパーセンサーとも呼ぶべき  
それは、

脳への資格信号伝達の爆発的な速度向上と、  
超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼への  
ナノマシン移植処置のことを指す。

そしてまた、その処置を施したこと『越界の瞳』と呼ぶ。  
危険性はまったくない。理論の上では、不適合も起きない——はず、  
だった。

しかし、この処置によって私の左目は金色へと変質し、  
常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。

この『事故』により私は部隊の中でもＩＳ訓練において後れを取ることになる。

そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、  
部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。  
世界は一変した。——私は闇から深い闇へと、止まることなく転げ落ちていった。

そんな私が初めて見た光。それが教官との……織斑千冬との出会いだつた。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。  
一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教える  
のだからな」

その言葉に偽りはなかつた。特別私だけに訓練を課したことはなかつたが、

あの人の教えを忠実に実行するだけで、

私はＩＳ専門へと変わつた部隊の中で再び最強の座に君臨した。

しかし、安堵はなかつた。自分を疎んでいた部隊員も、もう気にならない。

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に惹かれ——そして憧れた。

その強さに。その凜々しさに。自らを信じる姿に、強く焦がれた。

——ああ、こうなりたい。この人のよつになりたい。

そう思つてからの私は、

教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけては話にいつた。  
いや、話ができなくても良かつた。近くに、ただ側にいるだけで、

その姿を見るだけで、

私は体の深い場所からふつふつと力が湧き上がってくるのがわかる。

それは『勇気』という感情に近いらしい。

そんな力があつたからだろうか。私はある日、教官に聞いてみた。  
「どうしてそこまで強いのですか？　どうすればそんなに強くなれますか？」

そのとき——ああ、そのときだ。

鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた。  
私は、その表情に心がチクリとしたのを覚えている。

「私には弟と、弟みたいに可愛がつていいやつがいる

「弟……ですか？」

「あいつらを見ているとな、わかるときがある。  
強さとは何なのか、その先に何があるのかをな

「……よく、わかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな、いつか日本に来る機会があつたなら会つてみるといい。

……ああ、だが忠告しておくぞ。あいつらに——」

優しい笑顔、どこか恥ずかしそうな表情、それは——

(それは、違う。私の憧れるあなたではない。

あなたは強く、凜々しく、堂々としているのがあなたなのに)

だから——許せない。教官にそんな顔をさせる存在が。

そんな風に教官を変えてしまう弟、それを認められない。認めるわけにはいかない。

だから――――――

(敗北させると決めたのだ。アレを、あの男を、私の力で、完膚なきまでに叩き伏せると――)

ならば――こんなところで負けるわけにはいかない。

あの男は、アレはまだ動いているのだ。

動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない。

そうだ、そのためには――――――

(力が、欲しい)

ドクン……と、私の奥底で何かが「う」めぐ。

そして、そいつは私に向かつて言った。

『願うか……？汝、自らの変革を望むか……？

より強い力を欲するか……？』

言つまでもない。力があるなら、それを得られるのなら、  
私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる――！

だから、力を……完膚無き最強を、唯一無二の絶対を――渡しによ  
こせ――！

D a m a g e L e v e l ..... D

M i n d C o n d i t i o n ..... U p l i f t .

C e r t i f i c a t i o n ..... C l e a r .

V  
a  
l  
k  
y  
r  
i  
e

T  
r  
a  
c  
e

S  
y  
s  
t  
e  
m

...  
b  
o  
o  
t  
.

## 23話 Valkyrie Trace System（後書き）

今日、もう一回更新します。

既に予約しているので、言いますが12時です。

誤字・脱字がありましたら、報告してくれると嬉しく思います。

## 24話 決意、そして決着

「あああああああつ……！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。

と、同時にラウラのIS【シュヴァルツェア・レーゲン】から激しい電撃が放たれる。

「ぐつ……いきなりなんだ！？」

それにより、俺の体が吹き飛ぶ。

……いつたい、何なんだよ。コレ。

「な、なにコレ……？」

いつの間にか筹との勝負を終わらせてきたのか、シャルルが俺の側まできて呟く。そして俺もシャルルも目を疑う。その視線の先では、ラウラが……そのISが変形していた。

(変形……？違う、そんな生易しいものじゃねえな)

シュヴァルツェア・レーゲンの装甲がぐぢゃぐぢゃに溶け、どろどろになつてラウラの全身を包み込んでいく。黒い、濁つた闇が、ラウラを飲み込んでいった。

ISはその原則として、変形はしない。  
厳密には出来ない。といった方が合っている。  
ISがその形狀をえるのは【スタートアップ・フィッティング初期操縦者適合】と

【形態施行】<sup>フォームシフト</sup>の一つだけ。

パッケージ装備による部分変化はあっても、基礎の形状が変わることはない。

だが、その“有り得ない事態”が……目の前で起っていた。

シュガーヴァルツニア・レーゲンだったものは、ラウラの全身を包み込んでいた、

その場所に立っていたのは、【全身装甲】<sup>フルスキン</sup>のHSに似たナーラ。

しかしその形状は、先月の襲撃者とは似ても似つかない。

見た目は、少女の成りだつた。

(……コレ、誰かに似てる気が)

何故か、俺は冷静にそんなことを考えていた。

そしてそいつの手を見た瞬間、疑問が確信に変わった。

「つー?」

考え方をしていた瞬間、やつは俺に剣を振るつてきた。

「うぐっ……！」

考えていた最中だったので、

それをマトモに喰らつてしまい、地面を軽く1~2回バウンスする。

……それにより、EISが強制解除される。

(くそっ、今までエネルギーを全部、使ったまつたか?)  
だが、これでわかったことがある。

アレは確実に……

「雪片……」

雪片——かつて千冬さんが使っていた武器だ。  
でも、なんで千冬さんのマネをしているんだよ。こいつは。

『君の親が関わっているV-Tシステム。

これは、過去のモンド・グロッソの部門受賞者をトレースするシス  
テムだ』

ふと冬弥さんが教えてくれた情報を思い出す。

(確か、千冬さんはモンド・グロッソで優勝していたよな。  
つーことは、これがV-Tシステムだよな。

……ホント、あいつらは何を考えてこれを作ったんだよ)

これを見た誰かさんは気にするだらうなと思い、俺はオープンチャ  
ンネルを開く。

「……一夏、アレって多分」

『離せつ!——離せつ!——』

『一夏さん、落ち着いてください!——』

『そうよ。今、アンタが行つてもビリじょつもないじょつが!——』

おいおい、暴れすぎだろ。てめえは。

「すー、はー。すー——、落ち着けつつなんだよ。このボケつ

!——」

「『『『』』』?』『『『』』』

いきなり怒号を漏らした俺に、ペックリする一夏達。

「……落ち着いたか。一夏」

『あ、ああ。……悪い』

「気にすんな。で、俺の聞きたいことなんだけど、アレは千冬さん  
だよな?」

『ああ、アレは絶対に千冬姉だ』

だよな。あの剣筋や、あの武器は確実に千冬さんだ。

「……そつか。悪いな、一夏」

『えつ』

「今日は俺に任せてくれ。

アレにはウチの親が関わってんだ。頼む」

真剣な表情で一夏に向かつて言つ。

すると、その必死さが伝わったのか、一夏は——

『優哉……。ああ、わかった。今回はお前に任せる』

「……サンキュー」

ま、そんなこといつのは良いんだけど、もうエネルギーがないんだ  
よな。

「優哉。アレと戦いたい理由は何となくわかったが、  
どうやって戦つつもりだ? もう黒影のエネルギーはないのだろう?  
うぐう、これは第せん。鋭いツツ! ミミで……」

「無いなら他から持つていけば良いんじゃない?」

シャルルはふわりと俺達の元へ降り立つ。

「シャルル……」

「普通のHSなら無理だけど、

僕のリヴァイブならコア・バイパスでエネルギーを移せると細つ

「マジか……なら、頼む」

「だけど、約束して。絶対に勝つって」

びしつと俺に向けて指を指して言つ。

その言葉はシャルルにしては珍しく、強い言葉だった。

(絶対に勝つ、か……)

「ああ、絶対に勝つや。

」「こまで啖呵きつていくんだ。負けたら男じゃねえよ

「それじゃあ負けたら、これから一ヶ月、女子の制服で登校してもらおうかな?」

「うう……。ああ、わかった。負けたら着てやるや。まつ、負けるつもりはさらさらねえけどな!!」

シャルルの軽いジョークのおかげで、いい意味で緊張がほぐれる。

「じゃあ、始めるよ。……リヴァイヴのコア・バイパスを開放。

エネルギーの流出を許可。——優哉、黒影のモードを一極限定にして。

それで疾風迅雷を使えるはずだから

「ああ、わかった

リヴァイブから伸びたケーブルが

イヤリング状態の黒影にと繋がれ、エネルギーが流れ込んでくる。

「完了。これでリヴァイブに残ってる全てのエネルギーは渡したよ

その言葉通り、リヴァイブは光の粒子となつて消えていく。

——本当に全て渡してくれたんだな。

それにあわせて、黒影は再度、俺の体に一極限モードで再構成されていく。

「やつぱり、これだけだと武器と左腕だけだね」

「これでいいわ」

(黒影、【疾風迅雷】で行くぞ)

心中でそう呟くと、黒影は俺の言葉をわかつてくれたのか。エネルギーが全て月光に向かっていくのがわかる。

(これじゃあ本当に真剣勝負だな。

こいつが当たれば俺の勝ち、だが逆に攻撃を喰らえば俺の負け)  
何か嫌になってくるぜ。

そつ思つていいはずなのだが、顔はずつと笑っていた。

「…………」

意識を集中させるために、俺は目を瞑る。

(思ひ出せ。過去に千冬さんと戦ったときに使った構えを……)

(そうだ、そうだった。

『ぐつ……ーー』

『甘い……良いか、そんな構えでは駄目だ。

もつと全ての攻撃に対処出来る構えをしろーー。』

『そんなこと言つたつて……』

『泣き言を言つた。そんなこと言つてると、誰も護れないぞー。』

『つーー？』

『お前は強くなりたいんだろ？だから私を頼つてきたんだろう？剣のことになると、厳しくなる。とわかっているから』

(……そうだったな。

俺はこのときから誰かを護りたい。そう思っていたんだったな)

——俺に関わった人、全てを護りたい。

小さいながらに俺が思つた事。

なんでこんな大切なことを忘れていたんだ）

「……全てを護りたい。俺に関わった者、全てを——」

その護りたい人、全員が見ていることも忘れて俺は呟く。

「だからこそ、俺は千冬さんに教えてもらつたんだ」

自分の体の中心となる位置で月光を構える。

それは随分、昔に使つていた俺にあつた俺だけの構えかた。

「力が欲しいと……。お前もそつなんだろう？」

ラウラ・ボーデヴィッヒ。だからこそ、その姿なんだろう？  
お前の内で一番、強い存在……織斑千冬。お前はずつと、強くなり  
たかったんだ！！」

聞いているはずのないことだが、大声で叫ぶ。  
どうしても聞いて欲しいことだからどうつか?  
自分でも良くわかっていないが、とにかく叫ぶ。  
自分の思ったこと、感じたこと全てを——。

「だけど、その強さは偽物だ！！

他人の姿をマネしたからって強くなれるわけじやねえ！！  
だから俺が今、本当の強さを見せてやる。見ておけよ、ラウラ」  
叫び終えた後。俺は月光を強く構え直す。

そして——

「行くぜ、偽物野郎！！」

疾風迅雷を使って偽物に突っ込んでいく。

「…………」

それに合わせて黒いＥＳは、全力で刀を振り下ろしていく。  
千冬さんが使っていた早く、鋭い袈裟斬り。

だが、千冬さん自身が使っていた袈裟斬りよりは弱かつた。

「はあああああつ！！」

振り下ろしてきた刀を月光で弾き飛ばす。

黒いＥＳはそれにより、何も持っていない状態になる。

「これで終わりだーーーー！」

すぐさま、頭上で剣を構え、ためらうことなく振り下ろす。

「ぎ、ぎあ……ガ……」

ジジッ……という紫電が走り、黒いＥＳが真つ一つに割れる。

そして、気を失うまでの一瞬であろう、ラウラと俺の目が合ひ。眼帯が外れ、あらわになつた金色の左目と。

それはなんだか、ひどく弱つている捨てられた子犬のような眼差しに見えた。

『助けて欲しい』と言つてゐるような感じがしたのだ。

「……これで一件落着かな」

力を失つて崩れてきたラウラを抱きかかえ、頭を撫でながら呟く俺。抱きかかえたときに痛くないようには既に解除済みだ。というか、エネルギーを使い果たしたから勝手に消えた。

「一つ忠告しておぐれ。あいつらに会つときは心を強く持て。  
あいつらは未熟者のクセにどうしてか、妙に女を刺激するのだ。  
油断していると、直ぐに惚れてしまうぞ」

「やういふ」

そんな風に言つてくる教官。  
だが、言葉とは反対にひどく嬉しそうで、照れくわいちな感じの表情だった。

「教官も惚れているのですか？」

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿者め」

「ヤリとした表情で言われて、ますます落ち着かなくなる。  
教官にこんな顔をさせる、その男達がーー羨ましい。」

そして、出会つてわかつた。戦つて、理解した。

強さとは——何なのか。

その答えは無数にあるのだ。「

けれど、その答えの一つに出会ってしまった。

『強さ……？そりゃああれじゃないか？

心の在処、己の拠り所。自分がどう有りたいかを常に懸(い)じる  
ねえか？』

……そう、なのか？

『まつ、これは俺の独断だけど、自分がどうありたいかわからな  
いやつは、

強い弱い以前に歩き方を知らないだろ？』  
……歩き、方……。

『どこへ向かうか。どうして向いたいか、だ

……どうして向うか……。

『ああ、やうこ(う)じだ』

——お前は何故、そこまで強いんだ？

何故、そこまで強くな(う)つとする？

『バーカ、俺は強くねえよ。全然、強くなんかねえ』

断言。その言葉に私はポカンとしてしまつ。

あれほどまでの力をもつてして、強くないと言い張る。

それが私には意味がわからなかつた。

『けれど、お前が強いつていうのであれば、俺は強いのだろうな。  
単純な力では無く、心が——』

……心が、強い？

『ああ、人は誰でも心が強かつたら、自然と力は手に入るもんなんだよ。

それに俺は、やりたいこともあるしな』

——やりたいこと？

『そうだ。俺はさ、今まで人を護れたことがないんだよ。  
だから、俺に関わった人全員を、護りたい。

これを人は強欲と言つんだろうな。

だけど、俺は全員、護りたい。いや、護るんだ』

——それは、まるで……。

『ははっ、そうだな。だから、お前も護つてやるよ。ラウラ  
笑顔で言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『護つてやるよ』

そう言われて私は——ああ、そつか。

これが、そうなのか。

ときめいて、しまったのだ。

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。  
こいつの前では、私は……ただの15歳なのだと。  
ただの『女』なのだと。

——黒月、優哉。

ああ、これは確かに……。惚れてしまいそうだ。

## 24話 決意、そして決着（後書き）

作者の一言

優哉

……まあ、自分でそんなキャラにしたんですけどね。

## 25話 事件の後（前書き）

急遽、もう一話更新します。

理由は、加那 翔のみぞ知る。つてね WWW

## 25話 事件の後

『トーナメントは事故により中止となりました。

ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。

場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上——』

ピ、と誰かが学食のテレビを消す。

その様子を俺は、さつねうどんを食べながら見ていた。

「ふーーん。やつぱり、シャルルの予想通りになつたな

「そうだねえ。あ、一夏、七味取つて」

「はいよ

「ありがと

「あ、俺にはカラシ」

「ほいよ……つて、きつねうどんにカラシは合わねえだろーー！」

「おお、ナイスツツコミだね。一夏」

当事者とは思えないほどの人びりと食事を取る俺たち。

と、いうもののさつきまで事情聴取されていたのだ。

そしてやっと晩飯を食べるようになった時間が、食堂が終わるギリギリのこの時間になつたつてわけだ。

そういうえば、さつきから周りの女子の雰囲気が変だな。

テレビが消える前までは騒がしかったのに、今ではひどく落胆しているようだ。

その沈みつぶりは、さながらタイ一ック号のようだった。

いや、見たことはないんだけどな。

「…………優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「…………うわあああんっ！」

数十名が泣きながら走り去っていった。一体何があつたんだろうね？」

俺にはさつぱりワカンナイヤ。ははは……。

「どうしたんだろうね？」

「さあ？」

「…………鈍感共が」

そんな会話を交わしながらふと見ると、

女子が去った後に、一人呆然と立ち尽くす篠の姿があつた。

篠に気づいた一夏が、篠の側に寄つていぐ。

「へえ、一夏もやるな」

「うん、そうだね」

食後のお茶を飲みながら言つ俺達。

いやあ、さすが一夏だな。

空氣を読んで篠のところに向かうなんて。

「そういえば篠。先月の約束だが」

一夏が篠に話しかける。

「付き合つてもいいぞ」

「へえ、一夏が篠と付き合つのか。

「えつ！？」

「えつ、なんで？」

あの一夏が篠と付き合つだと…？」

隣に座っていたシャルルもこの面葉にはビックリしたようだつた。

目が見開いていた。

「な、なに！？」

「だから、付き合つてもこいつて……おわつー？」

突然、一夏が箒に絞め上げられる。

ホント、嬉しそうだな。箒。

「ほ、ほ、本当、か？ 本当に、本当に、本当なのだなー！？」

「お、おつ」「な、なぜだ？ り、理由を聞こつではないか……」

「そりや幼馴染の頼みだからな。付き合つせ」

「そ、そつか！」

「買い物くらい

……ですよねー。

うん、だろうと思つた。

所詮、一夏だもんね、仕方ないよ。

「…………だろうと……」

「お、おつ？」

「そんなことだろうと思つたわー！」

そう叫ぶと、箒は鋭い正拳を一夏の顔面に喰らわせる。

「ぐはあつー！」

「ふんー！」

追い討ちをかけるように、くめく一夏のみぞおちこつま先が刺さる。

……あ、白だ。

「ぐ、ぐ、ぐつ……」

「一夏ひでさ、わざとやつてるんじゃないかつて思つときがあるよね」

「だよな。これはさすがに…………ないわ」

篠が去つたあと、俺とシャルルは、

一夏が腹を抑えながら呻いている場所まで向かつて話す。

「な、なに？ どういう意味だ、それは？」

「さあな。自分で考える。バーカ」

笑いながら言つてみる。

まつ、これでわかつたら凄いけどな。

「はあ……、疲れた」

ぐつたりと、屋上のフェンスにもたれる。

もづ、あんなに集中力を使う戦いはしたくなえ。そんなことを思いながら。

「お疲れさま、優哉」

不意にそんな声と、頬に冷たい感触が走る。

「冷たつ！……ああ、香菜か。サンキュー」

慌てて冷たい感触を探ると、スポーツドリンクだった。

そしてそのスポーツドリンクを持っていたのは香菜で、微笑みながら俺の頬に当ってきていた。

「あーあ、せつかく私がラウラちゃんを助けようと準備してたのに、ストーリーを知らない、優哉に先を越されたな」

俺に愚痴るよう、「にうよ」と、嫌味を言つてゐる香菜。

「悪いな。俺にも事情があつたんだよ」

ついさつき渡されたスポーツドリンクを開け、飲み始める。

「……∨Tシステムでしょ？」

が、香菜のその一言により、手を止めてしまう。

「ああ、そうだ。冬弥さんから聞いたのか？」

「うん、まあね」

「やうか……。なら、話さなくてもいいよな？」

「……うん。ところが、話したくないならどんな話でも言わなくていいよ」

その言葉にジーンとする俺。

(…………こいつが前世の妹だつて気づいてなかつたら、惚れてたかもな)

「……優哉、朗報だぞ！――」

急に屋上に來た一夏。口調は本当に嬉しそうなそれだつた。

「……む――――」

だが、一夏の機嫌とは裏腹に、香菜の機嫌はますます落ちていつた。なんでこいつは唸つてゐるんだ？まつ、いつか。

「おお、一夏。どうしたんだ？」

「今日から男子の大浴場使用が解禁されるんだよ」

「へえ、それは嬉しいな」

特に今日みたいな日は。

かなり疲れが溜まっちゃってたんだよね。

「ああ、これからボイラーポイント検の日だけ使えるようになるらしい」「

「そうか、なら早く行こうぜ」

「……悪い。俺は今から千冬姉のところに行かないといけないんだ。

先に入つてくれ」

「そうか……、じゃあな、香菜。それと先に行つてるぜ、一夏」

残念だな。そう思いながら、俺は屋上を後にする。

……大浴場か。楽しみだな。

だが、またしても俺はつっかりで“ある事”を忘れていた。

「うお———、「これはすげえ——！」

大浴場に入つてすぐ、俺が言つた言葉はそれだった。

と、言うのも大浴場といつ言葉からしてわかると思つが。

広い、とにかく広いのだ。

うわ、やべえ。

こつやあ風呂好きの一夏じゃなくとも、テンションあがるだ。

それから体を洗つたり、頭を洗つたりし、30分ぐらいいたつたころ。ドアのほうから人影が見えた。

おそらく一夏だろう、そう思い気にせず風呂を堪能していると、ドアの開いた音が聴こえた。

……アレ、おかしくね？

一夏ならば、俺みたいに風呂を見た瞬間、叫ぶはず。  
しかしここで入ってきたやつは何もいわない、と言つことは一夏ではないだろう。

ならば誰だ？普通に考えると女子の侵入は不可。……いや、一人だけ入れるな。

「……シャルル？」

「ああっ……ゆ、優哉！？」

向こうにも俺に気づいたらしく、ピックリして体を隠す。

つて、やべえ。なんで普通に見てたんだよ。俺。

「ちょ、ちょっと待て！お前、どうして……」

すぐさま、シャルルを見ないように後ろを向く。

この間、「コンマ一秒。……うん、人間、やろりと選べばできるもんだね。

「え、えっと、一夏が用事があつて、今なら入れるかな。って思つたんだけど」「ああ、なるほどね。

一夏が用事で直ぐに来れないことがわかつて、

今のうちに入っちゃおうと、思つたんだが、そこには俺がいたと。

「迷惑だつた？……それなら上がるけど」

「いやいや、上がるなら俺が上がるよ。結構堪能したし」

「えつと、その僕と一緒にいや？」

俺が上がると発言したら、シャルルはそういつててきた。

「いや、そういうわけじゃないんだけどや」

「それにね、ちょっと大事な話もあるんだ」

「……わかった」

大切な話がある。シャルルの口から出た言葉。

それを聞いた瞬間、出ようとするのをやめる。

だが、直接見るのはやばいと思ったので、シャルルがいる反対を見ておく。

「その……前に言つてたこと、なんだけど」

「前つていうと……学園に残るつて話か？」

「そ、そう。それ。僕ね、もう少しだけここに留まつと思つ。

ここだつて思う居場所を見つけてないし

「そつか……」

ま、シャルルが前向きになれたんならいいか。

「…………」

「…………」

「…………」

無言の時間、それはとても長く長い時間だった。

それが何分あつただろうか、わからないが、

急に俺の後ろの方で誰かが動く気配がした。……といふが、絶対に

シャルルだけだ。

「ねえ、優哉」

いきなり俺の背中に、ひとり……とシャルルの手が触ってきた。

「しゃ、シャルル？ いきなり——」

そのままシャルルの白く手は、俺を後ろから抱きしめる。

背中にシャルルの華奢な体の感触が伝わってくる。

「優哉や一夏が、ここにいろつて言つてくれたから決めたことなんだよ？」

「そ、そつか……」

俺にとつては何でもないことだつたんだけどな。

ただ単に田の前で困つている人がいたから助けただけ。ただそれだけ。

「ねえ、優哉」

「ん、なんだ？」

「これから僕のことは、シャルロットって呼んでくれる？」  
シャルロット。

「これがお前の本当の……」

「そう、僕の名前。お母さんがつけてくれた、本当の名前」

「ああ、呼んでやるや。——シャルロット」

「ん」

嬉しそうにシャルロットは返事をした。

それはまるで子供のような無邪氣で、いつものような屈託のない笑顔で。

(……護りたいな。この笑顔を——)

シャルロットの笑顔を見て、思ったこと。

それは一種の俺の夢だった。

(違う、護りたいじゃない。

絶対に護るんだ。俺がこの笑顔を)

25話 事件の後（後書き）

……もしかしたら午後6時に  
もう一回更新するかも知れないです。

もうすぐ2巻の内容も終わりますし

## 26話 僕＝嫁！？

翌日の朝のS.H.R。シャルロットの姿が見当たらなかつた。  
まあ、同じような感じでラ・ウラもないのだが、あいつの場合には怪  
我だらうな。

「一夏、シャルルはどうしたんだ？」

「さあ？先に行つて食堂で言われたから、俺一人で来んだけど」「ああ、なるほどね。

それでシャルルが来てないと。  
どうしたんだろうか？

そんなことを思つていると、教室のドアが開き、山田先生が入つてくる。

「み、みなさん。おはようございます……」

何だか元気がないような気がする。

いや、氣がするじゃなくて、確實に元気はないな。

「今日はですね、転校生を紹介します。いや、転校生というか、もう自己紹介はすんでるといふか……」

頭を抱える山田先生を尻目にクラスは一気に騒がしくなる。  
先月には俺が転入してきて、今月も転入生が一人、既に入つてきて  
るんだからな。

そりやあ騒がしくなるよな。

(ん？……自己紹介は済んでいる？)

「それでは、入ってきてください」

「失礼します」

妙に聞き覚えのある声。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願ひします」  
ペコリと頭に頭を下げるは女子制服を着たシャルロット。  
丁寧に頭を下されたもんだから、ポカーンとしていた一同は頭を下げる。

『え？ デュノア君って女？』

『おかしいと思つた。男にしてはビジウム線が細いと思つてたのよね』

『あれ、織斑君つて同室だつたんだから気付いて無いわけ……』

『ちょっと待つて！！昨日つて確か、男子が大浴場使つたわよね！』

『？』

ザワザワザワッ！！教室が一斉に喧騒に包まれる。

——やばっ——俺は本能でそう思い逃げようとする。

ふと隣を見ると一夏も逃げ出そうとしていた。

だが時既に遅し、廊下側から蹴破られたかのような勢いでドアが開かれる。

入ってきたのは……。

「一夏あつ――！」

鈴だつた。しかも「」丁寧にエスアーマーを展開し終えている。

「死ね！！！」

両肩から放たれたフルパワーの衝撃弾。

それは一夏だけでなく、俺の目の前にもきた。

……確実に死んだな。そう思つて目を閉じる。

ズドビドビドビドビドオン！…

「ふーーっ、ふーーっ！！」

怒りのあまり、肩で息をしている鈴が目に入るつて、

——アレ、俺。生きているのか？

「…………」

間一髪だったのかはわからないが、

俺達と鈴の目の前に割つて入つてきたのは——なんとあのラウラだった。

その体には『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏つっていた。

……のだが、両肩に装備していた大型カノンが無い。

「た、助かった……。ありがとうな、ラウラ。

……それでも、お前のエス、もう直ったのか？」

「コアが辛うじて無事だつたからな、予備のパーティで組み直した

「へえ、そいつはすげーーーむぐつ！？」

その先を俺は言つことが出来なかつた。

何があつたのか説明すると、

いきなり、本当にいきなり、ラウラが俺の胸ぐらを掴んできたのだ。

そしてそのままワカラに引き寄せられ、……そのままキスをせられた。

(えつ！？ちよつと待つて、何がどうなってるんだ？Why?)

「お、お前は私の嫁にする！…」これは決定事項だ。異論は認めん！

！」

なにその強制的な告白。

そしてなんで俺が嫁なんだよ。婿じゃねえの？

「優哉……？」

「つ…？」

その声を聞いた瞬間、俺の体はビクッ、と震えた。

振り向くと、そこには既にＩＳを起動し終えた、香菜の姿があった。

「ちょ、待て。俺は悪くねえ！！俺は悪くねえんだ」

「どう考へてもアンタが悪いに決まつてんでしょうが…！」

ちよつと待て、俺の話を聞け！！

そう言いたいが、聞く耳を持たなぞうなので教室から逃げようとする。

だが、そこには――――

「ヒーヒー」

天使とも思えるほどの笑顔を浮かべたシャルロットさんがいた。

「あははは……」

「優哉つて他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしちやつたよ」

「いや、俺としては武器を展開させているお前にビックリなんだが……」

シャルロットは「コツと笑い、アーマーをページさせる。

そして現れた六十九口径パイルバンカー【グレースケール鱗殻】。

「は、はは、ははは……」

あつ、あの噂つて本当だつたんだな。

人間、限界を超えると笑うしかなくなるつて。

ドカアアアアアアアン！――！

その日のホームルームは、轟音と爆音、

そして絶え間ない衝撃で文字通り、学園が揺れたと言つ。

## 26話 僕＝嫁！？（後書き）

これにて2巻の内容が完全に終わりました。  
長かったです……。

いや、これからの方が長いですかね。

そしてこれからは作者が大好きな  
3巻の内容に入っていきます。

理由？

そりゃあ水着……、「ホン」「ホン」  
ラウラが可愛らしいじゃないですか？

いやあ、あの可愛さはたまりませんよね？…ね？

PV100000突破記念～続編その1～（前書き）

過去に投稿した10万突破記念の続編です。

～翌日～

「……で、なんでこうなったの？」

はい。現在、絶賛後悔中の黒月優哉です。

というのも、シャルの口から出たお願いのせいでのうなりました。そのお願いを俺なりに纏めたのが、これだ。

『買いたいものがあるんだけど、一人じゃ買いに行けないんだよ。だから一緒に買いにいってくれない？』

ここまでなら、別に来てあげてもいい。と思つよね。

でも、ここからが問題。

『でも、その商品は女の子一人一緒じゃないともらえないんだよ。だから優哉は、女装して一緒に買い物に行こう』

……なあ、おかしくね？

だってさ、女の子一人ならウチの学校ならいくらでもいるじやん。なんで俺を誘うの？しかも男である俺を女装させてまで。

でも、シャルの願いだから叶えたいな、と思つてしまい。

俺は、俺なりに可愛いと思うような女物の服を「彼女へのプレゼントです」と言つて買い、

その服を持つて学院に一回、戻り。自室で着替えてからもう一回街に出てきた。というわけだ。

「それにしてもシャル、遅いな」

とある街中にある噴水の前で携帯を弄りながらシャルが来るのを待つ俺。

（……あちこちから視線を感じるから、ここにじっとしてるのは嫌なんだけどな）

そう、なぜか知らないが、あちらこちらから視線を感じるのだ。  
なんかこの服におかしい点もあるのか？

一応、店員さんがオススメだつて言つてくれた服なんだけどな。と、  
自分が今、着ている服を見ながら言つ。

ちなみに今の服は……、

「——遅くなつてごめん」

自分の着ている服の説明をしていたら、シャルが来たようだつた。

「別に良いけどさ、なんで遅れたの？」

前日にできる限り女の子みたいな口調で話して、  
とシャルに言われていたので気をつけながら話す。

「ちょっとね（つけてきていたみんなを振り払つために回り道して  
いた、なんて言えない）」

「……ワケありつてことかな。

話したくないなら話さなくてもいいか。

「ふーん。まあ、良いけど」

「ホッ……それにしても優哉、その服どうしたの？」

そして話を再び戻されたくないからか、急に話を変えるシャル。

「普通に店で買ったんだけど。どこか変？」

「別に変じやないよ。凄く似合ってる」

「あ、ありがとう／＼（似合つてるって言われても嬉しくねえ）」

頬を赤くし、少し顔を背けながら言つてみる。

べ、べつに大した意味なんてないんだからね／＼

ただ、女の子の振りをするんだつたら

可愛い仕草をしたほうが良いと思つたからなんだから、勘違이しないでよ／＼

「つ／＼／＼……で、ビルに行く？」

「はあーーっ！？」

どこに行く？と言つだしたシャルに思いつきつゝ。

「お前が欲しい物があるつて言つたから、女装までしたんだけど」

「あはは……」めん

苦笑いをしてから謝るシャル。だが、俺にはその態度だけでビリ二うことかわかった。

つまり、こいつは俺のが女装したひびつななるか見たかつただけで、目的はなかつたと。

「……………おれ、もういい。好きで元気くれ

## 27話 慌ただしい朝

「ゴメンね、わざわざ手伝つてもらひつて」

「別に良こさ。他にやることなかつたし」

赤い夕日が差し込む放課後の廊下、優哉とシャルロットは学校行事である

臨海学校の詳細について書かれているプリントを持って並んで歩いていた。

「でも、良かつたの？今日は香菜達と街に行く予定があつたんじやないの？」

「そんなのいって。大体、シャルロットがいねえと、行つても意味ねえしな」

「えつ？」

「ま、何をするにしても好きな女の子と一緒にいってことだよ」

そう言つた優哉の頬は赤く染まつていた。

それは夕日のせいだけではなかつた。

「優哉……」

「シャルロット……」

ふたりしかいない廊下で見つめ合つて優哉とシャルロット。

そこに言葉はいらなかつた。

そしてオレンジ色の光景の中、ふたりの影は徐々に重なつて――

「――あ、れ？」

ぼーっとした頭で現状を確認する。

場所はIS学園一年生寮の皿室。間違つても廊下じゃない。

そして時刻は夕日が差し込むよつた時間でもなく、早朝六時半だ。

「…………」

シャルロットはまだはつきりしない意識のままだつたが、一回ほどまばたきをしたといひで、やつと状況を理解した。

「夢……」

はあああ――と、深く深いため息を吐く。

その深さは深海二万マイルを遙かに超えそうだ。

(ああ、せめてもう十秒くらい見れれば……)

夢の残骸に思いを馳せ、その名残を惜しむ。

目が覚めると急速に失われていく夢の内容も、

その執着からかなかなか消えずに手元に残つていた。

それもお気に入りのビデオを見るよつた感じで、もう一度、頭の中で再生をする。

(が、学校の廊下で、なんて……)

胸に手を当てるど、ドキドキと早鐘を打つているのがわかる。

(僕は何を考へてるんだううね)

先月の学年別対抗戦が終わった後、本来の性別に変わったシャルロットは、

今はもう、一夏とは違つ部屋になつてゐる。

「あれ?」

ふと隣のベッドを見るが、ルームメイトの姿がなかつた。

それも、起きてどこかに行つた。というより、使つた形跡すらなかつた。

「…………まあ、いいや」

それよりも今は夢の続きである。

今すぐ眠れば夢の続きを見れるかも知れない。

そんな淡い想いと期待を抱いて、シャルロットはまた眠りにつこうとまぶたを閉じじる。

チュンチュン……

「うん……」

スズメの鳴き声を聞き、俺は目を覚ます。

「…………はあ～～、よく寝た」

背伸びをして、ベッドから起き上がりしたときわ……

「ん……」

この部屋にいるはずのない、自分以外の声が聞こえた。  
そして声の高さから察するに、男の物ではない。といつか、逆に男  
だったら怖い。

慎重に布団に手をかけ——ガバッ！——と一気にめぐる。そこには

「ラウラー？ なんでこんなところに……」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒその人がいた。  
転校初日に一夏の頬を張ろうとして、その一撃を止めたのが始まり。  
その後色々と……本当に色々とありましたな。

「……で、何で裸なんだよ」

そう、なんで俺が驚いてるのかとこうと、ラウラが裸で寝てているこ  
だ。

まあ、俺のベッドと一緒に寝ていたといつも驚くけどね。  
唯一、身につけている物を上げるとすれば、

左田を覆う眼帯と待機状態のエヒである、右脚のレッグバンドのみ  
だ。

「ん……、何だもう朝か。……優哉、おはよう」

慌てることなく、極めて普通にラウラは朝の挨拶をしてくる。  
そんなラウラに俺は咳払いを一つし、落ち着いてから朝の挨拶をす  
る。

「……おはよー、ラウフ。

で、何で俺のベッドで寝てるのかな？裸で」

「夫婦とは何も包み隠さぬものだと聞いたぞ」

「そりゃそうかも知れないけどな。俺とお前は第一、夫婦じゃねえだろ！？」

現在、色々あつて俺の頭は混乱中だった。

なので、自分自身のテンションすらわかつていなかつた。

「日本ではこういう起こし方が一般的だと聞いたぞ。将来結ばれる者同士の定番だと」

「……そんな間違った知識をお前に教えたのはビートの馬鹿野郎だー

ーっー！」

ほとんどやけくそ気味になりながら俺は叫んだ。

「……」の時間だと、優哉はまだ部屋にいるわよね  
優哉の部屋の前、一人の少女……神崎香菜が誰にも聞かれないよう  
な小さく呟く。

そしてノックをしようとしたとき、中で繰り広げているであらう会  
話が聞こえる。

(あれ、誰かいるのかな?)

優哉と話している相手が気になり、扉に耳をあて中の会話を聞こう  
とする。

『はあ、はあ……。さすがは私の嫁だな』

『はあ……ふう……。だから誰が嫁だ。』

俺は男だつての、今までわかつたる?』

この会話を聞いた瞬間、

香菜はガチャツ!!とドアが吹き飛ばされるかと思つぐらに勢いよ  
く開ける。

「な、なにやつてんのよ!! アンタ達は―――っ!!」

中の光景を見て絶句する香菜。だが、絶句するのも無理はない。  
なんせ……汗だくなつた全裸のラウラと、

汗だくになりながらラウラをベットの上に押さえつけている優哉の  
姿があるからだ。

この構図的に導き出される答えは一つしかない。

それは――――

「優哉あ―――つ――!」

真後ろに阿修羅でもいるのではないかと、  
思つぐらじ真つ黒な氣を纏つてISHを部分展開する香菜。  
部分展開したほつの腕には【紅】――刀身全てが真つ赤な剣を持つ  
ており、

それを優哉に向かつて振り下ろす。

「ちょ！？待て、これは事故なんだって――！」

ラウラの上から過ぎ、ISHを起動させて香菜の攻撃を受け止める優  
哉。

「うぬやこ、うぬやこ、うぬや―――。」

言ひ訳してなごで……、一回、死ね――――――――。

「あ―――つ、もつ、不幸だあ――――――――――!」

ISH学園の学生寮全体に優哉の悲鳴と、  
とてつもない量の物が破壊される破壊音が響きわたる。

## 27話 慌ただしい朝（後書き）

やつと3巻に入つたぜ―――つ――

ブログやつてますので、

「こちらも見てくれると嬉しいな……つて

翔はあなたを上目遣いで見ながら言ってみたり。

<http://nyann160.blog.fc2.com/>

## 28話 レイン・メーカー（前書き）

良いサブタイが思いつかなかつたので、  
原作のサブタイトルをパク……インスピアイアしましたwww

「し、死んだかと思った……」

「まったくだ、よく死ななかつたな。流石は私の嫁だ」

「……いや、元はといえばお前のせいだから」

あの地獄を乗り切った俺と、ラウラと香菜は食堂で朝食をとつていた。

といつも、よく俺つて生きてるよな。リアルに死んだかと思つたよ。

まあ、助けてくれたのはラウラだと想つたぞ。

「……ラウラ、サンキューな」

「うん、何がだ？」

心底、何の話をしているのかわからないのか。首をかしげながら言うラウラ。

やべえ、何かカワイイんですけど。なんていうか仕草が……？  
つてか、アレだよな。IS学園の女子ってカワイイ娘ばっかりだよね。

今度、一夏と話してみるか。どんな女子が好みかっていう話題で。

「いや、アレだよ。

今まで俺がピンチのときに助けてくれたこと「に」だよ

「ああ、気にするな。

嫁の危機は夫が助けるものだらう?」

「…………」

なんかその台詞には納得できるんだけど、納得できないんだよな。  
俺が何を言つてるかわからないだろうが、俺の立場から考えてみるとわかるはずだ。

「…………」

誰にも聞かれないよつて呟く。

シャルロットに挨拶をしてから、俺は食堂の時計に目を向ける。今からではかなり急いで食べなければ授業に間に合わないな。シャルロットは空いていた俺の隣の席に座る。

「随分遅かったみたいだけど、何があったのか？」

「う、うん。ちょっと……その、寝坊を……」

「え、真面目なシャルロットでも寝坊か。

「シャルロットでも寝坊するんだな」

「う、うん。まあ、ね……。その、一度寝しちゃって……」

「へえ～」

今は食べるのに必死なのか、微妙に歯切れの悪い言葉で受け答えをする。

(……いや、でもなんか違う気がするんだよな～)  
男装のときみたいに何かボロを出さないかなと思いながら、じーーっとシャルロットを見つめてみる。

「ゆ、優哉? ずっと僕のほうを見てる気がするんだけど、ね、寝癖でもついてる?」

「い、いや、別にねえけど。ただつい最近まで男子の制服だったから、

女子の制服を着ているシャルロットはなんか、新鮮だな～って思つてや

つてや」

「し、新鮮?」

「お、おひ、可愛いと思つ?」

褒められ慣れていないのか、シャルロットは俺の言葉に顔を真っ赤にする。

「……と、とか言つても、夢じや男子の制服を着せたくせに」「んっ、夢? なんの話だ?」

とか言いつつ、一応は聞こえてたんだよね。

たしか夢じゃ男子の制服を着せたくせに……だつけ?

……つーことは、シャルロットは俺の夢を見てくれたつてことなんか?

「な、なんでもない。なんでもないよ! ?」

ぶんぶんと突き出した手を振つて否定すると、シャルロットは再び朝食に手をつける。

(あーー、シャルロットってカワイイな)

そんな仕草が可愛くて俺は無意識に微笑んでしまう。

「いでえつーー! 」

いきなり足に踵落としを、頬は強く抓られた。

「へえ、優哉が本当はそんな性格だつたなんてね」

「お前は私の嫁だらう。私のことも褒めるがいい」  
ちなみに最初に踵落としをしてきたのは香菜だ。  
そして頬を抓ってきたのはラウラだ。

「えつとな……」

いきなり褒めろって言われてもな、良い褒め言葉が……。

——よし、これでいこう。

「二人とも大人しくしてたらカワイイよね」

ドカッ!!

一人同時に足を踏まれる。

「ちょ、かなり痛い。」

「「一緒にするな！！」」

うわあ、超睨まれるので超怖いんですけど。

キーンゴーンカーンゴーン。

そんなことをしていると、ふと予鈴が鳴り響いた。

「ーんっ？ 予鈴？」

「うわあっ！－やべえ。今の予鈴だぞ、さつさと向かわないと…－…俺が急いでいる理由は一つ。

今日のSHRにはあの有名な鬼教官……織斑千冬が来るからである。山田先生だったら、こんなに急がないんだけどな。そんなことを考えながら、慌てて立ち上がったがテーブルには誰もついていなかつた。

それどころか他のみんなは既に食堂を飛び出でていた。

「ちょ、お前ら！－

それは俺だけに死ねつてつってんのか！－！」

全力でダッシュするが、追いこすどころか追いつけないとすらできなかつた。

……お前ら、どんだけ体力あるんだよ。  
「優哉、私はまだ死にたくないんだよ」

「右に同じだ」

「「めんね、優哉」

この薄情者共が―――っ――！

どうせ死ぬんなら、みんなで死のうぜ。

あつ、ちなみに逆の立場だったら、答えはノーだけどな。

全力でダッシュしていくうちに生徒玄関へと到着する。そしてすぐさま、現在、履いている外履きから内履きに履き替える。ふと他の女子達の様子を見るが、誰もいなかつた。……本当に薄情者共だな。

「ほりつ、優哉。早く

と、思ったのだが、シャルロットだけは俺を待つていてくれたみたいだ。

「シャルロット、お前ってやつは本当に……

「そんなの後で良いから早く

思わぬ優しさに泣きそうになつてている俺を強引に引き寄せるシャルロット。

……えつ？ちよつと待つて――！

なんで俺を抱き寄せてるんだ……シャルロットさん？

「お、おい。いきなり何を……」

「優哉、飛ぶよ？」

「はつ？」

何を言つてゐのかわからなかつたため、聞き返そうとした瞬間、シャルロットの脚と背中に光の輪が広がり、収束して弾ける。

シャルロットの専用機【ラファール・リヴィアイヴ・カスタム?】の部分展開。

脚のスラスターと背部推進ウイングだけを実体化させた状態だ。

「——おわっ!?

抱き寄せた状態だと動かしにくいとシャルロットは思ったのか、俺をいわゆる……お、お姫様抱っこしてきた。

運んでもらつてて、グチグチと文句を言える立場じゃないのはわかっているんだけど……うん、これは無いと思うんだよ。だってさ、男が女にお姫様抱っこされてるんだぜ?

なんかおかしくね? 反対ならわかるけど。

そんなことを考えていたら、あつといつ間に俺達の教室がある3階に到着する。

「到着っ!」

到着したと同時に俺はシャルロットの腕から降りる。

「おうっ、『苦労なことだ』

そんな俺の行動と同時に聞こえた声は、史上最強ともいえる人の声だった。

「う、嘘……」

「あ、あ……」

現在、俺の前に立つてるのは鬼教官だった。

ふと隣にいるシャルロットを見ると今まで見たことのない青ざめ方をしていた。

そして後ろからノンノンとやってきたラウラと篝はそれを尻目に教室に入つていった。

——お前らも一緒に怒られ……殺されや。

「学園内でI・Sを許可なく使用する」とは禁止されている。  
言つてゐる意味がわかるな?デュノア」

「は、はい……すみません……」

ちなみに真面目なシャルロットが違反をしてかしたのでクラス一同驚いている。

「罰としてデュノアと黒川は放課後、教室を掃除しておけ」

「はい……」

そして俺らは意氣消沈し着席する、それと同時に丁度チャイムが鳴りSHRとなつた。

「それでは今日は通常授業の日だつたな。

I・S学園に通つてゐるにしろ諸君らは世間では高校生だ。  
ちなみに赤点など出してろ……分かつてゐるだらう?」

千冬さんの言葉に全員で頷く。

I・S学園でもちやんと普通の時間割があり、そして皆が嫌いな期末テストなどもある。

赤点なんかをとると、普通に補習行きだ。せつかくの夏休みがなくなるつづ一わけだ。

「それから来週からだが校外実習期間に入る、

分かっているだろ?が忘れ物はするなよ。三日間とはいえ学園を離れるのだからな」

校外実習……確か、海に行くらしいから臨海学習かな?

……部屋に水着とかあつたかな?なかつたら買いにいかねえと。

先生の話を聞きながら、そんなくだらないことを考えていた。



## 28話 レイン・メーカー（後書き）

現在、20万PV突破記念の話を制作中です。  
ですが、完成するのはいつになりますかね。はははっ。

完成したときには、50万いってたりしてwww

……自分の作品が50万いくとかねえな。

## 29話 一人きりの掃除

放課後、夕日が射す教室で俺とシャルロットは掃除をやらされたいた。

他の生徒は誰一人としていない……と俺は思つ。

普段I.S学園は専属の清掃業者が隅々に亘つてピカピカにしている。学舎の掃除を生徒にやらせないというのは如何なものかと一時期保護者の反発があつたらしい。

けど、『わずかな時間もI.S教育に回した方がいい』といふことで決着がついたとか。  
なので、教室掃除というのは生徒への軽い処分として使われることになつたらしい。

で、それを今まさに体感しているわけであるのだが——

「いやあ、ホント掃除って楽しいよな」

「そう? なんか優哉つて変わってるね」

「ん、そつか? つてか、こういうのは楽しんだもん勝ちなんだよ。だからなんでも楽しんでやってたらしいんだぜ」

シャルロットにそんなことを言つてから、口笛を吹く。

ま、きちんと床の『△』を集め、そして『△』箱にいれるなど の作業も してゐるけど。

「そりかな。……ん、んん~！」

「無理しなくていいぞ。机は俺が運んどくから」というかその机、岸里さんの『フルアーマー机』じゃね？ 全ての教科書などがなかには詰められており、完全な防御力を持つているという。

……ま、こんなことをしたらダメなんだけどな。

「ぐ、平気だよ。これでも専用機持ちだし、体力は人並みに——」そこまで言つた所で、シャルロットは机の重量に耐えきれずに足を滑らせた。

俺はすぐにシャルロットの後ろに回り込み、シャルロットの華奢な身体を支える。

「はあ、お前な。そつきの言葉に説得力がねえぞ。  
まあ、いいや。ここは俺がやつとくから」

「う、うん……。あ、ありがとう……」

シャルロットは何故か顔を赤くさせ、視線を宙に彷徨わせる。  
——あれ、いきなり視線を泳がせてどうしたんだ？  
不意にそつ思つが、すぐに原因に気づく。

「あ、悪い」

「あ……」

原因に気づいた俺はすぐにシャルロットから離れる。

が、シャルロットは残念そうな声をあげた。

「どうかしたのか？」

「い、いや。何でもないよ」

両手を振りながらシャルロットは俺から視線をそらす。  
——ホント、ビ�ったんだ？ シャルロットのやつ。

「わうこやわあ」

つこわしき聞きたかつたことを思い出したから聞いておいつかな。  
と思い、机を運びながら声をかけたのだが。

「わひやい！？」

シャルロットが変な声を出しながら焦っていたので、それに驚く。  
「どした、いきなり変な声出して？」

「な、何でもない。ちょっと考え事してて。それよりも優哉の方こそ何か用？」

上手い具合に話題をすり替えられた気がするが、  
気のせいだと思い、俺は疑問を口にする。

「聞きたかったんだけどさ、前に『一人きりの時はシャルロットって呼んで』って言つてたじゃん。

それで、てっきり俺はまだしばらく男のフリをしてんのかと思つてたんだが……どうなんだ？」

「え、え～っと……それは、ね

いつもはハキハキとした受け答えをしてるのに、今のシャルロットは返答に困っていた。

——言いにくいのかな？

「その、ちゃんと女の子として……優哉に見て欲しくて……」

恥ずかしいのか、シャルロットは顔を赤らめたまま消え入りそうな声で言つてきた。

女の子として見て欲しい、か。

「ん？俺は普通にシャルロットのこと女子として見てるけどな」

「え、それって……」

「だつて男じゃねえし」

「…………」

俺がそういうと、教室内の空気が凍りついた気がした。  
(あれっ、俺、やつちやつた？)

「あ、にしてもシャルルからシャルロットか……。  
何か普通になつちましたし、別の呼び名でも考えようか。  
空気が凍つたままではマズイ。話をすり替えよう。  
と思い、手頃に思いついたことを言つ。

「えつ、いいの？」

だが、予想以上にシャルロットは食いついてきた。

「お前が良かつたらの話だけどな」

「うん、全然大丈夫。お願ひしたいな！」

ぶんぶんと勢い良く頷くシャルロットに気圧されながら、俺は顎に手を当てて考える。

これから呼ぶんだから、呼びやすい呼び名がいいよな。

「そうだな……」

シャルロットだから……。

「シャルなんてのはビリだ？ 呼びやすいし親しみやすこと頃つる

だが

「シャル。……うん、いいよ！ すぐ気に入ったー。」

「そ、そろが。偉く氣に入ってくれたみたいだけど」

「そうだね。シャル、シャルか……。ウフフフ」

ご機嫌な様子で掃除を終わらしていくシャルを見ながら、俺は机を

運んでいく。

……どうか、急にビリしたんだ？

わざわざいつもやる氣になってくれたからありがたいけど。

……つと、もうだ。

あと一つ、シャルに頼まないといけないことがあったんだ。

「シャル、お願いしたいことがあるんだが」

「え、何かな？」

未だに幸せに浸つているシャルの手をがしつと掴み、そして表情を

真面目モードに変える。

……本気こじれはマジでいかないとな。

「ちやんちゅう  
え？」

### 30話 テートー？

「うんうん、晴れてよかつたな」

週末の日曜日。天気は懸念していた雨雲一つない快晴。来週からいよいよ臨海学校が始まるので準備のために、街に繰り出しているんだが、俺の隣にもう一人いる。

「…………

シャルと一緒に買い物に行こうとしているわけだけど、なぜか不機嫌そうな顔だつた。

……なんか悪いことしたのか？俺。

「…………僕はね夢が碎け散る音を聞いたよ」

まあ、さつきからシャルはこんな感じなんだよな。

ホント、なんでこんな崖から突き落とされた感じなんだろうか？  
ズーーんというよりかは、どよよーんという効果音がつつきそうなオーラをまとっていた。

あ、ちなみにシャルの格好は、半袖のホワイト・ブラウス。  
そしてその中にはライトグレーのタンクトップを着ている。  
ふわりとしたティアードスカートはその短さもあって、健康的な脚線美を十二分に演出していた。

——うん、なんというか。……普通に可愛いな。

これで女の子らしさに自信がない。なんて言つても説得力がないく

シャルは急に止まり背後から何かどす黒いオーラを出したので、それを感じた俺は思わず変な声を出してしまった。

——なんか最近、どす黒いオーラを感じることがかなり多くなってきたな。

俺、一夏の影響でも受けたか？

「乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死ぬといいよ」  
ふんつと鼻を鳴らしテクテクと俺の横を通り過ぎて歩いていく。  
やつぱ今日はものすごい不機嫌なのか？

……いや、あれは確実に不機嫌だよな。

でもま、確かに女の子の純情を弄ぶ男は死ぬべきだよな。…………一夏とか。

「そうだな。……女の子の純情を弄ぶやつは俺に殺されるべきだな」「やめといたほうがいいよ。

自分で自分を殺すなんて、絵面的にもなんかキツイものがある

し

「ん？ 何か言つたか

「…………別に」

いいや、絶対になんか言つてただる。

一夏なら見逃すかもしれないが、俺は見逃さねえぞ。  
つてか、そんな露骨に不機嫌オーラ出さないでくれよ。

「はあ……。どうせ、どうせね……。やうこつことだと思つたよ。一夏も似たようなことをやつてたしな。……なんか男つて、はあ

（……）

またしても深海一万マイルを超えたかのような深いため息をつかれる。

「そ、そだ!! 何かご馳走してやるからさ、元気になれって。なつ!!

笑わないと、シャルの可愛い顔が台無しだぞー!!」

「か、かわい!! 。」「ほんっ。な、何を!! 馳走してくれ

るの?」

一瞬だけ顔が真っ赤に染まるが、すぐに立て直したつもりなのか、不機嫌そうな顔で話の続きをしてくれる。

——でもな、まだ頬が赤いぞ。

「そりだなーー。……噂の駅前のパフェとかどうだ?」

内心、ほくそ笑む俺。

だが、本当に内心だけだ。顔には一切、出さない。

つてか、出した瞬間、俺は殺される。

「パフェだけ?」

子犬が何かをねだるようにききと皿を輝かせながら俺を見てきた。

——やめろ、何かが抑えられなくなるからそんな皿はやめてくれ。

「……とにかくシャルが食べたい物ご馳走しますよ?」

「ん。あと、はい……」

手を差し伸べられる。

ああ、なるほどな。それで良いのか。

シャルの要望がわかつたのでシャルの綺麗な手を握る。  
勿論、握手をして欲しい。などとは思わない。

「……ほら、行こうぜ」

満面の笑みを浮かべてシャルの手を引っ張る俺。  
だが、引っ張るといつても全力ではない。  
「う、うん……」

「優哉、水着売り場はこっち

「ち、ちょっと待て！？何で女人用の水着売り場に連れてくるん

だよ！！」

駅前にあるショッピングモールに到着。週末といふこともあってか賑わっている。

そして俺たちは一階の水着売り場にいるわけなんだが、なぜかシャルは俺を女人用の水着売り場まで引っ張つていった。自分の水着を買ってから集合と思っていたのがなんだ予想外の展開だ。

「優哉は……その……僕の水着見たくない？」

「そ、そりゃあ……見たいか見たくないかって聞かれると見たいが……」

そう答えるとシャルはパアッと顔を明るくして俺をずるずると引っ張りながらレディース水着売り場の最深部へと向かう。

「そうだよね。普通はみたいよね……」

「ああ、まあな。仮にも男だしな。

女の子が水着をきてくれるんだ。そりゃあ見ないとな

「あ、うん。じゃあこっち……」

未だに顔を赤くしたままシャルは俺の手を引っ張つていく。シャルにそのまま試着室へと引きずり込まれて……。

「あの～、シャル。試着室つて女性のみ使用可能じゃ……」

「ほ、ほら。水着つて実際に着替えてみないと分からぬし……ね

いや、ね？じゃなくてだな。

「な、なら、俺は外で待つて

「だ、駄目！すぐに着替えるから待つて！」

強い口調で言うなり、いきなり田の前で上の服を脱ぎ出すシャル。  
俺はギヨッとして凄い速さで方向転換してシャルに背を向ける。  
狭い試着室で美少女と一人きり。しかも、後ろからは服を脱ぐ衣擦  
れの音と、

女子特有の甘い香りが流れてくるのだから始末が悪い。

（な、何故こんなことになったんだ！？）

（ううつ、勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう……）  
と言つのも、彼女がこんなことをした理由は、  
自分と優哉を尾行してきている追跡チーム（香菜・ラウフ）に気付  
いたからだ。

何故か、今は自分達から少し離れたところにいる。

（ん~、二人とも、諦めて帰つてくれないかなあ～……）  
優哉がどう思つてようが、シャルにとつては意中の相手と一人きり  
で外出。

つまりはデートなので、邪魔はされたくなかった。

（で、でも、同じ個室で着替えるのついでやりますきたかな?  
……へ、変な子とかつて思われてないよね！？）

やつてから不安になる複雑な乙女心。

その行動力は見事な物だが、少々暴走気味になる傾向がある。

不安を胸に抱きながら背後を窺うと、

優哉はシャルに背を向けて意味もなく視線を試着室の天井に彷徨わせていた。

その真っ赤になつた耳と頸から、どれだけ困つてゐるのかが分かる。

(優哉も困つてゐみたいだし……)

だが、同時に嬉しくもある。

(赤くなつてゐるって事は、僕のこと女の子として見てくれてるってことだよね)

そう思ふと、自然と頬が緩んでしまつシャルだった。意を固め、下着も脱いで水着を着る。

「い、いいよ

「了解……」

優哉が振り返り、水着姿になつたシャルを見た。

その視線を感じてシャルは落ち着きなさそうにもじもじしながら、優哉の感想を今か今かと待ちわびる。

そのワンピースとセパレートの中間のような水着を見て、照れに照れていた優哉は引きつつてはいるが笑顔を浮かべた。

「い、良いんじゃねえか?似合つてると思ひぜ  
決してその場しのぎで言つた訳ではない。

その事が伝わったのか、シャルは嬉しそうな表情を浮かべる。

「そ、そう?だったらこれにするね」

「そりや良かつた。んじゃ、俺はそつ言ひことで」

シャルに呼び止められる前に優哉は試着室から出ようとしたドアを開いた。

「あつ……」

「えええ？」

「何をしてるんだお前は……」

そこにはキヨトンとした表情をしてる山田先生に呆れ顔の織斑千冬  
がいた。

### 31話 姉弟水入らす

「水着を買いにですか。でも駄目ですよ、

一人で試着室に入るのは。教育的にも感心できません」

「す、すみませんでした……」

山田先生に返す言葉もなく、シャルはペニペニと頭を下げている。苦笑いを浮かべる俺の隣りには千冬さんがあり、そして何故か一夏と篠も一緒にいた。

いや、普通に考えたらこいつらも水着を買いにきたってところかな。

「そういや、千冬さんと山田先生は何の買い物に?」

別に学園でもないので、俺は普通に千冬さんに訊ねる。

無言で手にしていた水着を千冬さんは示す。

どうやら教師陣も土壇場で準備するらしい。

……普通に考えたら、準備する時間もなかつた。つてところかな。

「そろそろ出でてきたらどうだ?」

千冬さんは何もいらない物陰に向かつて話しかけた。

「そ、そろそろ出でていこうと思ってたのよ

「た、タイミングを計つてたんですねわ」

「……いや、普通に嘘でしょ。それは」

はずだったのだが、セシリ亞、鈴と香菜の三人が物陰から出てきた。

——こいつら、もしかして一夏と篠を追つてきていたのか?

つてか、またしてもいつものメンバーが揃つたな。……いや、ラウラがないな。

「あ、そつ言えば、私ちょっと買い忘れた物があるので行って来ます。

場所が分からぬので鳳さん、オルコットさん、ついてきて下さい。あと、デュノアさんに篠ノ之さんと神崎さんも」

そう言って、山田先生は有無を言わせずに五人を連れて何処かへと行ってしまった。

まあ、香菜のやつはこの行動の意味を知つてついて行つたみたいだけだ。

後に残された俺と一夏、千冬さんの間に変な沈黙が数秒流れる。

「ふう、山田先生は余計な気を遣つ

「ですね」

「え？」

「若干一名分かつてないのがいるが……まあいい。一夏、優哉

「何すか、千冬さん？」

「な、何ですか織斑先生？」

何時も通りに返答する俺だが、

一夏は久しぶりに名前を呼ばれたと言つこともあり、ギクシャクとした反応を返していた。

その時の一夏の表情がおかしかったので、

千冬は苦笑いし俺は必死で噴き出すのを堪えていた。

「今は就業中ではないから名前でいい。私達はこの場では唯の姉弟だろ?」

姉弟水入らずと云つ」とらしい。姉弟じゃない俺がいるんだけどな。弟みたいなやつってことで良いのかな?

「で、一夏、夜明。どっちの水着が良いと思つ?」

そう言って千冬さんは俺達にハンガーにかけられた水着を一つ見せた。

一つはセクシーな黒い水着、もう一つは機能性を重視した白い水着。どちらもジギタリータイプのため、露出度はそれなりに高い。

(普通に黒だな)

俺はそう思つたのだが、一夏は――

「……白かな」といつた。

いや、なんでも、千冬さんには黒が似合つて……、  
ああ、そういうことか。

「黒だろ」

真つ二つに別れる俺達の意見。

俺は千冬に言い寄つてくる能なしの男共が、  
どうこう風に千冬にぶつ飛ばされるのかを想像して唇を歪めた。  
勿論、面白そうだな。と思つてだ。

千冬さんは苦笑いを含めながら答えを返す。

「黒の方か」  
「いや、白の」

「諦めろよ一夏。

お前が最初に注視してたのは黒の方だつて、普通にわかるぞ」「お前は気に入つた方を注意深く見る傾向があるからな、すぐ分か

る」

俺と千冬さんに簡単に見抜かれ、少しだけ一夏は落ち込む。

「俺つて…分かり易い男なのかな……」

「ま、そうだろうな。

自分で言うのも何だけど、俺よりはわかりやすい男だと思つぜ」

一夏の落ち込み具合に笑つ俺。

なのだが、二人はそんな俺を見て呆れていた。

「どうしたんだ? 一人とも」

「……いや、なに。」

デュノア達が報われないな。と思つてな

ん、シャルがどうかしたのか? つーか、達つてどうこうじだ?

「まったく弟が余計な心配をするな。

私がその辺りにいる程度の男になびくと思うか?」

「まったく思いませんね。思い浮かぶのは、

千冬さんがその口説いてきた男をボコボコにしてる様子しか……」

ボコッ

「いてつ! ?

「お前は黙つてろ」

つい本心を言つてしまつた。

でも、仕方ないじゃないか。……口に出てしまつたんだから。

「い、いや。見えないけど……。でも千冬姉、彼氏とか作らねえのか？」

そういう話、一回も聞いたことないけど

「手のかかる弟達が自立したらな。考える弟達つて……。

俺も手のかかる弟だと思われてるのか。

「で、私にいづのはいいが、お前ひまぢうなんだ？」

「へつ、俺達？」

「何が？」

「何が？……つてお前は自分で振つておいて、自分は答えないつもりか？」

「何がも何も、お前らは彼女を作らないのか？」

幸い学園内には腐るほど女はいるし、よりどりみどりだら  
確かに、可愛い女は沢山いるけどや。

「そうだな……。優哉にはリカラなんてどうだ？  
色々と問題はあるが、あれで一途なやつだぞ。姿勢だつて悪くはあ  
るまこ」

「まあ、確かにそうだけど……」

なんで俺ばっかりに言つてくれるんだよ。

先に一夏に言つてくれよ。仮にも実の弟だろ？

「それに、キスした仲だろ？」

「……まあ、確かにキスはしたし、ラウラは可愛いけども、俺がそういうと千冬さんは微妙に笑っていた。

「あー、はいはい。わかりましたよ。

変な心配はしない。これでいいだろ?」

次に標的になるのは自分だ。

と一夏は直感で思ったのか、直ぐに話をやめようとする。

「ああ、それでいい」

最後にニヤリとした笑みを浮かべてから、千冬さんはレジへと向かつていく。

## 32話 臨海学校、開始！！

「海っ！！見えたあつ！！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声をあげる。  
臨海学校初日。海にふさわしいほどの快晴だ。太陽に光が海に反射して輝いている。

それを見て、更にテンションをあげる女子達。

そんな中、俺は.....

「.....はあ、ついにこの日が来てしまったか  
軽く憂鬱モードに入っていた。

別に海が嫌いなわけではないし、臨海学校が嫌いなわけでもない。  
だが、俺は気分がのらなかつた。

「優哉、なんかテンションが低いけど、どうしたの？」

俺と違つてテンションが高いシャル。

何故、こいつのテンションが高いのかは全くわかる。理由はアレだ。

左手首に着けているブレスレット.....まあ、簡単に説明すると俺がシャルに買ったものだ。

何故か知らないが、それを買って渡した瞬間、テンションがあがつたんだよな。

ホント、なんで上がつたのかは知らないけど。

「.....いや、別になんでもねえよ

「？」

隣に座っているシャルから顔を逸らし、外の景色を見る。

それにして、海か。

……何も起こらないと信じてテンションあげるか。

「優哉さんは海が嫌いなんですか？」

通路を挟んで向こう側に座っているセシリアが俺に質問してきた。

ああ、やっぱりテンションが低かつたらどう思うよな。

「いや、別に嫌いとかではないぞ。

ただ単にみんなのテンションについていけなくて……って、ラウラ？

「…………」

セシリアの隣でずっと黙り込んでいるラウラ。

そういうえば今日、一言も話してないな。

顔色が悪いわけじゃないから体調不良ってわけじゃないみたいだが、さつきからなぜか周囲を警戒するようにキョロキョロと見ていく。

「ラウラ？ 大丈夫か……？ もしかしてバスに酔ったのか」  
話しかけてもまったく反応がない。

「おい、ラウラ。おーい

俺は席を立ち上がり彼女の顔を覗き込む。

「！？ なつ、なんつ……なんだつーち、近いぞ！ 馬鹿者ー！」

「ぬあつ」

鼻を思いつきり押し返されて、変な声を上げながら退却する。  
それからワウカラは顔を赤くしながら、息を荒くしていた。……風邪  
か？

「わろそろ着くぞ。全員ちゃんと席に座れ」  
千冬さんの言葉で全員がさつとそれに従う。  
その言葉通りすぐに旅館に到着し、  
四台のバスからH学園の一年生がぞろぞろと出てきてそして整列  
した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花田荘だ。  
全員、従業員の仕事を増やさないよう注意しない  
」「よろしくお願ひします」  
「はい、じゅうじゅう。今年の一年生も元気があつてよろしくですね」  
千冬さんの言葉の後、みんなが挨拶をすると着物姿の女将さんが丁寧なお辞儀をした。

「はい、じゅうじゅう。

今年の一年生も元気があつてよろしくですね。あら、じゅうじゅうが噂の

……

俺と一夏を見てから千冬さんに伺つてゐる。

「ああ、噂つていうのは、HIS操縦者（男）ってやつか。

「ええ、まあ。今年は男子が一人いるせいで浴場分けが難しくなつて申し訳ありません」

「いえいえ、お客様のご要望にお答えするのも

こちらの仕事なので気になさらぬでくださいな。それよりいい男の子ではありますか」

「ええ、今回初めての男子となります。お前ら挨拶をしろ」

「初めまして、織斑一夏です」

「あらあら、弟さんですよね？」

「……まあ不出来な弟ですがね」

「うふふ、千冬さんは弟さんには厳しいのね  
しっかりしてるように見えるのに。それでどちらのかたは？」  
女将さんが俺の方へ視線を向け、聞いてきたので俺は答える。

「黒川優哉です。短い間ですがよろしくお願ひします」

「あらあら、これはジーナ寧にありがとうね。

それにしてもホント、千冬さんから聞いてなかつたら  
男だと信じられないぐらい綺麗な顔と髪ね」

「ありがとうございます」

普段なら女みたいだと言われてるより怒るのだが、  
今回は悪気ないみたいだったので怒るのはやめる。

「ね、ね、ねー。おりむー」

この独特な一夏の呼び方は、のほほんさんだな。

「おりむーの部屋どこー？」一覧に書いて無かつたー。遊びに行くから教えてー」

「いや、俺も知らない。廊下にでも寝るんじゃねえの？」

「わー、それはいいねー。私もそうしようかなー。あー、床つめたーーいつてー」

のほほんさんならやりかねないな。

実際にやついたら、俺は止めるけどな。

「織斑、黒月、お前らの部屋はいつちだ。ついてこい」

「あ、はー」

「ついーす」

のほほんさんが一夏に寝る場所を教える前に、千冬さんから呼び出しを喰らひ。……俺だと。

「教員用の隣？」

教員用の隣の部屋だつた。

まあ、なんでこうしないといけないのか大体の予想はつくがな。

「最初はお前らだけでの部屋を用意していたのだが、

それをすれば確実に消灯時間を過ぎた馬鹿どもが押し寄せる事を考えて、

私の部屋の隣と云つわけだ。ちなみに山田先生は上の教員用を使っている、

簡単に言えば私が「」の理由は貴様らのボディガードだと思え、わかつたな？」

「了解

「ういっす

「それでは部屋の確認が終了した、お前ら今日一日遊んで来い！」

「了解

「ういっす

俺らが旅館を出て海に出るために、着替えをするための別館に向かおうとしていると、ナニカをガン見している筈に出会った。

「おーい筈へどうしかしたか？」

と、俺が声をかけると筈はこちらを見てきた。

「なあ、これって」

そして筈の視線があつた場所を見ると、

「私は知らん」

筈はそつそつと更衣室のほうに向かっていった。

ちなみに視線の先にあつたのは、

「ウサ耳だなこれ……」

一夏が指でさしながら言つている、間違いなくこれはあの人のものだろうな。

しかも「丁寧に『引っ張つてください』といつ明記してある。

こんなの明記されると、本当に引っ張りたくなつちやうよな。でも、これを引っ張るとめんどくわくなるし……。

「おー、一夏。そんなの無視して……」

「えつ！？」

時、既に遅し。

一夏はウサ耳を引っ張ってしまった。

「一夏、避ける！？」

俺の言葉と同時に空からナニカが降つてくる。  
ま、降つてくるのは、ウサ耳装備の天災だらうけどな。

……面倒くさくなりそうだ。

「あつはつは！！引つかつたね、いつくん！！」

俺の目の前では俺の言葉が聞こえなかつたのか、尻餅をついている  
一夏がいた。

そして謎の飛行物体——巨大なにんじんから出てきたのは、  
うさ耳装備の天災こと、篠ノ之 束だった。

——ホント、もっと普通に登場してくれないかな？

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危づくぜ」かの偵察機に  
撃墜されそうになつたからね。

私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい

そりやあミサイルで飛んでたら撃墜するわ、普通に。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ゴーくんもおひさー

「そうですね。お久しぶりです」

「うんうん、本当に久しいねー。といひで一人とも、篠ちゃんはど

「かな？」

さつきまで一緒にいたよね？トイレ？」

きょりきょりと周りを見渡す博士。その頭の上のウサリリもそれこそ

合わせて動く。

「えっと……」

束さんの質問に一夏は答えられないでいた。

まあ、確かにその気持ちはわかるぜ。

『あなたを避けていました』なんて言えねえもんな。

「俺達にもわかりません。

そこにあつたうさ耳に氣を取られた隙にいなくなつてたんですから」「そつかーまあ、この私が開発した『篠ちゃん探知機』ですぐ見つ

かるよ。

じゃあね、いっくん、ユーくん。またあとでね！」「それだけ言つとものすごい速さで走り去っていく。

が、俺が気にしていたのはそんなことじやなかつた。

『じゃあね、いっくん、ユーくん。またあとでね』  
また後で……。

これが意味するのは、また天災と会つてこいこと。

そしてあの人と会つてこいことが意味するのは、  
また事件が起る可能性があるとこいこと。

(……あの人、また何かしかつもつりなのか？)

「……何だったんだ、一体」

「……今は気にならないほうがいいかもな。とつとと着替えに行こうぜ」

「あ、ああ。そうだな」

束さんの最後に言つた言葉が気になるが、今は気になることじつよ。

俺たちは男子用に割り振られた更衣室に向けて再び歩を進めた。

## 34話 オーランズ・イレブン

更衣室で水着に着替え、海に向かう。

一夏は黒のトランクスタイルの水着で、

俺は一夏の水着の色違いver.だ。ちなみに色は紺色。

「あ、織斑くんだ！」

「黒月君も一緒だー！」

「う、うそっ！わ、私の水着変じやないよねー？大丈夫だよねー？」

「わ、わ～。体かっこい～。鍛えてるね～」

そうか？自分ではあんまりわからないんだが、  
つてか、体かっこいってどういう意味だ？

「あとでビーチバレーしようよ～」

「ああ、そうだな。時間があればいいぜ」

ビーチバレーって砂浜でやるバレーボールだよな。

なんか楽しそうだし良いかな。

……ほとんど女子だから手加減はしたほうが良いかも知れないけど。

「さて、と。準備運動も終わつたし、そろそろ泳ぎに行くか」

「そうだな。海で泳ぐのは久しぶりだし楽しみだな」

準備運動を終え、いざ海に向かつて歩き出す。のだが

「い、ち、か～～～～！」

いきなり鈴が一夏に飛び乗つかった。

鈴つて猫みたいだな。気まぐれなところや身軽なところとかが。

「お、おい！ いきなり乗つかるなって！」

「いいじやない、別に」

「じゃ、俺は他のところ行つてくるわ」

「ちょ、優哉！ 俺を見捨てていくのかー？」

「……じゃあな！」

後ろから一夏の声が聞こえるが、聞こえないフリをしてその場を立ち去る。

「あ、優哉。ここにいたんだ」

不意に呼ばれたので、声の方向を向いてみるとそこにはシャルと…。

「な、何だそいつは？ 新手のお化けか何かか？」

バスタオル数枚で頭から膝までを隠した奇妙奇天烈な存在がいた。

「ほら、出てきなつて。大丈夫だから」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

あれ？ 今の中はもしかしてラウラか？

それにしてもいつもより弱々しい声だな。

シャルはシャルで何か説得をしようとしてるし。

「ほーら、せっかく水着を着たんだから、優哉に見てもらわないと

「し、しかしだな。私にも心の準備という物が……」

そういうえばこいつらって同室になつたんだつたな。  
だからこんなに仲が良いと。

つてか、シャルって誰とでも仲良くなれるから凄いよな。

先月、ライバルとして戦つたのに、こんなに仲良くなつてるし。

「ふうん。二人が出てこないんなら僕、優哉と遊びに行こうかな」「な、なに?」

「うん、そうしよ。優哉、行こう」

そういううといきなり、手を引っ張られる。

ふとシャルの顔を見てみると、満面の笑みだつた。  
といつても、ただ単に笑つてるだけじゃなくて、  
悪戯が成功したときみたいな感じの笑みだ。

「ま、待て!わ、私も行こう!…」

「その格好のまんまで?」

「ええい! 脱げばいいんだろう脱げば!」

半ば、ではなく完全にやけくそでラウラはバスタオルをかなぐり捨てる。

そして、ラウラの水着姿が陽光の下にさらけ出された。

「わ、笑いたければ笑えばいい」

ラウラは、ふんだんにレースがあしわられた黒の水着を着ていた。  
一見、大人の下着に見えなくもない。

そして髪は普段のように伸したままでなく、鈴のよつた頭の両サイドで纏めている。

「……うん、普通に似合つてると思つけど」

「なつ……」

「ラウラってツインテールにすると、印象変わるんだな。

……可愛いよ、ラウラ」

「……つ／＼／＼／＼」

俺がそういうと顔を真っ赤にして、ラウラがぶつ倒れた。

「あー、あ、また出ちゃつたよ。

優哉の天然女説しモードが……」

ラウラがぶつ倒れたと同時に、香菜が俺の側まできて呟く。  
香菜が着ている水着は、オレンジのビキニなのだが、  
スカートみたいなのがつけていた。スカートの色は薄いオレンジだ  
った。

「……勝手に変な名前をつけるな！！

そして俺は天然でも女説しでもねえよ！！」

「「えつ……」」

あれ？なんで一人ともそんな顔をしてるんだ？

『この子、本気で言つてるの？バカなの？』的な表情を。

「あーー、今はそつじゃねえ。ラウラ、大丈夫か？」

「きゅうううう……」

あ、これは大丈夫じゃないパターンだね。  
どつか涼しい場所にでも連れていくか。

「……じゃ、俺はラウラを涼しい場所に寝かしに行つてくれる

ラウラをお姫様抱っこする。

——こいつ、軽いな。本当に飯食つてんのか？

「行つてらっしゃい」「

シャルと香菜に見送られ、俺は走り出す。

が、その前に言っておかないとけない言葉があつたので、走るのをやめ、一度だけ振り向く。

「二人の水着も可愛いよ。じゃあ、また後でな」「一人の水着の感想を言つていないと気づき、それだけ言つて俺は走り出す。

「……ホント、優哉はこきなりすぎると

「だよね。さすがの僕でもこれはビックリするよ

後に残つたのは、顔を真っ赤にする一人の乙女だった。

## オリヒロイン設定（前書き）

前に投稿した設定の追加Verです。

人気ヒロイン、香菜ちゃんのイラスト付きです！！

## オリヒロイン設定

神崎香菜 かんざきかな

性別 女

容姿 黒髪セミロング。七三分けにしてヘアピンで止めている。

体つきは良いとは言えない。良くいってスレンダー。

悪くいって貧弱……。

性格 優哉とは正反対で、家事全般がダメダメなズボラ。

補足 神様に送られた転生者。

原作情報は6巻ぐらいまで知ってる設定。

優哉に恋心を抱いている。キッカケは転生前の出来事（通り魔事件）。

専用IISは【不死鳥】

> 132463 — 3533 <

【不死鳥】 フェニックス

神崎香奈が作った第3世代型IS。

待機状態は

外見は【不死鳥】の名の通り、ほとんど真っ赤に染まっている。  
装甲の数は多くもなく少なくもなく標準的。  
そして背中に翼だいだいみたいなものが、2枚ずつ対になっている。  
背中の翼は少し橙だいだいがかってる。

### 特徴

黒月 優哉が手をつけるまでは遠距離特化型だったのだが、  
手をつけてからは近距離もいけるようになつた。つまりは万能型。

### 使用武器

・ 紅くれない

・ 刀剣ひりょう

・ 緋龍ひりゆう

ロングレンジのビームライフル。

外見は、『G E B』のステラスウォームを赤くした感じ。

・ 流星群

実弾式のマシンガン。

色は赤で、黒のラインが入つてゐる。

### ワントップ・アビリティ

单一使用能力

……後ほど公開。予定では原作3巻辺りかな。



## オリヒロイン設定（後書き）

これが可愛いと思った方、  
感想をよろしくお願ひします！！

イラストを描いてくれた友達に見せるので……。

### 35話 夕食

楽しい時間というのは簡単に過ぎていッキ。既に時間は夜の7時。浴衣に着替えた俺達、1年生共は大宴会場で豪華な夕飯を楽しんでいた。

「うん、美味しい！」

昼も夜も刺身だなんて、豪勢だよな

「そうだね。さすがI.S学園だよね」

俺の隣でシャルが刺身を食べながら言つ。

ちなみに俺もだけど、隣のシャルも浴衣姿だ。

なんでも、この旅館では『お食事中は浴衣姿で』といつ決まりがあるらしい。

なので俺達はソレに従つて浴衣姿なのだが、普通は禁止することじやないのか？

と思うのは俺だけだろ？

「う、うう……。私の嫌いな山菜がこんなに

これまた俺の隣で、呻く香菜。

ああ、そつかこいつの嫌いな食べ物つて山菜だつたかな。

……美味しいのにな。

「一回、食つてみろつて。美味しいぜ？」

「やだ。だつて美味しいもん」

「そんなこと言つてみ。

旅館にも迷惑だし、織斑先生の拳が待ってるぞ」  
俺がそういうと香菜はまたしても呻きだした。

……仕方がない。

「香菜、あーーん

「くつ？」

山菜を箸で摘み、香菜の口元へ持つていく。

「はい、あーーん」

「……あ、あーーん／＼／＼

頬を赤くしながら口を開ける香菜。

ま、恥ずかしいかも知れないけど、

これだけは食べて欲しいからな。本当に美味しいし。

「あ、美味しい」

「だろっ？」

だからお前の嫌いって言つのも、ただの食わず嫌いなんだよ

うん、やっぱりカワハギは美味しいな。

しかもこのカワハギ、キモ付きだし。

どんだけ高級食材を使ってんだよ。つてツツ「ヨミたいわ。

そんな風に色々と考えながら、食べていると、  
頬をさつきよりも赤くした香菜の顔があつた。

ま、いいや。

今は食うことだけに必死になろう。

「ふー、いい湯だつたなー」

豪華な夕食のあとに露天風呂。

それも俺一人の貸切だったこともあり、かなり気分がいい。  
そんな感じでブラブラと歩いていると、前から一夏が歩いてくるのが見えた。

「よつ、一夏。どうした？」

「いや、さつき千冬姉のマッサージをしててさ、  
また汗を掻いたからや。また風呂に入ろうかと  
ふーん、また汗を掻いた、ね。

「なら、俺もむつ一回、入ろうかな？」

「ここの露天風呂なら、ほとんど貸切だし」

「おお、じゃあ一緒に入ろうぜ」

何故か俺が入ると書いた途端、テンションがあがる一夏。

もしかして、ここに

「……………これなのか？」

「ちげえよーー！」

だよな。そりゃうたら、俺がかなり引くし。

### 36話 ガールズトーク

一夏と優哉の二人が露天風呂前ではしゃいでた頃。とある部屋で、ガールズトークが始まろうとしていた。

「ほれ、ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、あと紅茶とコーラだ。

それぞれ他の飲み物がいいやつは、各人で交換しろ」千冬は旅館に備え付けられている冷蔵庫から飲み物を取り出して6人に渡す。

順番に筈、シャルロット、鈴、ラウラ、セシリ亞、香菜だ。皆してこの飲み物で良かつたのか、交換することはなかつた。

「い、いただきます」

6人がそれぞれの飲み物を飲んだのを確認してから、千冬は冷蔵庫からビールを取り出し、ビールを飲む

「んぐつ、んぐつ……プハツ。それじゃ聞くぞお前ら、あいつらの何処が良いんだ？」

あいつら。誰と誰を指すかは容易に想像できた。一夏と優哉しかい

ない。

「わ、私は別に……昔よりも、その……」  
ラムネを傾けながら言つ篇。

「腐れ縁なだけだし、そんな深い意味は無いし……」  
続いてスポーツドリンクのフチをなぞりながら言つ鈴音。

「ぐ、クラス代表として、私を下した者としてしっかりして欲しい  
だけですわ」と、セシリアが言つ。

「ふむ、そうか。では、そう一夏に伝えておひい  
「――言わなくていいです――」  
そんな素直になれない三人をニヤニヤ笑いながら見た後、  
千冬はビールを飲みながら、未だに黙っている三人に視線を向ける。

「ぼ、僕――私は……、優しいところ……です」  
ぽつりと呟くように言うシャルだが、小さな声だったが、その言葉  
の中には真摯な響きがあった。  
「確かに優しいが。あいつは誰にでも優しいぞ」「そう……ですね。そこはちょっと悔しいかなあ  
あはは、と笑いながら、シャルは熱くなつた頬を冷ますために手団  
扇で風を送つた。

「で、お前は？」

さつきから一言も発していないラウラに千冬は話を振る。そしていきなり千冬に話を振られたからか、ラウラはビックリと身体を竦ませながらも言葉を紡ぎ出した。

「つ、強いところでしょうか……」

「いや、弱いだろ?」

一夏に比べたら強いかも知れんが、と付け加える千冬。

「つ、強いです。少なくとも私よりは」

ラウラの答えに千冬はそうかねえ……。と眩きながら、

一本目の缶ビールを開ける。

「で、最後はお前だが……」

「――敢えていつとすれば、優哉の性格でしょうか」

香菜の答えにほう……。と関心すう千冬。

「優哉の自分に関わる全ての者を命懸けで助けようとする性格ですね。

実質、優哉に助けられた人もいるでしょう? 最近では、ラウラとか?」

「あ、ああ、そうだな」

「アレだって本当は助けなくとも良かつたはずですよ?」

あの前にはセシリヤや鈴に重症レベルまで、ケガをさせたんですから。

だけど、そんな敵だったはずなのに優哉は助けた。

……私は、そんな優哉の性格が好きなんですよ

誰もが、香菜の言葉を真剣に聞いていた。

一夏のことが好きな篠、鈴、セシリアや教師の千冬でさえも。

「まつ、優哉の一夏に負けないくらいの鈍感振りが偶に傷ですけどね」

ははっ、と香菜は苦笑いをする。

「私が優哉のことが好きな理由は以上です。」

「……まさか、お前がそこまで愛していたとはな。」

まあ、そんな感じに思われているあいつらだが、家事全般は優秀、料理もうまい。

——というわけで、あいつらと付き合ふる女は幸せだとこいつだ。どうだ？ 欲しいか？

えつー？と全員が顔をあげる。

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

ええーっと心の中で突つ込む6人。

「女ならな、奪うつもりでいかなくてどうする。」

自分を磨けよ、ガキども」

実際に楽しそうな表情で言つた冬。

### 37話 一日一日！

校外実習一日目。今日は午前から夜まで丸一日IISの各種装備試験運用とデータ取りを行う。

特に専用機持ちは大量の装備が待っているから大変だ。  
といつても、俺と一夏は試験武装がないので、  
他の人のサポートするぐらいしかないけどね。

「ようやく全員集まつたか。　　おい、遅刻者  
　　は、はい」

千冬さんに呼ばれて身をすくませたのは意外にもラウラだった。  
寝坊したらしく5分遅れてやってきたのだ。

珍しいな、ラウラが寝坊なんて。

「そうだな、IISのコア・ネットワークについて説明してみる」「  
は、はい。IISのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ  
通信ネットワークを持っています。

これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設け  
られたもので、

現在はオープン・チャネルとプライベート・チャネルによる操縦者  
会話など、通信に使われています。

それ以外にも『非限定情報共有』<sup>シェアリング</sup>をコア同士が各自に行うことで、  
様々な情報を自己進化として吸収しているということが近年の研究  
でわかりました。

これらは製作者の篠ノ之博士が自己発達の一環として無制限展開を  
許可したため、

現在も進化の途中であり、全容は掴めていないことです

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言られて息を吐くラウラ。よかつたといわんばかりの息を吐き

ようだ。

おそらくドイツ教官に織斑先生の恐ろしさを味わったのだろうな。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたE.Sの装備試験を行つよつに。」

専用機持ちは専用パートのテストだ。

織斑、黒月は他の者の補助に回れ。以上だ。全員、迅速に行え「生徒全員が返事をする。さすがに一年生全員が並んでるのでかなりの人数だ。

ちなみにここはE.S試験用のビーチ。

四方を切り立つた崖に囲まれている、ドームのようなところだ。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」「はい」

「お前には今日から専用」「

「ちーちゃん～～～～ん！……！」

砂埃を上げながら人影が走つてくる。無茶苦茶速い。その人物が

「……束」

天災だつた。まあ、来るんじゃないかとは思つてたけど、本当に来るとは……ね。

「やあやあ！ 会いたかつたよ、ちーちゃん！

さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ ぶへつ」

飛びかかってきた束さんを片手で掴む。それも顔面。加減もないアインクロードだ。

つてか、女同士でハグハグつて百合ですか？ とふと思つてしまつた俺は悪くない。……はず。

「「うぬせこぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクロードねつ」

千冬さんのアイアンクロードを抜け出し、そのまま束さんは箒の方を向く。

「やあ！」

「……どいつも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、箒ちゃん。特におっぱいが」

その瞬間、箒の持っていた木刀の鞘が束さんの脳天に直撃した。うわあ、あれは痛い。

「殴りますよ」

「な、殴つてから言つたあ……」

そんな姉妹のやり取りを、周りがぽかんとして見ている。織斑姉弟はまた始まつたと言つたような表情で眺めている。たぶん俺も同じような顔をしてるんだろうね。

「え、えっと、この合宿では関係者以外　　」

「んん？ 奇妙奇天烈なことを言つね。

ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にはいないよ

「えつ、あつ、はいつ。そ、そうですね……」

山田先生轟沈。の人には基本的に何を言つても無駄だ。好きにさせておくしかない。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困つている

「えー、面倒くさいなあ。私が天才の束さんだよ、はるー。終わりめつけや面倒そつにそれだけ言つた。

「束さん。もう少しちゃんとした方が……」  
「えー、いくらこっくんの頼みでもそれが駄目だよー。面倒だもん」「一夏が束さんに詰つが、いくら一夏でも束さんを他人と  
関わらせるような」とはできなかつたようだ。しょうがないといえ  
ばしょうがなーか。

「で、束さん。こんなことをするためだけに  
ここまで来たわけではないでしょー? 一体どうしたんですか?」  
「今日はお届けもがあつて来たんだー」

「お届けもの?」

「うん! やつと完成したからね~」  
やつと完成? そういうえばやつと篠が千冬さんに呼ばれてたな。  
……つてことは、もしかして?

「なら早速。 ああ、大空を『』覧あれ!」

束さんがびしつ、と大空を指差す。

するとその空から何か物体が落ちてくるのが見えた。  
……まさか、またにんじんじゃねえだろ? な?

空から落ちてきた大きな物体は巨大な金属の箱だった。

次の瞬間、正面の壁が倒れて中身が見える。

「じゃじゃーん！ これぞ篠ちゃん専用機」と『紅椿』！

全スペックが現行HSを上回る束さんお手製HSだよー。」

真紅の装甲の機体 紅椿は、

束さんの言葉に答えるように動作アームによつて外に出していく。

「さあー篠ちゃん、今からファイティングとパーソナライズをはじめようか！」

私が補佐するからすぐ終わるよん 」

「……それでは、頼みます」

「堅いよー。実の姉妹なんだし、いつもとキャッチャーな呼び方で

」

「はやく、はじめましょー」

篠は束さんの言葉を無視して行動を促す。  
少しほほこの人の言葉を聞いてやろうぜ？

ファイティングの最中、

「あの専用機つて篠ノ乙さんがもつれるの……身體つてだけで」

「だよねえ。なんかすることよねえ」

ふと群衆の中からそんな声が聞こえた。それに束さんが反応する。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？」

有史以来、世界が平等であつたことなど一度もないよ

ピンポイントに指摘を受けた女子が気まずそうに作業に戻つていいく。  
まったく、面倒なやつらだ。

……平等という言葉をいつなら、男女も平等にしきつづきだよ。

「あとは自動処理に任せればパーソナライズが終わるね。あ、いつくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよー」

「え、あ、はい」

一夏が展開した白式の装甲に束さんがコードを刺す。そして現れたディスプレイを見ながら束さんが言つ。

「ん……不思議なフラグメントマップを構築してゐるね。なんだろ? 見たことないパターン。いつくんが男の子だからかな? ちなみにフラグメントマップについては、IRSが独自に成長していくモノだそうだ。

まつ、人間でいう遺伝子みたいなもんだ。

「束さん、そのことなんだけど、

どうして男の俺や優哉がIRSを使えるんですか?」

「ん? ん? ……どうしてだろうね。私もさっぱりぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい? おそらくその分解対象に俺も含まれてるんだろうな。

「いい訳ないでしょ……」

「にやはは、そういうと思つたよん。

まあ、わかんないならわかんないでいいけどねー。

そもそもIRSって自己進化するように作つたし、

こういうこともあるよ。あつはつはつ

そういうこともあるのか?

なんかシックリこないつづーか、説明になつてないような気がするけど。

「ちなみに、後付装備ができるのはなんですか?」  
「そりや、私がそう設定したからだよん」

「え、ええっ！？ 白式つて束さんが作ったんですか！？」

一夏が束さんに尋ねる。それに束さんは表情を崩すことなく答える。

「うん、そーだよ。つていっても欠陥機としてポイされていたのを

もうひとつ動くようにいじつただけだけだねー。

でもそのおかげで第一形態から単一仕様能力が使えるでしょ？

超便利、やつたぜブイ。でねー、なんかねー、

元々そういう機体らしいよ？日本が開発してたのは

「馬鹿たれ。機密事項をべらべらバラすな」

千冬さんの打撃が束さんの頭に直撃する。もちろん手加減オフで。

「いたた。はー、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だね～」「やかましい」

さらににもう一発叩かれる。

あーあ、余計なことを鬼教官……もとい鬼教師にいつからそんなこと」と云。

「あ、あのっ！篠ノ之博士の『高名はかねがね承つておりますつ。もしよろしければ私の工房を見ていただけないでしょうかー？』誰かと思つたらセシリアだつた。

束さんを前に興奮しているのか、目が輝いている。だが

「はあ？ 誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そもそも今は篠ちゃんとちーちゃんといつくんとゴーくんと数年ぶりの再会なんだよ。そういうシーンなんだよ。

どういうア見で君はしゃしゃり出て來てるのか理解不能だよ。つていうか誰だよ君は」

突然の冷たい言葉。言葉だけではなく視線や口調もかなり冷たい。

「え、あの……」

「ハメ物」なあ。あつちこきなよ」

「ハ……」

少し涙目でセシリ亞が引き下がる。

束さんは、一夏と千冬、篠ノ井、俺ぐらいしか区別がつかないらしい。

あとは両親かな、と言つていただが本当にそれ以外の人間にはこんな感じである。

あ、ちなみに昔から香菜とは会わなかつたらしい。  
ところが、香菜が会おうとしなかつただけだけ。

「ふー、へんな金髪だつた。外国人は図々しくて嫌いだよ。  
やっぱ日本人だよね。日本人さいこー。まあ、日本人でもどうでもいいんだけどね。

篠ちゃんとか一ちゃんといつくんとユーくん以外は」

「あと、おじさんとおばさんもでしょ」

「ん? んー……まあ、そうだね」

なんか妙に引っかかる言ひ方だけ、気にしないほうがいいだろ?。

「まあまあ、そんな」とはぢりでもいいじゃない。

ところでいつくんさあー、白式改造してあげようか?」

「え。えーっと、どんな改造ですか?」

「つむ。執事の格好になるつてどうかな?

いつくんには前々から燕尾服が似合つと思つてゐるんだけど、もししくはメイド服」

「うん、良いんじゃない?」

一夏のメイド服姿……ふふふ、やべえ超似合つてる。

想像してしまい、笑ってしまう俺。

そしてそんな俺を見ながら一夏は――  
「いいです。それをするなりば、優哉のヒヒのほうが  
俺を生贊にしやがつた。てめえ、あとで覚えとけよ。」

「おおっ、それもいいね。」

ユーくんのメイド服姿……うううん、絶対似合つてよ  
「結構です!!」

「あー……」ほん、「ほん」

と、篠が咳払いをしながら話に入つてくる。  
そんなことせずに普通に入つてきたら良いの!!。  
束さんなら絶対にお前に反応するつづーの。

「ユーヒチはまだ終わらないのですか?」

「んー、もう終わるよー。じゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。  
篠ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

篠が意識を集中させた瞬間、紅椿は凄まじい速度で飛翔した。

「おおっ

「おおっ

大量の砂煙が舞い上がる中、紅椿の飛翔を視認できたのは俺だけだ  
った。

上空一百メートルほどどの所で篠が滑空していると、オープン・チャ  
ネルで束さんが語りかけた。

「どうどう~、篠ちゃんが思つた以上に動くでしょ?」

「え、ええ……、まあ」

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨刃』、左のが『空裂』ね

束さんの台詞に応えるように、篝は流れのような動作で腰から一本の刀を抜き取る。

「雨月は対单一を想定した武装でね、  
打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を連射して敵を蜂の巣に…。  
する武器だよ」

束さんの説明を受け、篝は雨月を突きの構えにした。  
仮装の相手を目の前に創り上げ、その敵を一撃で貫き通す。  
すると、雨月が突きを放つた周囲に幾つもの赤い球体が出現し、  
空をゆっくりと流れしていく雲にたくさんの穴を穿つた。

「続いて空裂ねえ～。こっちは対集団の武装だよ。  
斬撃に合わせて攻性エネルギーをぶつけるんだよ。  
そいじゃこいつを打ち落としてみてね」  
ポチッとな、と束さんは十六連装ミサイルポットをホール。  
形を成した瞬間に全てのミサイルを吐き出せせる。

「篝！」

一夏が叫ぶが、それは要らぬ心配だった。

「……やれる！ この紅椿なら…」

右脇下に構えた空裂を一回転するように振り抜き、  
赤い帯状のレーザーを展開させる。

篝の周囲に帯状に広がったエネルギーは全てのミサイルを撃墜した。

「すげえ……」

全員がその圧倒的なスペックに驚き、そして魅了され言葉を失つてしまふ。

……俺と香菜と千冬さん以外は、ね。

「全員、注目！」

不意に千冬さんの声が聞こえてくる。何かと思い、先生の方を向く。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。

今日のテスト稼動は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。  
連絡があるまで各自室内待機すること。

以後、許可なく室内から出た者は我々で拘束する！以上だ！」

「「「はっ、はいっ！」」

全員が慌てて動きはじめる。なんだ？

特殊任務行動つて非常事態と考えるのが自然か。

「専用機持ちは全員集合しろ！」

織斑、黒月、神崎、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、鳳！

それと、篠ノ之も来い

「はい！」

篝が気合の入った返事をする。

専用機持ち全員を集めるなんて一体何なんだ。



## 37 話　—田田アーティ（後書き）

イラストを描いてくださった人が  
歌つてみたそうです。

詳しくはこちりで

http://koebu.com/koe/766c2b71c  
8adef568e6b218bf33a813edec5c9  
これだけ載せてると怪しく思えるかも知れませんが、  
至って普通のこえ部というサイトなので、ご安心くださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6111u/>

---

IS～漆黒の守護者～

2011年10月10日02時43分発行